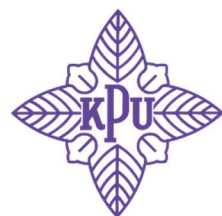


2022年度

専任教員の教育・研究業績

2022. 9



神戸薬科大学

Kobe Pharmaceutical University

目次 (専任教員の教育・研究業績)

	頁		頁		頁
北川 裕之	1	山本 克己	98	竹下 治範	192
向 高弘	7	國東 ゆかり	101	鎌尾 まや	197
小林 典裕	12	小椋 千絵	103	泉 安彦	203
江本 憲昭	15	竹内 敦子	105	細川 美香	206
内田 吉昭	18	赤井 朋子	108	増田 有紀	209
沼田 千賀子	20	竹仲 由希子	112	堀部 紗世	211
加藤 郁夫	26	佐々木 直人	114	森田 いずみ	214
小西 守周	29	八巻 耕也	117	富田 淑美	217
力武 良行	32	児玉 典子	120	河野 裕允	220
長谷川 潤	35	灘中 里美	123	山田 泰之	223
坂根 稔康	38	安岡 由美	127	山崎 俊栄	226
奥田 健介	41	中山 喜明	130	高木 晃	228
土反 伸和	45	中島 園美	133	安井 基博	231
小山 豊	49	古林 呂之	137	田中 晶子	234
國正 淳一	52	佐野 紘平	140	中山 啓	237
玉巻 欣子	54	小門 穂	144	寶田 徹	239
上田 昌史	58	原 哲也	147	平田 翼	241
大河原 賢一	62	河内 正二	150	木口 裕貴	243
波多野 学	65	大山 浩之	153	田中 亨	245
田中 将史	69	都出 千里	156	安宅 弘司	247
白木 孝	72	武田 紀彦	159	清水 涼平	249
山野 由美子	75	多河 典子	163		
畑 公也	79	上田 久美子	165		
中山 尋量	81	三上 雅久	170		
松家 次朗	84	西村 克己	174		
安岡 久志	87	猪野 彩	176		
奥川 斉	89	西山 由美	178		
河本 由紀子	91	藤波 綾	182		
高尾 宜久	93	土生 康司	185		
福井 英二	96	前田 秀子	189		

専任教員の教育・研究業績

所属 生化学研究室	職名 学長・教授	氏名 北川 裕之
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） (1) 本学薬学部学生への教育	1997年4月-現在に至る	<p>学部学生に生化学と分子生物学の講義を行っている。</p> <p>1) 担当している分野の進歩は著しいので、下記の編集担当した教科書を用いながら、講義に関連する内容における最近の発見や注目されている事項（新しい遺伝子医薬品の開発例や病因の解明など）について資料を作成し、適宜配付している。</p> <p>2) できるかぎり疾患、診断薬、治療薬に関連する事項を重点的に解説している。</p> <p>3) 薬剤師国家試験の難易度を学生に意識させるために、過去に出題された国家試験の問題を10問程度選び、Webclassを用いて、6回確認テストとして実施している。また、更に知識を定着させるために、この問題の一部を定期試験に出題している。</p> <p>4) 講義終了後にレポート課題を与え、1週間後に解答を提示し、自ら添削を行ったものを提出させている（3回程度）。</p> <p>5) 学生による授業評価は、本学では2004年度より2年に一度行われているが（2021年度からは毎年）、生化学、分子生物学ともに平均以上の評価を得ている。特に、最近行われた6回の授業評価では、いずれもベストティーチャー賞を受賞した（下記の4を参照）。</p> <p>学部学生に生物学系の実習指導を行っている。</p> <p>1) 組換え医薬品に関する理解を深めさせるために、最新の遺伝子工学に関する動向を反映するような実習内容に随時変更を行い、実習テキストも改訂している。</p> <p>2) 実習時間の最後に学生個々と教員が実習内容について質疑応答を行い、その日に行った実習を理解できるようにしている。</p>

		<p>3) 学生による実習評価も毎年行われているが、平均以上の評価を得ておりおおむね好評である。</p> <p>学部学生に卒業研究の指導を行っている。</p> <p>1) 学生個々に実験に対する目的意識を持たせるよう、随時質疑応答を行っている。</p> <p>2) 論理的な考え方や表現力が身に付くように、定期的に研究内容を学生にまとめさせ、発表する機会を与えている。</p> <p>3) できるかぎり英文で書かれた論文を読むように奨励し、少なくとも年に一度はその内容をまとめて発表する機会を与えている。</p>
(2) 本学薬学研究科大学院生の教育研究指導	1994年4月-現在に至る	<p>大学院薬学研究科院生への生化学(生命科学)特論講義と演習及び研究指導を行っている。</p> <p>1) 講義は、最新のデーターを分かりやすく解説するために、動画を用いたパワーポイントを使用している。</p> <p>2) 演習時には、研究分野の最近の動向を学生に把握させるため、学生が主体的に国際的な雑誌に発表された論文を論理的に説明でき、活発に討論に参加できるように演習日の少なくとも2日前までにはレジュメを全員に配付することを義務づけている。</p> <p>3) 学生に論理的な思考力と表現力が身に付くように、定期的に自分の研究内容を発表させ、研究室での討論を行い、そのことを通じて現在の自分の研究内容の進展状況や問題点も把握出来るように指導している。</p> <p>4) 学生には、少なくとも毎年一回は学会発表できるように指導している。</p>
(3) 医学部学生への教育	2008年4月-現在に至る	神戸大学医学部2年生に生化学(糖質の構造と機能)の講義を行っている。
(4) 医学研究科大学院生への教育	2007年4月-現在に至る	神戸大学大学院医学研究科院生に薬物治療学の講義を行っている。
(5) 他の研究科の大学院生への教育	2006年11月	北海道大学大学院先端生命科学の院生に糖鎖生物学の講義を行った。
	2007年6月	北陸大学大学院薬学研究科院生に糖鎖生物学の講義を行った。
	2008年5月	京都大学大学院生命科学研究所院生に糖鎖生物学の講義を行った。
	2010年2月	九州大学大学院システム生命科学府院生に糖鎖生物学の集中講義(10時間)を行った。

	2016年6月	名古屋大学大学院工学研究科院生に糖鎖生物学の集中講義（10時間）を行った。
2 作成した教科書、教材、参考書		
NEW生化学第2版（廣川書店、編集：堅田利明、菅原一幸、富田基郎）	2006年3月31日	「IV.4 組換えDNA技術と薬学への応用」を記述した（pp. 481-517）。
スタンダード薬学シリーズII 4 生物系薬学 I.生命現象の基礎（東京化学同人、日本薬学会編）	2015年3月30日	「第5章 糖質」を記述した（pp. 28-34）。
ニューダイレクション薬学生生化学（京都廣川書店、編著：北川裕之、山田修平）	2020年9月4日	本教科書全体の編集に携わった。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 特になし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
ベストティーチャー賞（2年ごとに表彰、ただし2014年度は表彰なし、また2018-2020年度は既受賞者の表彰なし、2021年度からは毎年表彰へ変更）	2006年度、2008年度、2010年度、2012年度、2016年度、2021年度	生化学III(2006年度)、分子生物学I(2008年度)、分子生物学I(2010年度)、分子生物学I(2012年度)、分子生物学Iおよび生化学III(2016年度)、分子生物学I(2021年度)
入試部長	2007年4月1日-2008年3月31日	高大連携プログラムの構築に携わった。
大学院主幹	2008年4月1日-2010年3月31日	大学院薬学研究科薬科学専攻設置申請に携わった。
教務部長	2010年4月1日-2012年3月31日	薬学6年制におけるカリキュラムの改正に携わった。
入試部長	2012年4月1日-2014年3月31日	高大連携プログラムの拡充、ネット出願の設置、入試制度の改革に携わった。
学生就職部長	2014年4月1日-2018年3月31日	本学奨学生制度の拡充、4年時生の「キャリアデザイン講座」の発足に携わった。
キャリア支援部長	2018年4月1日-2019年3月31日	キャリア支援プログラムの改革に携わった。
副学長	2018年4月1日-2022年3月31日	
研究活動		
1 . 著書・論文等		

氏名	種別	内容
Nadanaka, S., Kinouchi, H., and Kitagawa, H.	論文	J. Biol. Chem. 2018, 293, 444-465. "Chondroitin sulfate-mediated N-cadherin/ -catenin signaling is associated with basal-like breast cancer cell invasion."
Sakamoto, K., Ozaki, T., Ko, Y.-C., Tsai, C.-F., Gong, Y., Morozumi, M., Ishikawa, Y., Uchimura, K., Nadanaka, S., Kitagawa, H., Zulueta, M. M. L., Bandaru, A., Tamura, J., Hung, S.-C., and Kadomatsu, K.	論文	Nature Chem. Biol. 2019, 15, 699-709. "Glycan sulfating patterns define autophagy flux at axon tip via PTPR - cortactin axis."
Shida, M., Mikami, T., Tamura, J., and Kitagawa, H.	論文	Biochim. Biophys. Acts. 2019, 1863, 1319-1331. "Chondroitin sulfate-D promotes neurite outgrowth by acting as an extracellular ligand for neuronal integrin V 3."
Nadanaka, S., Hashiguchi, T., and Kitagawa, H.	論文	FASEB J. 2020, 34, 8385-8401. "Aberrant glycosaminoglycan biosynthesis by tumor suppressor EXTL2 deficiency promotes liver inflammation and tumorigenesis through Toll-like 4 receptor signaling."
Kitazawa, K., Nadanaka, S., Kadomatsu, K., and Kitagawa, H.	論文	Commun. Biol. 2021, 4, 114. "Chondroitin 6-sulfate represses keratinocyte proliferation in mouse skin, which is associated with psoriasis."
2 . 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
コンドロイチン硫酸鎖による新たな細胞増殖の制御機構	2018年11月	第16回糖鎖科学コンソーシアムシンポジウム
Deciphering the structural and functional diversity of chondroitin sulfate chains in the brain.	2018年12月	Controlling neuronal plasticity; developmental disorders and repair
Chondroitin sulfate-sensing systems that regulate neurite outgrowth	2019年5月	Glyco-Neuroscience Workshop
Deciphering roles of chondroitin sulfate by sugar-remodeling	2020年1月	107th Indian Science Congress
硫酸化グリコサミノグリカンの合成異常による炎症性疾患発症機構の解析	2021年11月	第94回日本生化学会大会

学会等および社会における主な活動	
2006年4月～現在に至る	日本生化学会近畿支部 幹事
2006年4月～現在に至る	プロテオグリカンフォーラム 世話人
2007年4月～2013年12月	FCCA:Forum Carbohydrate Coming of Age 幹事
2007年4月～2013年12月	Trends in Glycoscience and Glycotechnology 編集委員
2007年8月～現在に至る	日本糖質学会 評議員
2008年1月～2011年12月	Journal of Biochemistry, Advisory Board
2008年7月～2013年3月	神戸大学グローバル COEプログラム「次世代シグナル伝達医学の教育研究国際拠点」事業推進担当者
2009年1月～2017年12月	Glycoconjugate Journal 編集委員
2009年4月～現在に至る	神戸がん研究会 世話人
2009年4月～現在に至る	日本結合組織学会 評議員
2009年10月～2011年9月	日本生化学会 代議員
2010年9月～2010年11月	日本薬学会学会賞第1次選考委員
2012年4月～2017年3月	私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「疾患糖鎖生物学に基づく革新的治療薬の開発」研究代表者
2012年6月～2013年11月	科学研究費委員会専門委員
2012年11月～現在に至る	日本糖鎖コンソーシアム(JCGG) 幹事
2013年9月～2013年11月	日本薬学会学会賞第1次選考委員
2014年1月～2019年12月	日本生化学会 「生化学」誌企画委員
2015年4月～現在に至る	Scientific Reports 編集委員
2015年11月～2019年10月	日本生化学会 代議員
2015年11月～現在に至る	日本生化学会 評議員
2016年1月～2017年12月	Journal of Biochemistry, Associate Editor
2015年6月～2016年5月	第63回日本生化学会近畿支部例会長
2016年8月～2017年7月	特別研究員等審査会専門委員、国際事業委員会書面審査員・書面評価員、及び卓越研究員候補者選考委員会書面審査員
2017年12月～2019年11月	科学研究費委員会専門委員
2018年1月～2021年12月	Journal of Biochemistry, Editor
2018年4月～現在に至る	「ひょうご産学連携コーディネーター協議会」運営委員および「TL0ひょうご協議会」運営委員
2019年6月～2019年11月	国際科学研究費委員会専門委員
2019年4月～2021年3月	日本薬学会 理事
2020年7月～現在に至る	公益財団法人水谷糖質科学振興財団 選考委員
2021年9月～現在に至る	日本生化学会近畿支部長
2021年11月～現在に至る	日本生化学会 理事
2021年9月～2021年11月	日本薬学会学会賞第2次選考委員
2022年3月～現在に至る	Frontiers in Cell and Developmental Biology, Associate Editor

北川

2022年6月～現在に至る	Molecular Biology Reports, Associate Editor
2022年7月～現在に至る	Proteoglycan Research 編集委員
2022年5月～現在に至る	公益財団法人日本高等教育評価機構 大学機関別認証評価員
2022年6月～現在に至る	一般社団法人日本私立薬科大学協会 理事
2022年6月～現在に至る	全国薬科大学長・薬学部長会議 常任理事
2022年7月～現在に至る	一般社団法人薬学教育協議会 業務執行理事

専任教員の教育・研究業績

所属	薬品物理化学研究室	職名	教授	氏名	向 高弘
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
(1) 本学薬学部学生への教育(講義、実習) 物理化学II 放射化学 物理化学系実習		2011年4月～現在	COVID19以前は、授業についてデジタル教材化し、DVDラーニング、e-ラーニングを実施した。また添削アルバイトを活用し、問題演習の添削を実施した。COVID19対策として授業のオンライン動画とともに各講義毎にGoogleフォームによる確認テストを行った。 現在は、対面授業を中心に講義をzoom配信するとともに、各講義毎にwebclassでの確認テストを行っている。 物理化学系実習では視聴覚教材を使用している。		
(2) 本学薬学部学生への教育(卒業研究指導)		2011年4月～現在	生命・自然現象の解明と疾患の新たな診断法・治療法の開発を目指した研究を指導している。 指導学部学生が以下の学会賞を受賞した(2017-2021年分)。		
		2017年10月14日	・第67回日本薬学会近畿支部大会 優秀ポスター賞(2名)		
		2018年9月8日	・第2回日本核医学会分科会放射性薬品科学研究会 CKJSRS2018トラベルグラント受賞		
		2018年10月13日	・第68回日本薬学会近畿支部大会 優秀ポスター賞		
		2018年11月4日	・The 10th China-Japan-Korea Symposium on Radiopharmaceutical Sciences Best Postar Award		
		2021年10月9日	・第71回日本薬学会関西支部大会 優秀ポスター発表賞		
(3) 本学薬学研究科大学院生への教育 物理系基礎創薬学特論、物理系創薬学特論		2011年4月～現在	大学院生への講義と研究指導を行っている。 指導大学院生が以下の学会賞を受賞した(2017-2021年分)。		
		2021年10月2日	・JCA若手研究者ポスター賞		
(4) 他大学での講義		2016年6月	京都大学大学院薬学研究科の大学院生に基盤物理化学特論の講義を行った。		
2 作成した教科書、教材、参考書					

放射化学・放射薬品学（第2版）	2011年12月30日	廣川書店(佐治英郎編集)の第2版の「第5章 原子核反応と放射性同位元素の製造」を執筆した。
新 放射化学・放射医薬品学（改訂第4版）	2016年8月15日	南江堂(佐治英郎ら編集)の改訂第4版の「第1章 原子核と放射能」を執筆した。
新 放射化学・放射医薬品学（改訂第5版）	2021年8月15日	南江堂の改訂第5版の編集を担当するとともに「第1章 原子核と放射能」を執筆した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項 国家試験対策委員会委員 CBT実施委員会委員 大学院主幹 神戸市消防局員への放射線実習 神戸市消防局員への放射線実習 CBT実施委員会委員長 キャリア支援部長 神戸市消防局員への放射線実習 神戸市消防局員への放射線実習	2013年4月～2016年3月 2013年4月～2018年3月 2017年4月～2019年3月 2017年7月20日 2018年8月2日 2018年4月～2022年3月 2019年4月～2022年3月 2019年9月3日 2021年7月29日	物理系担当として、国家試験対策を実施した。 CBT体験受験、本試験、追再試験を実施した。 大学院教授会、学位論文審査会の運営を担当した。 神戸市消防局員12名に対し、放射線測定に関する実習を行った。 神戸市消防局員12名に対し、放射線測定に関する実習を行った。 CBT体験受験、本試験、追再試験を実施した。 キャリア支援プログラムの改善を実施した。 神戸市消防局員12名に対し、放射線測定に関する実習を行った。 神戸市消防局員12名に対し、放射線測定に関する実習を行った。
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Masayori Hagimori, Eri Hatabe, Kohei Sano, Hiroataka Miyazaki, Hitoshi Sasaki, Hideo Saji and Takahiro Mukai	論文	<i>Biological & Pharmaceutical Bulletin</i> , 40 (3), 297-302 (2017) "An activatable fluorescent -polyglutamic acid complex for sentinel lymph node imaging" (Highlighted Paper Selected by Editor-in-Chief) (Featured Article in J-STAGE)
Kohei Sano, Ling Bao, Natsuka Suzuno, Kento Kannaka, Toshihide Yamasaki, Masayuki Munekane and Takahiro Mukai	論文	<i>ACS Applied Polymer Materials</i> , 1 (5), 953-958 (2019) "Development of cancer-targeted single photon emission computed tomography/fluorescence dual imaging probe based on polyoxazoline"

Toshihide Yamasaki, Risa Azuma, Kohei Sano, Masayuki Munekane, Yuta Matsuoka, Ken-ichi Yamada and Takahiro Mukai	論文	<i>ACS Medicinal Chemistry Letters</i> , 11 (1), 45-48 (2020) "Radioiodinated nitroxide derivative for the detection of lipid radicals"
Kento Kannaka, Kohei Sano, Hiromichi Nakahara, Masayuki Munekane, Masayori Hagimori, Toshihide Yamasaki and Takahiro Mukai	論文	<i>Langmuir</i> , 36 (36), 10750-10755 (2020) "Inverse electron demand Diels-Alder reactions in the liposomal membrane accelerates release of the encapsulated drugs"
Risa Azuma, Toshihide Yamasaki, Kohei Sano, Masayuki Munekane, Yuta Matsuoka, Ken-Ichi Yamada and Takahiro Mukai	論文	<i>Free Radical Biology and Medicine</i> , 163 , 297-305 (2021) "A radioiodinated nitroxide probe with improved stability against bio-reduction for in vivo detection of lipid radicals"
2 . 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
がんの核医学診断を目的としたコンドロイチン硫酸被覆自己組織化ナノ粒子の開発 (優秀ポスター賞受賞)	2017年10月	第67回日本薬学会近畿支部大会
がんの光熱治療を目的としたコンドロイチン硫酸被覆金ナノロッドの開発 (優秀ポスター賞受賞)	2018年10月	第68回日本薬学会近畿支部大会
Thioflavin-TとCongo-redの融合化合物を母体とする全身性アミロイドーシス診断用放射性薬剤の開発	2020年11月	第60回日本核医学会学術総会
生体直交型反応による薬物放出を可能とする抗がん剤内封リポソーム製剤の開発 (JCA若手研究者ポスター賞受賞)	2021年10月	第80回日本癌学会学術総会
関節リウマチの診断、治療に資する蛍光色素標識酸化鉄ナノ粒子の開発 (優秀ポスター発表賞受賞)	2021年10月	第71回日本薬学会関西支部大会
3 . その他		
演題名	発表年・月	講演
ナノ粒子による分子イメージング	2017年2月	第14回OMIC事業推進セミナー
学会等および社会における主な活動		
1992年～現在	日本薬学会会員	

1997年～現在	日本薬物動態学会会員
1997年～現在	日本核医学会会員
2000年～現在	Society of Nuclear Medicine会員
2005年4月～2010年3月	薬学教育協議会放射薬学教科担当教員会議 薬剤師国家試験における放射薬学関連問題に対する検討WG 九州・中国・四国支部担当委員
2006年～現在	日本分子イメージング学会会員
2007年～現在	日本癌学会会員
2008年10月～2009年9月	日本核医学会 専門医・教育審査委員会 専門医試験小委員会委員
2009年～現在	Society of Radiopharmaceutical Sciences会員
2009年10月～2013年9月	日本核医学会 専門医・教育審査委員会委員
2011年～現在	日本アイソトープ協会会員
2011年5月～現在	日本薬学会近畿（関西）支部委員
2012年～現在	日本DDS学会会員
2013年1月～2015年3月	日本薬学会物理系薬学部世話人
2013年2月～現在	日本薬学会代議員
2013年4月～現在	日本薬剤学会会員
2014年9月～現在	日本がん分子標的治療学会会員
2015年5月～現在	金属の関与する生体関連反応シンポジウム（SRM）評議員
2016年4月～現在	薬学教育協議会放射薬学教科担当教員会議 薬剤師国家試験問題WG委員
2016年11月～現在	日本核医学会分科会 放射性薬品科学研究会 運営委員
2017年10月～2019年9月	日本核医学会評議員
2019年4月～現在	薬学教育協議会放射薬学教科担当教員会議 会長
2019年4月～2022年3月	日本薬学会関西支部幹事

向

2020年4月～現在	日本アイソトープ協会 企画専門委員会委員
2021年12月～現在	阪和第二泉北病院 放射性薬剤委員会・委員

専任教員の教育・研究業績

所属	生命分析化学研究室	職名	教授	氏名	小林 典裕
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日		概 要	
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2002.4.1～2021.12.31		<p>調査対象の期間にわたって、『分析化学I』（1単位，化学平衡），『分析化学II』（1単位，化学物質の検出と定量），『臨床検査学II』（1単位（50%を分担），分析技術の臨床応用），『分析化学系実習』（1単位，化学物質の検出と定量）を担当してきた。授業は，指定の教科書（次項参照）に加え，必要に応じてプリントを配付して併用した。隔年で行われる授業アンケートを参考に授業の改善を図っている。2019年度までは対面授業であり，板書を多用する授業スタイルであった。早くから蛍光色のチョークを採用し，できるだけ大きく鮮明に書くように心がけている。2020年度からはコロナ禍の影響でweb講義としている。授業のパワーポイント教材をを入念に作製し，随所に例題を配した。結果，対面講義より内容は充実した。また，自分のペースで反復学習できるためか，学生の試験の成績は格段に向上した。実習では，意欲と態度を重視している。実験開始前の講義では，標準的な実験法を教卓で自ら実演し，こまめに実験室を巡回して実技指導に努めている。</p>	
2	作成した教科書、教材、参考書	2008.1.1～2021.12.31		<p>下記の教科書の執筆に関わった。 『NEW薬品分析化学』（廣川書店，編著），『NEW薬学機器分析』（廣川書店，分担），『コアカリ対応 分析化学』（丸善，分担），『ベーシック薬学教科書シリーズ2. 分析科学』（化学同人，分担），『スタンダード薬学シリーズ2. 物理系薬学 IV. 演習編』（東京化学同人，分担），『薬学分析科学の最前線』（じほう，分担），『免疫測定法 - 基礎から先端まで -』（講談社，編著）。 『コアカリ対応分析化学』（丸善出版，編著）。 詳細については，研究活動の欄を参照のこと。このほか，学生実習用テキスト（『分析化学系実習』），授業用テキスト（『臨床検査学II』，『分析化学』）を作成し，活用した。</p>	
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等			特になし	
4	その他教育活動上特記すべき事項			2012.4～2014.3 学生就職部長 2019.4～2021.12 薬用植物園長	

研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Oyama H., Morita I., Kiguchi Y., Miyake S., Moriuchi A., Akisada T., Niwa T., Kobayashi N.	論文	Anal. Chem. 2017, 89(1), 988-995. "One-Shot in Vitro Evolution Generated an Antibody Fragment for Testing Urinary Cotinine with More Than 40-Fold Enhanced Affinity"
Y. Kiguchi, H. Oyama, I. Morita, M. Morikawa, A. Nakano, W. Fujihara, Y. Inoue, M. Sasaki, Y. Saijo, Y. Kanemoto, K. Murayama, Y. Baba, A. Takeuchi, N. Kobayashi	論文	Sci. Rep., 2020, 10, 14103. "Clonal array profiling of scFv-displaying phages for high-throughput discovery of affinity-matured antibody mutants"
H. Oyama, Y. Kiguchi, I. Morita, C. Yamamoto, Y. Higashi, M. Taguchi, T. Tagawa, Y. Enami, Y. Takamine, H. Hasegawa, A. Takeuchi, N. Kobayashi	論文	Sci. Rep., 2020, 10, 4807. "Seeking high-priority mutations enabling successful antibody-breeding: systematic analysis of a mutant that gained over 100-fold enhanced affinity"
H. Oyama, Y. Kiguchi, I. Morita, T. Miyashita, A. Ichimura, H. Miyaoka, A. Izumi, S. Terasawa, N. Osumi, H. Tanaka, T. Niwa, N. Kobayashi	論文	Anal. Chim. Acta, 2021, 1161, 238180. "NanoLuc luciferase as a suitable fusion partner of recombinant antibody fragments for developing sensitive luminescent immunoassays"
Y. Kiguchi, H. Oyama, I. Morita, Y. Nagata, N. Umezawa, N. Kobayashi	論文	Sci. Rep., 2021, 11, 8201. "The VH framework region 1 as a target of efficient mutagenesis for generating a variety of affinity-matured scFv mutants"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
免疫測定法の高感度化に資する高親和力変異抗体探索システム Clonal Array Profiling (CAP) 法の構築と応用	2021.1	第71回日本薬学会関西支部大会
VH-FR1へのアミノ酸挿入による抗コルチゾールscFvの試験管内親和性成熟	2020.1	第70回日本薬学会関西支部大会

In vitro affinity maturation of anti-cortisol antibodies to develop sensitive immunoassays	2019.5	European Congress of Clinical Chemistry and Laboratory Medicine
新世代の高性能イムノアッセイを目指す「抗体育種」	2018.8	日本分析化学会第67年会
アッセイ感度の向上を目指す「抗体育種」：抗コチニン抗体を例として	2017.7	日本法中毒学会第36年会
学会等および社会における主な活動		
2006年4月～2021年12月	日本分析化学会 近畿支部常任幹事	
2008年12月～2021年12月	日本臨床化学会 近畿支部評議員	
2007年4月～2014年6月	生物化学測定研究会 副会長	
2014年6月～2017年12月	生物化学測定研究会 会長	

専任教員の教育・研究業績

所属	臨床薬学研究室	職名	教授	氏名	江本 憲昭
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概	要	
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2008年4月1日	「生理学」6年制課程3年次	講義では視覚的な理解を促すために図表や写真を含めたパワーポイントファイルを提示しながら進めている。講義前にパワーポイントファイルの内容をプリントし、一部穴埋め形式にして配布している。講義内容については、臨床医としての経験に基づき、具体的な疾患や症例を提示しながら最近の臨床エビデンスなどを交えるなど、学生の学習意欲を高める工夫を行っている。また、知識を定着させる目的で、国家試験の問題を改変したものを講義終了前に提示し、その内容を解説している。	
		2009年4月1日	「薬物治療学」6年制課程4年次		
		2009年4月1日	「実務実習事前教育」6年制課程4年次		
		2011年4月1日	「処方解析」6年制課程6年次		
		2013年4月1日	「機能形態生理学」6年制課程2年次		
		2018年4月1日	「薬物治療学」6年制課程3年次		
		2019年4月1日	「薬物治療学」6年制課程4年次		
2 作成した教科書、教材、参考書		2008年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製		
		2009年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製		
		2010年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製		
		2011年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製		
		2012年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製		
		2013年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製		
		2014年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製		
		2015年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製		
		2016年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製		
		2017年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製		

	2018年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製
	2019年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製
	2020年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリント、スライドとeラーニング用の動画を作成
	2021年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリント、スライドとeラーニング用の動画を作成
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2015年4月～2017年3月	大学院主幹
	2019年4月～2022年3月	学生部長
	2022年4月～現在	学生支援センター長
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Ryanto GRT, Ikeda K, Miyagawa K, Tu L, Guignabert C, Humbert M, Fujiyama T, Yanagisawa M, Hirata KI, Emoto N.	論文	An endothelial activin A-bone morphogenetic protein receptor type 2 link is overdriven in pulmonary hypertension. Nat Commun. (2021) 12:1720. doi: 10.1038/s41467-021-21961-3.
Prabata A, Ikeda K, Rahardini EP, Hirata KI, Emoto N.	論文	GPNMB plays a protective role against obesity-related metabolic disorders by reducing macrophage inflammatory capacity. J Biol Chem. (2021) 297:101232. doi: 10.1016/j.jbc.2021.101232.
Adhikara IM, Yagi K, Mayasari DS, Suzuki Y, Ikeda K, Ryanto GRT, Sasaki N, Rikitake Y, Nadanaka S, Kitagawa H, Miyata O, Igarashi M, Hirata KI, Emoto N.	論文	Chondroitin Sulfate N-acetylgalactosaminyltransferase-2 Impacts Foam Cell Formation and Atherosclerosis by Altering Macrophage Glycosaminoglycan Chain. oscler Thromb Vasc Biol. (2021) 41:1076-1091. doi: 10.1161/ATVBAHA.120.315789.
Barinda AJ, Ikeda K, Nugroho DB, Wardhana DA, Sasaki N, Honda S, Urata R, Matoba S, Hirata KI, Emoto N.	論文	Endothelial progeria induces adipose tissue senescence and impairs insulin sensitivity through senescence associated secretory phenotype. Nat Commun. (2020) 11: 481. doi: 10.1038/s41467-020-14387-w.
Wardhana DA, Ikeda K, Barinda AJ, Nugroho DB, Qurania KR, Yagi K, Miyata K, Oike Y, Hirata KI, Emoto N.	論文	Family with sequence similarity 13, member A modulates adipocyte insulin signaling and preserves systemic metabolic homeostasis. Proc Natl Acad Sci U S A. (2018) 115: 1529-1534.
2. 学会発表		

演題名	発表年・月	学会名
Translational Research on Pulmonary Hypertension – From Bench to Bed –	2020年・10月	The 29th Annual Scientific Meeting of the Indonesian Heart Association (ASMIHA)
Endothelial Cell-Derived Activin A is Critically Involved in Pulmonary Arterial Hypertension through Mediating Bmpr-II Degradation in Endothelial Cell	2020年・7月	第84回日本循環器学会学術集会
Translational Research of Endothelin System, Pulmonary Hypertension and Diabetic Nephropathy	2019年・7月	Jogja Cardiology Update 2019 Indonesia
膠原病にはなぜ肺高血圧症が合併しやすいのか	2019年・6月	第4回日本肺高血圧・肺循環学会学術集会
静注PGI2製剤導入のタイミング：6th WSPHからのメッセージ	2018年・9月	第66回日本心臓病学会学術集会
学会等および社会における主な活動		
1987年6月～現在	日本内科学会	(2002年9月～現在：日本内科学会認定内科医、2014年12月～現在：日本内科学会総合内科専門医)
1987年4月～現在	日本循環器学会	(2004年3月～現在：日本循環器学会認定循環器専門医、2015年4月～2020年3月：日本循環器学会評議員)
2000年10月～現在	日本高血圧学会	(2009年10月～現在：日本高血圧学会評議員、2010年10月～現在：日本高血圧学会専門医)
2004年4月～現在	日本医学教育学会	
2012年11月～現在	国際心臓研究学会日本部会	(2012年11月～現在：国際心臓研究学会 日本部会 評議員)
2013年9月～現在	International Conference on Endothelin	International Advisory Board
2016年4月～現在	日本肺高血圧・肺循環学会	(2016年4月～現在：日本肺高血圧・肺循環学会常任理事)

専任教員の教育・研究業績

所属 数学研究室	職名 教授	氏名 内田 吉昭
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
数学Ⅰと数学Ⅱにおいて，習熟度別クラスの導入	2008年4月～現在に至る	入学してきた学生の数学における学力(高等学校での数学Ⅱの履修の有無など)に差があるので，習熟度別の授業を行っている．
統計学ⅠとⅡにおいて，サブノートの作成	2009年4月～現在に至る	統計学をなるべく視覚を使って理解してもらうために，グラフ等を多く使用したサブノートを作成して，授業の補助として使っている．
2 作成した教科書、教材、参考書		
数えて描いて塗って学ぶ グラフ理論ワークブック 内田吉昭著/日本評論社	2018年7月	
わかりやすい微分積分 内田吉昭/熊澤美裕紀共著 ムイスリ出版	2020年2月	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
研究活動		
1．著書・論文等		
氏名	種別	内容
2．学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Delta unknotting number one knots without ribbon singularity are prime	2018・1	第13回東アジア結び目スクール

内田

学会等および社会における主な活動	
1988年4月～現在に至る	日本数学会会員

専任教員の教育・研究業績

所属 総合教育研究センター	職名 教授	氏名 沼田 千賀子
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2009年～現在	大学院修士課程医療薬科学研修特論においては、緩和医療を中心に薬物療法と患者心理についての講義、ワークを行っている。ワークでは「死生観」について2～3人でのディスカッションを行い、「死」から見えてくる患者心理を感じられるように工夫している。
	2010年～現在	実務実習事前教育においては、5年次に行われる長期実務実習（病院・薬局）にスムーズに取り組めるよう、臨床現場で求められる知識・技能・態度の指導を行っている。また自己の到達度合いが分かるように「ルーブリック評価」を導入している。
	2011年～現在	薬害に関する講義および薬害被害者の体験談を聞く授業を実施し、学生が薬害について深く考え討議する機会となっている。
	2013年～現在	大学院がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン「地域・職種間連携を担うがん専門医療者養成」において、がん医療に従事する薬剤師の養成を行っている。「がん医療薬学特論」の講義・演習で模擬患者を使った服薬指導や海外から多職種連携の研究を行っている専門の先生を招聘し、ワークショップ形式での症例検討を行うなど、実践的な教育に取り組んでいる。
	2016年～現在	1～2年次生対象の「アクティブラボ」の科目では、本学の地域連携サテライトセンターにて隔月で開催している「メディカル・カフェ」に学生が参加し、がん患者やそのご家族、医療従事者と直接話をする機会を設けている。この経験が、医療者としての意識や資質の向上につながっている。
	2019年9月～現在	多職種連携の授業・演習として甲南女子大学看護リハビリテーション学部と共同で行うIPE科目「在宅医療演習」を2015年から打ち合わせを重ね、2019年9月から実施となった。演習で使用する症例は、実際に在宅で活躍している薬剤師5名にインタビューを行い、それを元に作成した。現場に近い内容や問題点を含んだ、実践的な内容になっている。
2 作成した教科書、教材、参考書	2012年3月15日	薬学生のための基礎シリーズ1 ヒューマニズム薬学入門（共著）
	2011年3月～現在	実務実習事前教育用テキストの作成

	2020年3月～現在 2021年3月～現在	処方解析 ， テキストの作成 社会薬学 ，補完代替医療テキストの作成
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2016年2月14日 2016年10月23日 2016年11月1日 2019年2月24日 2020年4月18日 2021年12月4日	第10回がんプロシンポジウム「がん患者の立場から、薬剤師教育を考える」 (大阪)講演 がんプロ連携7大学合同研修会「神戸薬科大学における「がん哲学学校 メディカル・カフェ」の取り組みと参加者および学生の意識変化について」 (大阪)講演 レギュラトリーサイエンスエキスパート研修会「薬学部における薬害教育の取り組み」(東京)講演 文部科学省：多様なニーズに対応する「がん専門医療人材(がんプロフェッショナル)養成プラン」事業「青少年へのがん教育～中学生に対するがん教育の実施および生徒の意識変化～」(大阪)講演 がん治療における患者支援のためのSP参加型ワークショップ(広島)講演、タスクフォース がん治療における患者支援のためのSP参加型ワークショップ、タスクフォース(WEB)
4 その他教育活動上特記すべき事項	2010年4月～現在 2010年1月～2016年 2012年4月～2017年3月 2014年4月～2016年3月 2015年4月～現在 2015年6月～現在 2015年6月～2017年3月	OSCE実施委員会 委員長 薬学教育者・薬剤師へのFD活動として、タスクフォースとして、薬剤師のためのワークショップin近畿に協力 がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン 「地域・職種間連携を担うがん専門医療者養成」 担当 学生就職委員会 委員 がん哲学学校 in 神戸 メディカルカフェを開催し、地域のがん教育を推進 甲南女子大学との連携教育プログラムワーキンググループ委員 地域連携教育推進ワーキンググループ委員

	2015年4月～現在	神戸薬科大学における人を対象とする研究倫理審査委員会委員
	2017年4月～現在	地域連携サテライトセンター運営委員
	2018年4月～2020年3月	学生委員会 委員
	2021年4月～現在	国家試験対策委員会 委員
	2021年4月～現在	キャリア支援委員会 委員
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
沼田千賀子	著書	薬学生のための基礎シリーズ1 ヒューマニズム薬学入門(共著) (2015.3.12)
寺岡麗子, 三宅真衣, 伊藤真依, 塩野朋香, 沼田千賀子, 中山みずえ, 岡本禎晃, 平井みどり, 湯谷玲子, 北河修治, 坂根稔康	論文	フィルムドレッシング材による1日1回型フェンタニルクエン酸塩経皮吸収型製剤の半量投与, 日本医療薬学会, 43(12), 671-679 (2017)
横山郁子, 浅田聖士, 藤本佳昭, 河内正二, 沼田千賀子	論文	中学生に対するがん教育の実施および生徒の意識変化, 日本緩和医療薬学雑誌, 11(3):73-79 (2018)
後藤恵子, 富澤崇, 有田悦子, 沼田千賀子, 野呂瀬崇彦, 井手口直子, 半谷真七子, 平井みどり	論文	かかりつけ薬剤師に求められるコミュニケーションスタンダード (Pharmaceutical Communication Standard) の構築, 日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会会誌, 17(2), 17-29(2018)
Hashimoto M., Aogaki K., Numata C., Moriwaki K., Matsuda Y., Ishii R., Tanaka I., Okamoto Y.	論文	Journal of opioid management, 2020,16(4), 247-252. "Factors influencing the prescribed dose of opioid analgesics in cancer patients"

2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
中学1年生を対象としたがん教育による意識変化	2017年6月	第11回緩和医療薬学会（札幌）
オピオイド系鎮痛剤の投与量に影響を与える因子の調査研究	2018年2月	第12回緩和医療薬学会（東京）
スボレキサントの不眠改善効果およびその因子に関する調査	2019年10月	第28回日本医療薬学会年会（福岡）
新人薬剤師に求められる基本的な社会的スキルに関する研究 - インタビューから得られた 6 年次生の心理 -	2020年9月	第5回日本薬学教育学会大会(東京 帝京大学 WEB)
中学生に対する学年縦断的がん教育の実施およびその教育効果	2021年6月	日本医療薬学会 第4回 フレッシュヤーズ・カンファランス
2. その他（講演等）		
演題名	発表年・月	講演場所
終末期の患者に対する精神的な支援	2017年2月	日本薬学会近畿支部 第4回在宅医療推進ワークショップ（大阪）
がんサバイバーの尊厳をサポートするコミュニケーション	2017年3月	がん治療における患者支援のためのSP参加型ワークショップ（大阪）

病気と老化の原因「活性酸素」について	2018年1月	阪神シニアカレッジ（兵庫）
カフェでコミュニティとつながる～神戸薬科大学の取り組み～	2018年9月	昭和薬科大学「昭薬祭」（東京）
健康と免疫力を める ～ミトコンドリアと腸内細 について～	2021年10月	阪神シニアカレッジ（兵庫）
学会等および社会における主な活動		
2002年5月～現在	日本医療薬学会会員	
2005年8月～現在	(社)兵庫県薬剤師会認定 禁煙指導認定薬剤師	
2006年4月～2020年5月	兵庫県病院薬剤師会 理事	
2006年4月～現在	日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会会員	
2007年3月～現在	日本緩和医療薬学会会員	
2007年4月～現在	日本ホリスティック医学協会会員	
2007年11月～現在	日本メンタルヘルス協会公認 心理カウンセラー	
2009年4月～2017年3月	6年制認定実務実習指導薬剤師	
2009年8月～2019年3月	日病薬認定指導薬剤師	
2009年10月～2014年10月	がん薬物療法認定薬剤師	
2011年4月～現在	ブザン教育協会マインドマップ®アドバイザー	
2015年1月～2020年3月	(財)レギュラトリーサイエンスエキスパート認定	
2015年4月～2017年3月	日本緩和医療薬学会 広報副委員長	

沼田

2015年7月～現在	(社)がん哲学外来 監事
2016年1月～現在	(社)がん哲学外来市民学会 がん哲学外来コーディネーター
2016年6月～現在	日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会 理事
2018年4月～現在	一般社団法人日本ファンクショナルダイエツ協会 ケツジェニツクダイエツアドバイザー
2019年3月～2021年3月	一般社団法人日本医療薬学会代議員
2019年8月～現在	(社)臨床分子栄養医学研究会 認定カウンセラー
2020年7月～現在	一般社団法人日本医療薬学 企画・シンポジウム委員会委員

専任教員の教育・研究業績

所属 病態生化学研究室	職名 教授	氏名 加藤 郁夫
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
(1)薬学部学生に対する教育	2013年4月～現在	神戸薬科大学3年次生の「内分泌学」、「薬物治療学Ⅰ」、「薬物治療学Ⅱ」および「臨床生化学実習」を担当している。
(2)大学院修士、博士課程学生に対する教育	2013年4月～現在	神戸薬科大学大学院薬学研究科修士課程学生（社会人、聴講生を含む）に対して、「病態解析治療学特論」を、また博士課程学生（社会人、聴講生を含む）に対しては、「病態薬理生化学特論」を担当：プリントを配布しパワーポイントを用いて解説を行っている。また、博士課程においては、最終時間に共通のテーマを与えて各学生に考察・発表を行わせ討論を行っている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
(1)講義資料の作成		学部3年次生の「内分泌学」、「薬物治療学Ⅰ」および「薬物治療学Ⅱ」では、独自のプリントを作成、学生に配布して、基礎から臨床に至る内容を講義した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
(1) CBT対策委員会委員	2013年4月～2014年3月	CBT対策の実施。
(2) 実務実習運営委員会委員	2013年4月～2016年3月	実務実習の円滑なる実施。
(3) 学生就職委員会委員	2014年4月～2016年3月	学生生活や就職活動の支援。
(4) 国家試験対策委員会委員	2014年4月～2016年3月	国家試験対策の実施。
(5) 共同研究委員会委員	2015年4月～2021年3月	共同研究の円滑なる実施。
(6) 教務委員会委員	2016年4月～2018年3月	教務関係の円滑なる運営。

(7) 研究設備等充実委員会委員	2017年4月～2019年3月	研究設備等の整備・充実（2018年3月～2019年4月：委員長）。
(8) 入試委員会委員	2018年4月～2020年3月	入学試験等の円滑なる実施。
(9) 中央分析委員会委員	2019年4月～2021年3月	中央分析機器の運営管理
(10) 教務委員会委員	2020年4月～2022年3月	教務関係の円滑なる運営。
(11) 図書選定委員会委員	2020年4月～2022年3月	図書選定の実施。
(12) 学生委員会委員	2022年4月～現在	学生生活の支援。
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Kaji I, Akiba Y, Kato I, Maruta K, Kuwahara A, Kaunitz J.D	論文	J. Pharmacol. Exp. Ther. 2017;361(1):151-161. ; Xenin augments duodenal anion secretion via activation of afferent neural pathways.
Słupecka-Ziemilska M, Grzesiak P, Jank M, Majewska A, Rak A, Kowalczyk P, Kato I, Kuwahara A, Woliński J.	論文	PLoS One. 2018;13(10):e0205994. ; Small intestinal development in suckling rats after enteral obestatin administration.
Kuwahara A, Kuwahara Y, Kato I, Kawaguchi K, Harata D, Asano S, Inui T, Marunaka Y.	論文	Am J Physiol Gastrointest Liver Physiol. 2019;316(6):G785-G796. ; Xenin-25 induces anion secretion by activating noncholinergic secretomotor neurons in the rat ileum.
Maruta K, Takajo T, Akiba Y, Said H, Irie E, Kato I, Kuwahara A, Kaunitz JD.	論文	Dig Dis Sci. 2020;65(9):2605-2618. ; GLP-2 acutely prevents endotoxin-related increased intestinal paracellular permeability in rats.
Kuwahara Y, Kato I, Inui T, Marunaka Y, Kuwahara A.	論文	Physiol Rep. 2021;9(4):e14752. ; The effect of Xenin25 on spontaneous circular muscle contractions of rat distal colon in vitro
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名

急性拘束ストレス負荷マウスにおけるRubiscolin-6の抗うつ効果	2018年11月	日本薬学会北陸支部第130回例会；佐藤玲菜、多河典子、加藤郁夫、光本泰秀。
Potent Antibacterial Activity of Peptides Designed from Salusin- and HIV-1 Tat (49-57)	2018年12月	10th International Peptide Symposium / The 55th Japanese Peptide Symposium. ; M Kimura, K Kosuge, Y Ko, N Tagawa, I Kato and Y Uchida.
Neurogenic relaxation of Xenin on spontaneous circular muscle contractions in rat distal colon	2019年3月	The 9th Congress of Federation of Asian and Oceanian Physiological Societies. ; Y Kuwahara, I Kato, A Kuwahara, Y Marunaka.
Secretory reflex pathway of Xenin-25 in the rat ileum	2019年3月	The 9th Congress of Federation of Asian and Oceanian Physiological Societies. ; A Kuwahara, Y Kuwahara, I Kato, T Inui, Y Marunaka.
腸管ペプチドxeninのELISA法の確立とマウス小腸組織での定量	2020年10月	第60回日本臨床化学会年次学術集会；多河典子、浅野真司、中張隆司、桑原厚和、丸中良典、加藤郁夫。
学会等および社会における主な活動		
1984年1月～現在	日本薬学会会員	
1986年8月～現在	日本ペプチド学会会員	
2006年5月～現在	日本内分泌学会会員	
2014年5月～現在	日本肥満学会会員	
2016年7月～現在	日本神経内分泌学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	微生物化学研究室	職名	教授	氏名	小西 守周
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日		概要	
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		微生物学 ～ 免疫学 2012年と 2013年度 免疫学 2014年～ 生物学系 実習 2009 年～2013年度 生物学系 実習 2014 年～2016年度 微生物学実習 2016年 ～ アクティブラボ 2015 年～ 卒業研究指導 2009年 ～	2009年 ～ 2012年と 2013年度 2014年～ 2009 年～2013年度 2014 年～2016年度 2016年 ～ 2015 年～ 2009年 ～	微生物学、については、アンケート結果に基づき、板書と教科書の併用で講義を進めてきた。免疫学は、講義時間、内容を考慮し、スライドとプリントによる講義を行ってきた。いずれの講義に関しても、できるだけ平易な表現を用いることで、理解しやすい授業を心がけている。さらに微生物学を含む生物系の他講義との関わりがある内容に関しては、復習を兼ねて質問を行い学生の集中力を維持できるようにしている。講義内容に関しては、最新の知見を取り入れつつ、薬剤師国家試験の出題範囲なども加味して、限られた講義時間の中に多くの内容を含むように無駄の無い授業を心がけている。また、いずれの講義も対象とする学生の知識レベルに合わせた講義を行うように努めている。2021年度は、いずれの講義も対面で実施した。微生物学では、例題などの配布を初めて行い、また成績状況に応じ補講プリントの配布も行なった。担当する実習は、内2016年に生物系実習から微生物学実習に名称が変更された。名称は変更されたものの、微生物の取り扱いに関する実習内容は大きく変更していない。実習では、できるだけ学生に考えることを推奨しており、知識や技術の習得だけではなく実験結果をもとに行う考察に関する指導に比較的多く時間をかけている。アクティブラボも微生物化学研究室として積極的に実施している。毎年、募集人数よりも多くの学生が希望しているため、教員数などを考慮し可能な限り多くの学生に研究を体験してもらっている。2021年度も16名に対し実施した。	
2 作成した教科書、教材、参考書		2015年		下記の教科書の執筆に関わった。 『薬学領域の微生物学・免疫学第2版』（廣川書店）	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		該当無し			

4	その他教育活動上特記すべき事項	該当無し	
研究活動			
1. 著書・論文等			
	氏名	種別	内容
	Nakagawa Y, Kumagai K, Han SI, Mizunoe Y, Araki M, Mizuno S, Ohno H, Matsuo K, Yamada Y, Kim JD, Miyamoto T, Sekiya M, Konishi M, Itoh N, Matsuzaka T, Takahashi S, Sone H, Shimano H.	論文	FASEB J. 2021, 35(6):e21663. doi: 10.1096/fj.202002784RR. "Starvation-induced transcription factor CREBH negatively governs body growth by controlling GH signaling."
	Nakagawa Y, Wang Y, Han SI, Okuda K, Oishi A, Yagishita Y, Kumagai K, Ohno H, Osaki Y, Mizunoe Y, Araki M, Murayama Y, Iwasaki H, Konishi M, Itoh N, Matsuzaka T, Sone H, Yamada N, Shimano H.	論文	Cell Mol Gastroenterol Hepatol. 2021,11(4) 949-971.doi: 10.1016/j.jcmgh.2020.11.004. "Enterohepatic Transcription Factor CREB3L3 Protects Atherosclerosis via SREBP Competitive Inhibition."
	Razali N, Hohjoh H, Inazumi T, Maharjan BD, Nakagawa K, Konishi M, Sugimoto Y, Hasegawa H.	論文	Biol Pharm Bull.2020, 43(4):649-662. doi: 10.1248/bpb.b19-00838. "Induced Prostanoid Synthesis Regulates the Balance between Th1- and Th2-Producing Inflammatory Cytokines in the Thymus of Diet-Restricted Mice"
	Satoh A, Han SI, Araki M, Nakagawa Y, Ohno H, Mizunoe Y, Kumagai K, Murayama Y, Osaki Y, Iwasaki H, Sekiya M, Konishi M, Itoh N, Matsuzaka T, Sone H, Shimano H.	論文	iScience, 2020 23(3):100930. doi: 10.1016/j.isci.2020.100930. "CREBH Improves Diet-Induced Obesity, Insulin Resistance, and Metabolic Disturbances by FGF21-Dependent and FGF21-Independent Mechanisms"
	Masuda Y, Nakayama Y, Mukae T, Tanaka A, Naito K, Konishi M.	論文	Int immunopharmacol. 2019, 67:408-416. doi: 10.1016/j.intimp.2018.12.039. "Maturation of dendritic cells by maitake -glucan enhances anti-cancer effect of dendritic cell vaccination."
2. 学会発表			
	演題名	発表年・月	学会名

Refeeding時の肝臓におけるFgf21の意義	2019年5月	第73回日本栄養・食糧学会大会
分泌型ヘムタンパク質Neudesinによる赤血球代謝調節機構の解析	2019年6月	第20回Pharmaco-Hematologyシンポジウム
Fgf21の胸腺樹状細胞を介した免疫寛容維持機構	2020年10月	第70回日本薬学会関西支部総会・大会
分泌因子Neudesinは樹状細胞の活性を抑制することで、がんの成長を抑制する	2021年3月	日本薬学会 第141年会
炎症時のマクロファージにおける分泌因子Neudesinの役割の検討	2021年3月	日本薬学会 第141年会
学会等および社会における主な活動		
2018年4月～2020年3月	BPB編集委員	
1999年4月～現在に至る	日本分子生物学会会員	
2006年4月～現在に至る	日本肥満学会会員	
2006年4月～現在に至る	日本薬学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 医療薬学研究室	職名 教授	氏名 力武 良行
教育実践上の主な業績		
	年月日	概 要
<p>1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）</p> <p>総合薬学講座 実務実習事前教育 合同初期体験実習 IPW演習 処方解析 処方解析 薬物治療学 薬物治療学 薬物治療学 がん薬物療法論</p>	<p>2015年11月～ 2015年9月～ 2016年9月～ 2016年12月～ 2018年4月～ 2018年9月～ 2017年4月～ 2017年9月～ 2018年9月～ 2020年4月～</p>	<p>国家試験対策のポイントを示しながら、分かりやすく講義した。 医師としての視点からの内容も含めた実習とした。 チューターとして実習に参画した。 本学実習担当者及びチューターとして、企画～演習の実施に参画した。 病態・薬物治療に関して、最新の知見・薬物も交えて講義した。 病態・薬物治療に関して、最新の知見・薬物も交えて講義した。 病態・薬物治療に関して、最新の知見・薬物も交えて講義した。 病態・薬物治療に関して、最新の知見・薬物も交えて講義した。 病態・薬物治療に関して、最新の知見・薬物も交えて講義した。 大腸がんの薬物治療治療及びがんゲノム医療における最新情報を講義した。</p>
<p>2 作成した教科書、教材、参考書</p> <p>図解 腫瘍薬学（川西正祐/賀川義之/大井一弥編集、南山堂）</p>	<p>2020年8月出版</p>	<p>消化器がんについて執筆した。</p>
<p>3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</p> <p>臨床・基礎薬学連携シンポジウム 『神戸薬科大学研究論集Libra』第18号</p>	<p>2018年10月21日 2018年12月21日</p>	<p>薬学教育に関する講演を行った。 本学におけるTBLトライアルに関して報告した。</p>
<p>4 その他教育活動上特記すべき事項</p> <p>がん専門医療人材（がんプロフェSSIONナル）養成プラン</p>	<p>2017年4月～</p>	<p>実習コーディネーターとして、事業遂行に参画した。</p>
<p>研究活動</p>		

1 . 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Sato J, Horibe S, Kawauchi S, Sasaki N, Hirata KI, Rikitake Y.	論文	<i>J Neurochem</i> 2018, 147(4), 495-513. "Involvement of aquaporin-4 in laminin-enhanced process formation of mouse astrocytes in 2D culture: Roles of dystroglycan and -syntrophin in aquaporin-4 expression."
Tagashira T, Fukuda T, Miyata M, Nakamura K, Fujita H, Takai Y, Hirata KI, Rikitake Y.	論文	<i>Arterioscler Thromb Vasc Biol</i> 2018, 38(5), 1159-1169. "Afadin Facilitates Vascular Endothelial Growth Factor-Induced Network Formation and Migration of Vascular Endothelial Cells by Inactivating Rho-Associated Kinase Through ArhGAP29."
Horibe S, Tanahashi T, Kawauchi S, Murakami Y, Rikitake Y.	論文	<i>BMC Cancer</i> 2018, 18(1), 47. "Mechanism of recipient cell-dependent differences in exosome uptake."
Amin HZ, Sasaki N, Yamashita T, Mizoguchi T, Hayashi T, Emoto T, Matsumoto T, Yoshida N, Tabata T, Horibe S, Kawauchi S, Rikitake Y, Hirata KI.	論文	<i>Scientific Reports</i> . 2019, 9(1), 8065. "CTLA-4 Protects against Angiotensin II-Induced Abdominal Aortic Aneurysm Formation in Mice."
Kawauchi S, Horibe S, Sasaki N, Hirata KI, Rikitake Y.	論文	<i>Exp Cell Res</i> . 2019, 374(2), 333-341. "A novel in vitro co-culture model to examine contact formation between astrocytic processes and cerebral vessels."
2 . 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Development of a novel anti-inflammatory phototherapy against atherosclerosis	2021年10月	The 19th International Symposium on Atherosclerosis (ISA2021) (Kyoto)
Cytotoxic T-Lymphocyte-Associated Antigen-4 Downregulates Inflammatory Responses and Improves Angiotensin II-Induced Kidney Injury and Abdominal Aortic Aneurysm Formation	2021年10月	The 19th International Symposium on Atherosclerosis (ISA2021) (Kyoto)

Overexpression of cytotoxic T-lymphocyte-associated antigen-4 (CTLA-4) protects against abdominal aortic aneurysm (AAA) formation in mice.	2019年9月	European Society of Cardiology Congress (Paris, France)
Pharmacological blockade of C-C chemokine receptor 4 exacerbates atherosclerosis in apolipoprotein E-deficient mice.	2019年11月	The 91st AHA Scientific Sessions (Philadelphia, USA)
Nectin-Like Molecules as Novel Regulators in Angiogenesis and Atherosclerosis.	2019年3月	9th FAOPS2019 (Kobe)
学会等および社会における主な活動		
1992年5月～	日本内科学会（総合内科専門医、認定内科医）	
1992年5月～	日本循環器学会（循環器専門医）	
2010年9月～	日本血管生物医学会（評議員）	
2011年6月～	日本分子生物学会	
2011年7月～	日本動脈硬化学会	
2011年9月～	日本生化学会	
2016年2月～	日本薬学会	

専任教員の教育・研究業績

所属 衛生化学研究室	職名 教授	氏名 長谷川 潤
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
衛生薬学	2016年4月～	衛生関連4教科については、主教材として独自のプリントを作成し、配布した。穴埋め形式にすることで重要なポイントが明確になるように工夫した。また授業の中で国家試験の過去問（抜粋）にも触れることで、早いうちから国家試験を意識できるようにした。 研究リテラシーは、現在はコロナ禍対応のためオンデマンド講義であるが、レポート課題を工夫することで、授業のコンセプトを再想起・理解できるようにした。 授業評価は、衛生薬学 / 環境衛生学に関しては2020年度、衛生薬学 に関して2021年度に行われ、おおむね良好な評価を得ている。 実習に関しては、講義との関連を意識させるような実習講義を行うとともに、薬学モデルコアカリキュラムで「態度」と記載されている項目について、討論とプレゼンテーションのコマを設け、思考力の育成と統合的 / 実質的な知識の醸成を試みている。（コロナ禍対応のため、現在はレポートに切り替えている。）
衛生薬学	2020年9月～	
環境衛生学	2017年4月～	
研究リテラシー	2020年4月～	
衛生薬学実習	2016年4月～	
2 作成した教科書、教材、参考書		
メディカルサイエンス臨床化学検査学	2014年1月	近代出版
MY衛生薬学	2017年11月	株式会社テコム（2021年3月 改訂第2版）
授業用プリント	2016年4月～2021年10月	上記授業の全てで用いる授業の補助プリントを自作した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
研究活動		

1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Hirono J, Sanaki H, Kitada K, Sada H, Suzuki A, Lie LK, Segi-Nishida E, Nakagawa K, Hasegawa H.	論文	Neuroreport. 2018, 29, 174 "Expression of tissue inhibitor of metalloproteinases and matrix metalloproteinases in the ischemic brain of photothrombosis model mice."
Razali N, Horikawa I, Hohjoh H, Yoshikawa C, Hasegawa H.	論文	BPB Reports. 2019, 2, 39-47 "Prostaglandin-Modulated Interaction of Thymic Progenitor Cells with Blood Vessels during Estradiol-Induced Thymic Involution."
Hohjoh H, Horikawa I, Nakagawa K, Segi-Nishida E, Hasegawa H.	論文	Neurosci Lett. 2020, 739, 135406. "Induced mRNA expression of matrix metalloproteinases Mmp-3, Mmp-12, and Mmp-13 in the infarct cerebral cortex of photothrombosis model mice."
Hasegawa H, Kondo M, Hohjoh H, Nakayama K, Segi-Nishida E.	論文	BPB Reports. 2020, 3, 208-215. "C-C chemokine receptor 5 (CCR5) expression in the infarct brain of the photothrombosis mouse model."
Razali N, Hohjoh H, Inazumi T, Maharjan BD, Nakagawa K, Konishi M, Sugimoto Y, Hasegawa H.	論文	Biol Pharm Bull. 2020, 43, 649-662 "Induced Prostanoid Synthesis Regulates the Balance between Th1- and Th2-Producing Inflammatory Cytokines in the Thymus of Diet-Restricted Mice."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
デキサメタゾン誘導性の胸腺退縮における未熟胸腺T細胞の分極化	2020年6月	第47回 日本毒性学会学術年会
光血栓性脳梗塞モデルにおけるMmp-3, -12, -13の発現誘導	2020年9月	フォーラム2020 衛生薬学・環境トキシコロジー

脳梗塞の病態進行における細胞種間相互作用	2021年11月	第94回 日本生化学大会
Cellular communications involved in the fetal alcohol spectrum syndrome	2021年12月	第44回 日本分子生物学会年会
脳梗塞発症後のアストロサイト活性制御に対するミクログリアの役割	2022年3月	日本薬学会 第142年会
学会等および社会における主な活動		
1995年10月～現在	日本薬学会会員（環境・衛生部会 2017年～2018年 財務委員，2017年～現在 研究戦略委員，2018年～2021年 総務委員，2019年～2021年 学術誌編集委員）	
1995年12月～現在	日本生化学会会員（2013年 関東支部例会 実行委員）	
2002年2月～現在	日本神経科学学会会員	
2008年2月～現在	日本細胞生物学会会員	
2008年3月～現在	日本脂質生化学会会員	
2017年1月～現在	老化促進モデルマウス（SAM）学会会員	
2017年5月～現在	日本毒性学会会員	
2019年8月～現在	日本神経化学会会員	
2021年4月～現在	BPB Reports誌編集委員	

専任教員の教育・研究業績

所属	製剤学研究室	職名	教授	氏名	坂根 稔康
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概	要	
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
(1) 学部学生に対する教育				教科書のポイントをまとめ、重要単語を記入できるように工夫したプリント、国家試験過去問題をまとめたプリントを作製して、学生に配布している。また、授業で説明する製剤の中で、入手可能なものに関しては購入し、製剤の実物を学生に見せている。	
		2017年～ 2017年～ 2017年～2019年 2020年～	創薬物理薬剤学（3年生前期） 香粧品学（4年生前期） 臨床薬剤学（4年生前期） 臨床薬剤学（6年生前期）		
(2) 大学院生への教育				様々な研究テーマや成果に触れることで、知識・見識を深めてもらうために、可能な範囲で、外部の研究者を招聘し、講演を聴いてもらっている。	
		2016年～ 2016年～	薬剤学特論（大学院修士課程） 臨床薬剤学特論（大学院博士課程）		
(3) 他大学での講義				薬物治療学特論（神戸大学大学院医学研究科） 修士課程の学生約20名を対象に、自分が得た研究結果を中心に解説している。	
		2017年～			
2 作成した教科書、教材、参考書					
(1) 「演習で理解する生物薬剤学」（廣川書店）		2009年2月15日		第2章 薬物の分布（pp.73 - pp.96）、第5章 薬物動態の解析（pp.189 - pp.240）を執筆した。	
(2) ベーシック薬学教科書シリーズ18 「薬物動態学」（化学同人）		2010年4月1日		第3章 薬物の分布（pp.55 - pp.80）を執筆した。	
(3) 「物理薬剤学・製剤学 - 計算の解法 -」（廣川書店）		2012年1月10日		共同編集するとともに、第6章 粉体の性質（pp.29 - pp.53）、第9章 製剤試験法（pp.79 - pp.87）を執筆した。	

(4) 「製剤学(改訂第7版)」(南江堂)	2017年4月10日	第6章 薬物の生体内動態 6-2 薬物の分布 (pp.290 - pp.308) を執筆した。
(5) 「製剤学・物理薬剤学」(廣川書店)	2017年5月10日	共同編集するとともに、第4章「粉体」(pp.53-pp.74)、第5章「界面現象と分散系」(pp.75 - pp.97)、第6章「レオロジーと高分子」(pp.99-pp.113)を執筆した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 特になし		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2008年6月 ~ 2012年8月 2017年4月 ~ 2019年3月 2019年4月 ~ 2022年3月 2022年4月 ~	「認定実務実習指導薬剤師養成ワークショップ in 近畿」に、タスクフォースとして参加した。 教務委員会委員 教務部長 総合教育研究センター センター長
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Satoru Matsuura, Hidemasa Katsumi, Hiroe Suzukia, Natsuko Hirai, Hidetaka Hayashi, Kazuhiro Koshino, Takahiro Higuchi, Yusuke Yagi, Hiroyuki Kimura, Toshiyasu Sakane, and Akira Yamamoto	論文	<i>Proc. Natl. Acad. Sci. USA</i> , 2018, 115, 10511-10516. "L-Serine-modified polyamidoamine dendrimer as a highly potent renal targeting drug carrier"
Tomohiro Umeda, Akiko Tanaka, Ayumi Sakai, Akira Yamamoto, Toshiyasu Sakane, Takami Tomiyama	論文	<i>Alzheimer's & Dementia</i> , 2018, 4, 304-313. "Intranasal rifampicin for Alzheimer's disease prevention"
Akiko Tanaka, Kentaro Takayama, Tomoyuki Furubayashi, Kenji Mori, Yuki Takemura, Mayumi Amano, Chiaki Maeda, Daisuke Inoue, Shunsuke Kimura, Akiko Kiriyama, Hidemasa Katsumi, Mikiya Miyazato, Kenji Kangawa, Toshiyasu Sakane, Yoshio Hayashi and Akira Yamamoto	論文	<i>Mol. Pharm.</i> , 2020, 17, 32-39. "Transnasal Delivery of the Peptide Agonist Specific to Neuromedin-U Receptor 2 to the Brain for the Treatment of Obesity"
Toshiyasu Sakane, Sachi Okabayashi, Shunsuke Kimura, Daisuke Inoue, Akiko Tanaka and Tomoyuki Furubayashi	論文	<i>Pharmaceutics</i> , 2020, 12, 1227-1234. "Brain and Nasal Cavity Anatomy of the Cynomolgus Monkey: Species Differences from the Viewpoint of Direct Delivery from the Nose to the"

Ayaka Yoshida, Kazuhiro Yamamoto, Takahiro Ishida, Tomohiro Omura, Tomoo Itoh, Chikako Nishigori, Toshiyasu Sakane, Ikuko Yano	論文	<i>Exp.Dermatol.</i> , 2021, 30, 337-346. "Sunitinib decreases the expression of KRT6A and SERPINB1 in 3D human epidermal models"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
ヒトiPS細胞由来三次元培養皮膚を用いた薬物の経皮吸収性及び毒性の評価	2020年3月	日本薬学会第140年会
鼻腔から脳への直接的薬物送達 ~ 直接移行後の脳内薬物動態と脳・鼻腔の種差 ~	2020年8月	第36回日本DDS学会学術集会
徐放性製剤における水溶性高分子と有効成分の同時定量法の開発	2021年5月	日本薬剤学会第36年会
鼻腔内投与された Oxytocin の脳内移行特性	2021年6月	第37回日本DDS学会学術集会
脳内磁気粒子イメージングのための酸化鉄ナノ粒子の表面設計	2021年9月	第45回日本磁気学会学術講演会
学会等および社会における主な活動		
1985年2月 ~	日本薬学会会委員（現在に至る）	
1989年4月 ~	日本DDS学会会員（現在に至る）	
1992年4月 ~	日本薬剤学会会員（現在に至る）	
2016年4月 ~	日本薬学会近畿支部委員	

専任教員の教育・研究業績

所属 薬化学研究室	職名 教授	氏名 奥田 健介
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
<p>1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）</p> <p>有機化学I 有機化学III 生薬化学 有機化学IV 合成化学I 医薬品開発 有機化学実習 基礎薬学演習 総合薬学講座 卒業研究 総合医薬品化学特論 化学系創薬学特論</p>	<p>2016年4月 - 2019年9月 2016年4月 - 9月 2017年4月 - 2017年9月 - 2017年4月 - 2019年9月 2020年4月 - 2016年4月 - 2017年1月 - 2016年9月 - 2016年4月 - 2017年4月 - 2016年4月 -</p>	<p>有機化学・合成化学の講義においては板書を中心として講義にめりはりをつけ、適宜学生の応答により理解度を確認している。有機化学Iにおいては教室後方からも見やすいように大型の分子模型も活用して立体化学の理解を促す工夫を行っている。</p> <p>生薬化学においては、生合成も有機化学反応で説明できることを強調して講義を行っている。こちらはパワーポイントファイルを提示しながら進めている。また、補助プリントを作成して活用している。</p> <p>医薬品開発においては、創薬に携わる企業や規制官庁、さらにアカデミア創薬に携わる実務家を招いて、最新の知見の教授をも行っている。</p> <p>有機化学実習においては、こまめに実習室を巡回して実技指導を行っている。また、ディスカッションを行って学生の理解を深めている。</p> <p>総合薬学講座・基礎薬学演習（強化セミナー）においては、有機化学・生薬学系の内容を分担し、ポイントを踏まえた国家試験対策・CBT対策の講義を行っている。</p> <p>卒業研究においては、学生個々の目的意識を涵養するべく、実験研究に対して責任を持って取り組めるように工夫している。また研究に関連する原著論文を選んで批判的に読解し、その内容を発表する機会を設けている。</p> <p>総合医薬品化学特論・化学系創薬学特論においては最新の創薬化学・ケミカルバイオロジー研究を踏まえた内容を盛り込んで、必ずしも本分野を専門としない学生にもこれら領域の最先端に触れられるように工夫している。</p>
<p>2 作成した教科書、教材、参考書</p> <p>有機化学実習書</p>	<p>2017年4月 -</p>	<p>2017年度より新しく生薬化学の内容を取り入れた有機化学実習書の作成を行い、2018年度以降毎年度改訂を行った。</p>
<p>3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</p> <p>特になし</p>		

4 その他教育活動上特記すべき事項		
他大学学生への教育	2016年4月 6月	岐阜薬科大学にて「薬学英語II」講義および「創薬合成化学」演習を行った。
高等学校生徒への教育	2016年8月, 2018年8月, 2021年6月	高等学校生徒に対して「くすりの開発」に関する講義を行った。
他大学学生への教育	2019年7月, 12月, 2020年7月	中京大学にて薬学関連領域に関する「法学」および「日本国憲法」講義を行った。
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
T. Hirayama, H. Tsuboi, M. Niwa, S. Kadota, A. Miki, K. Okuda, H. Nagasawa	論文	<i>Chem. Sci.</i> 8 (7), 4858–4866 (2017). “A universal fluorogenic switch for Fe(II) ion based on N-oxide chemistry permits the visualization of intracellular redox equilibrium shift towards labile iron in hypoxic tumor cells”
K. Okuda, B. G. M. Youssif, R. Sakai, T. Ueno, T. Sakai, T. Kadonosono, Y. Okabe, O. I. A. R. Salem, A. M. Hayallah, M. A. Hussein, S. Kizaka-Kondoh, H. Nagasawa	論文	<i>Heterocycles</i> 101 (2), 559–579 (2020). “Development of Near-infrared Fluorescent Probes with large Stokes shift for Non-Invasive Imaging of Tumor Hypoxia”
I. Takashima, Y. Inoue, N. Matsumoto, A. Takagi, K. Okuda	論文	<i>Chem. Commun.</i> 56 (87), 13327–13330 (2020). “A fluorogenic probe using a catalytic reaction for the detection of trace intracellular zinc”
A. Takagi, K. Usuguchi, I. Takashima, K. Okuda	論文	<i>Org. Lett.</i> 23 (11), 4083–4087 (2021). “Total Synthesis of Antiausterity Agent (±)-Uvaridacol L by Regioselective Axial Diacylation of a <i>myo</i> -Inositol Orthoester”
T. Sakai, Y. Matsuo, K. Okuda, K. Hirota, M. Tsuji, T. Hirayama, H. Nagasawa	論文	<i>Sci. Rep.</i> 11 , 4852 (2021). “Development of antitumor biguanides targeting energy metabolism and stress responses in the tumor microenvironment”
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名

Development of Drugs for Modulating Endoplasmic Reticulum Stress Response	2019年9月	27th International Society of Heterocyclic Chemistry Congress
がんの低酸素イメージング	2019年10月	第79回日本癌学会学術総会
細胞内亜鉛イオンの高感度検出プローブの開発	2020年11月	生命金属に関する合同年会 (ConMetal 2020)
亜鉛触媒反応を応用した細胞内亜鉛イオンの高感度検出プローブの開発	2021年8月	第22回日本亜鉛栄養治療研究会学術集会
栄養飢餓耐性を解除する(±)-Uvaridacol L の全合成と合成類縁体の活性評価	2021年9月	第63回天然有機化合物討論会
3. その他		
演題名	発表年・月	行事名
ガス状シグナル分子のクロストーク解明を可能とするマルチカラー蛍光イメージングプローブの開発	2018年3月	東京生化学研究会平成29年度助成研究報告会
がんのストレス応答系に関するケミカルバイオロジー研究	2018年3月	平成29年度 神戸薬科大学・武庫川女子大学薬学部 研究合同発表会
がんのストレス応答系を標的とするケミカルバイオロジー研究	2019年2月	神戸大学×神戸薬科大学 合同シンポジウム
がん微小環境ならびにストレス応答系に関するケミカルバイオロジー研究	2019年7月	第17回関西バイオ創薬研究会
学会等および社会における主な活動		
1995年12月～現在	日本薬学会会員	

奥田

2009年2月～現在	日本がん分子標的治療学会会員
2011年10月～現在	日本分子イメージング学会会員
2012年1月～現在	国際癌治療増感研究協会会員
2016年5月～現在	日本薬学会近畿支部委員
2018年7月～現在	日本薬剤師会および兵庫県薬剤師会会員
2020年4月～現在	国際癌治療増感研究協会理事

専任教員の教育・研究業績

所属 医薬細胞生物学研究室	職名 教授	氏名 士反 伸和
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2009年～2016年	2年次生に対し「生薬化学実習」の授業を担当し、天然物の抽出や分析、生薬の確認試験や純度試験など、生薬に関する基礎的な事柄を実際に作業・習得させることを行った。実習での手技などについてパワーポイントで解説するとともに、実験作業について各学生に細やかに指導した。さらに、得られた結果から考察に至る部分については、教卓で各学生ごとに説明させ、適宜指導を行うことで考察力を高めるよう工夫を行った。
	2010年～2015年	1年次生に対し「薬用資源学」を担当し、それぞれの植物の器官から得られる医薬品原料についてなど、薬用となる資源の講義を行った。パワーポイントでイラストを使用し視覚的にわかりやすくするとともに、講義中の学生への質問で理解度を把握し、小テストや前回の復習問題で適宜復習を促すなどの工夫を行った。
	2014年～2016年	2年次生に対し「生薬化学」を担当し、薬用植物から得られる化合物の構造、薬効、その生合成経路などの講義を行った。パワーポイントでイラストを使用し視覚的にわかりやすくするとともに、講義中の学生への質問で理解度を把握し、小テストや前回の復習問題で適宜復習を促すなどの工夫を行った。
	2015年～2016年	4年次生に対し「漢方医学」を担当し、漢方の基礎となる概念などについて、講義を行った。パワーポイントでイラストを使用し視覚的にわかりやすくするとともに、概念のわかりにくい部分などについて教科書を中心として読み進めることで理解を促すなどの工夫を行った。

	2017年～2021	1年次生に対し「基礎生命科学」を担当し、細胞内小器官やアポトーシスなど細胞に関する基礎的な内容の理解と定着とを目指して講義を行った。パワーポイントでイラストを使用するとともに、Youtubeなどのムービーも紹介して視覚的にわかりやすくすることを心がけて取り組んだ。また、講義中の学生への質問で理解度を把握し、小テストや確認問題で適宜復習を促すなどの工夫を行った。2021年度の講義内容に対して、ベストティーチャー賞を受賞した。
	2017年～現在	3年次生に対し選択科目として「薬用資源学」を前半の6回、担当している。薬用成分の生合成について、反応機構や生合成に関係する細胞生物学など、また遺伝子組み換え植物と医薬品生産などを、パワーポイントでイラストを使用しつつ講義をしている。
	2017年～現在	2年次生に対し「細胞生物学実習」を担当し、細胞分裂や植物組織、動物組織の観察などの修得を目指して行っている。マウスの解剖などではムービーを見せるなどし、顕微鏡観察では重要な点を説明しつつスケッチを促すなどの工夫を行っている。
2 作成した教科書、教材、参考書	2018年	教科書：基礎から学ぶ植物代謝生化学 1-328 (2018) 羊土社 水谷 正治、士反 伸和、杉山 暁史 (編集)
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2019.09.17 2020.07.20 2021.07.19	インターネットを活用した講義改善の取り組み (神戸薬科大学 FD研修会) オンライン講義に役立つ様々なツールやサイトの紹介 (神戸薬科大学 FD研修会) WebClass使用実例の紹介 (神戸薬科大学 FD研修会)
4 その他教育活動上特記すべき事項	2012年度 2021年度	ベストティーチャー賞 (薬用資源学) ベストティーチャー賞 (基礎生命科学)
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

Urui M., Yamada Y., Ikeda Y., Nakagawa A., Sato F., Minami H., Shitan N.	論文	Microb. Cell Fact., 2021, 18;20(1):200 "Establishment of a co-culture system using Escherichia coli and Pichia pastoris (Komagataella phaffii) for valuable alkaloid production"
Yamada Y., Urui M., Oki H., Inoue K., Matsui H., Ikeda Y., Nakagawa A., Sato F., Minami H., Shitan N.	論文	Metab. Eng. Commun., 2021, 13:e00184, "Transport engineering for improving the production and secretion of valuable alkaloids in Escherichia coli"
Yamada Y., Nishida S., Shitan N., Sato F.	論文	Sci. Rep., 2020, 10(1), 18066. doi: 10.1038/s41598-020-75069-7. "Genome-wide identification of AP2/ERF transcription factor-encoding genes in California poppy (Eschscholzia californica) and their expression profiles in response to methyl jasmonate"
Shitan N, Yazaki K.	総説	Biochimica et Biophysica Acta - Biomembranes, 2019,15: 183127. doi: 10.1016/j.bbamem.2019.183127 "Dynamism of vacuoles toward survival strategy in plants"
Amano I., Kitajima S., Suzuki H., Koeduka T., Shitan N.	論文	PLoS One, 2018, 13(6), e0198936. doi: 10.1371/journal.pone.0198936. "Transcriptome analysis of Petunia axillaris flowers reveals genes involved in morphological differentiation and metabolite transport"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
ナス科植物におけるABC輸送体DサブファミリーABCD1の遺伝子発現解析	2021年10月	第1回トランスポーター研究会関西西部会
Transport Engineering Enabled High Production and Secretion of Valuable Plant Alkaloids in Escherichia coli	2021年6月	Metabolic Engineering 14 (国際学会)
タバコおよびペチュニアにおけるABC輸送体ABCD1の遺伝子発現解析	2021年9月	第38回日本植物バイオテクノロジー学会大会

スチロピン生産性ピキア酵母への輸送体導入と生産性変化の検討	2020年3月	第61回日本植物生理学会年会
ジャスモン酸誘導性タバコ輸送体NtNCS1の機能解析	2019年10月	第13回メタボロームシンポジウム
学会等および社会における主な活動		
1999年4月～現在に至る	日本農芸化学会会員	
2000年4月～現在に至る	日本分子生物学会会員	
2000年4月～現在に至る	日本植物バイオテクノロジー学会会員	
2020年9月～現在に至る	日本植物バイオテクノロジー学会代議員	
2003年4月～現在に至る	日本植物生理学会会員	
2007年4月～現在に至る	トランスポーター研究会会員	
2011年4月～2016年7月	トランスポーター研究会世話人	
2016年7月～現在に至る	トランスポーター研究会顧問	
2009年4月～現在に至る	日本生薬学会会員	
2014年4月～現在に至る	日本生薬学会 代議員、関西支部委員	
2020年4月～2021年3月	日本生薬学会 関西支部支部長	
2009年4月～現在に至る	日本薬学会会員	
2017年4月～現在に至る	ファルマシア 編集委員	
2019年4月～2021年3月	日本薬学会学術誌 編集委員	

専任教員の教育・研究業績

所属 薬理学研究室	職名 教授	氏名 小山 豊
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2017年～ 2018年～ 2017年～	薬理学 薬理学 総合薬学講座
2 作成した教科書、教材、参考書	2018年 3月 2018年 12月 2022年 5月	『新しい疾患薬理学』 第4章 循環器内科領域の疾患に用いる薬物 p255-309 南江堂 岩崎克典、徳山尚吾 編集 『薬物治療総論/症候・臨床検査/個別化医療（臨床薬学テキストシリーズ）』 第1章 薄理の作用と体の変化 中山書店 乾 賢一 監修 赤池昭紀 編集 『Cellular, Molecular, Physiological, and Behavioral Aspects of Traumatic Brain Injury The Neuroscience of Traumatic Brain Injury』 Chapter 18, Angiotensin-1/Tie-2 signaling in traumatic brain injury, pp219-230. Academic Press, Elsevier Edited by R. Rajendram et al.
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

Michinaga S, Koyama Y.	論文	Dual roles of astrocyte-derived factors in regulation of blood-brain barrier function after brain damage. <i>Int J Mol Sci.</i> 2019 20 :571
Koyama Y, Sumie S, Nakano Y, Nagao T, Tokumaru S, Michinaga S.	論文	Endothelin-1 stimulates expression of cyclin D1 and S-phase kinase-associated protein 2 by activating the transcription factor STAT3 in cultured rat astrocytes. <i>J Biol Chem.</i> 2019. 294:3920-3933.
Michinaga S, Inoue A, Yamamoto H, Ryu R, Inoue A, Mizuguchi H, Koyama Y.	論文	Endothelin receptor antagonists alleviate blood-brain barrier disruption and cerebral edema in a mouse model of traumatic brain injury: A comparison between bosentan and ambrisentan. <i>Neuropharmacology.</i> 2020 175:108182.
Michinaga S, Tanabe A, Nakaya R, Fukutome C, Inoue A, Iwane A, Minato Y, Tujiuchi Y, Miyake D, Mizuguchi H, Koyama Y.	論文	Angiotensin-1/Tie-2 signal after focal traumatic brain injury is potentiated by BQ788, an ETB receptor antagonist, in the mouse cerebrum: Involvement in recovery of blood-brain barrier function. <i>J Neurochem.</i> 2020 154:330-348.
Koyama Y.	論文	Endothelin ETB receptor-mediated astrocytic activation: Pathological roles in brain disorders. <i>Int J Mol Sci.</i> 2021 22:4333
2 . 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Blockade of endothelin ETB receptor ameliorates blood-brain barrier disruption through increase of angiotensin-1 after traumatic brain injury in mice	2018年 7月3日	The 18th World Congress of Basic and Clinical Pharmacology
Recovery of blood-brain barrier disruption and reduction of brain edema by BQ788, an ETB receptor antagonist, after traumatic brain injury in mice	2018年 9月16日	第12回 次世代を担う若手医療薬科学シンポジウム
アストログリアを標的とした脳機能改善薬の開発：BBB保護と脳浮腫の抑制	2019年 3月13日	(社) 予防薬理学研究所キックオフシンポジウム

Bosentan, an endothelin receptor antagonist ameliorates vasogenic edema after traumatic brain injury in mice	2019年 9月22日	The Sixteenth International Conference on Endothelin
BQ788, an endothelin ETB receptor antagonist alleviates blood-brain barrier disruption and brain edema after traumatic brain injury	2021年 10月4日	The Seventeenth International Conference on Endothelin
学会等および社会における主な活動		
2010年12月～2014年12月	公益社団法人 日本薬学会代議員	
2011年～現在	Neurochemistry International誌 Editorial Advisory Board	
2011年4月～2017年3月	厚生労働省 薬剤師国家試験委員	
2012年～現在	The Journal of Pharmacological Sciences誌 Advisory Board	
2012年3月～2018年2月	厚生労働省 医道審議会薬剤師分科会 薬剤師国家試験K・V部会委員	
2012年4月～2014年3月	公益社団法人 日本薬理学会企画教育委員	
2016年1月～2017年12月	公益社団法人 薬学教育協議会 薬理学関連教科担当教員会議 副委員長	
2015年10月～現在	公益社団法人 日本薬理学会代議員	
2020年3月～2021年9月	International Journal of Molecular Sciences誌 Topic Editor	
2022年4月～現在	Biological and Pharmaceutical Bulletin誌 Section Editor	
2022年4月～現在	公益社団法人 日本薬学会関西支部 幹事	

専任教員の教育・研究業績

所属 総合教育研究センター	職名 教授	氏名 國正 淳一
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2018年4月～現在に至る	4年次生の地域医療・プライマリケア論の講義を担当している。毎回配布するプリント並びにパワーポイントを利用している。
	2017年7月～現在に至る	5年次の卒業研究 並びに 6年次の卒業研究 を担当している。現場の病院あるいは薬局において臨床研究を実施している。臨床研究施設での実際の課題を研究することにより、問題発見能力及びその解決能力の醸成を図っている。加えて、社会人としてのコミュニケーション能力の養成も併せて育成できる。
	2017年9月～現在に至る	6年次生の処方解析学、処方解析演習を担当している。処方解析学では配布するプリント並びにパワーポイントを利用している。処方解析演習では演習問題を配布し、その解説はパワーポイントを利用している。
2 作成した教科書、教材、参考書 薬学生のための病院・薬局実務実習テキスト2018年版（薬ゼミファーマブック）	2018年3月	新人薬剤師・薬学生のための教科書の作成に加わった。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2017年7月～現在に至る	神戸薬科大学 生涯研修企画・運営委員会委員
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
中村一仁，浦野公彦，田中万祐子，西口加那子，堺 陽子，片野貴大，鍋倉智裕，山村恵子，國正淳一	論文	保険薬局における残薬の確認に伴う疑義照会が及ぼす調剤医療費削減効果の検討，医療薬学，2016，40，522-529

堺陽子, 岩尾岳洋, 國正淳一, 松永民秀	論文	薬物動態および毒性試験への応用を目指したヒトiPS細胞由来肝細胞の作製とその培養技術, 愛知学院大学薬学会誌, 2016, 8, 7-14
國正淳一, 堺陽子, 浦野公彦	論文	国内における危険ドラッグの実態と対策, 愛知学院大学薬学会誌, 2017, 9, 8-14
辰見 明俊、前川 裕希、小森 由理子、山本 克己、瀧口 常男、高橋 一栄、國正 淳一	論文	ニボルマブによる重篤な免疫関連有害事象の発現予測因子としての好中球・リンパ球比および血小板・リンパ球比の有用性 医療薬学 2020, 46, 331-339
Urano K., Ishibashi M., Matsumoto T., Ohishi K., Muraki Y., Iwamoto T., Kunimasa J., Okuda M.	論文	Impact of physician-pharmacist collaborative protocol-based pharmacotherapy management for HIV outpatients. J Pharm Health Care Sci. 2020, 6, 9-15
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
神戸大学・神戸薬科大学薬剤師レジデントにおける教育関連業務	2021年3月	第10回日本薬剤師レジデントフォーラム
薬剤師によるTDMオーダーと注射仮登録の有用性評価	2021年3月	第10回日本薬剤師レジデントフォーラム
人工弁置換術後のワルファリン導入におけるプロトロンビン時間国際標準比推移の現状と課題	2021年3月	第10回日本薬剤師レジデントフォーラム
経口抗がん薬を含む術後補助化学療法における薬業協働支援の有用性	2021年3月	第10回日本薬剤師レジデントフォーラム
薬剤師による抗菌薬血中濃度測定オーダー登録と注射薬仮登録	2021年10月	第31回日本医療薬学会年会
学会等および社会における主な活動		
2003年4月～現在に至る	日本医療薬学会認定指導薬剤師	
2005年4月～現在に至る	日本医療薬学会評議員	
2014年6月～現在に至る	日本中毒学会評議員	

専任教員の教育・研究業績

所属 英語第二研究室	職名 教授	氏名 玉巻 欣子
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
早期体験学習（1年次必修科目）	2012年4月～現在	教養教員として「早期体験学習」を担当している。病院・薬局訪問のサポート、第三施設訪問の付添、発表会のサポート、また実習先病院・薬局への挨拶など、円滑な授業運営を目指して。「救命救急インストラクター」として学生の救急救命講習の指導も行っている（2022年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で病院訪問、救命救急講習は実施されなかった）。
英語I・III（1年次必修英語）	2014年4月～2022年3月	大学で学ぶ英語の基礎となる英文法を基礎から学習する授業を実施した。パワーポイントのスライド等も利用して、単調にならず分かりやすい文法授業を心がけた。
英語V・VI（2年次必修英語）	2012年4月～現在	薬学生が最低限知っておくべき医学英語語彙・表現の習得、医療系英文読解・速読力の向上を目指す授業を実施している。2013年度からは、英語e-ラーニングを取り入れた授業を開始し、教員による対面授業とe-ラーニングを融合したブレンディッド授業を展開している。
実用英語（2年次選択英語）	2013年4月～現在	英語e-ラーニング自己学習によるTOEIC対策に重点を置いた授業（単位認定科目）を担当している。
総合文化演習（2年次必修科目）	2015年4月～現在	「患者体験記・闘病記から医療を考える」というテーマでゼミを展開している。ナラティブ・メディシンの枠組みに基づいて闘病記を読み、テーマを設定し、SGD、プレゼンテーション、レポートを通して様々な角度から医療についての考察を深めさせている。
実用薬学英語（4年次選択英語）	2012年4月～現在	外国人患者に対する英語での服薬指導に必要な医学・薬学英語の語彙・表現を学ぶ授業を実施している。学生同士のロールプレイ、英文での家庭医学書読解、薬剤師会話のリスニングなど、多角的な方法で医療系英語力増強に努めている。2012年度学生評価によるベストティーチャー賞受賞。

海外薬学研修	2013年4月～現在	研修の国内における事前講義と米国ボストン現地での指導を担当している。コロナ禍以前は、マサチューセッツ薬科健康科学大学(MCPHS)での本学の学生による英語プレゼンテーションを企画・指導、またボストン市内の薬局でのフィールドワークを企画・指導していた。2021年度以降は新型コロナウイルス感染症拡大のためボストン研修が中止となり、その代替案として、本学教員、ボストンのMCPHS大学教授と協同して、オンライン講義を実施している。十分な事前学習をすることにより、国内でも英語でレクチャーを聞き、英語で質問する楽しみを学生に体験させることに努めた。
2 作成した教科書、教材、参考書	1998年 共著 2003年 共著 2005年 共著 2007年 共著 2013年 共著 2014年 共著 2015年 共著 2016年 共著 2017年 共著 2017年 共著 2019年 共著 2019年 共著 2021年 共著 2021年 共著	『これだけは知っておきたい医学英語の基本用語と表現』（メジカルビュー社） 『健康を科学する』（成美堂） 日本医学英語教育学会編『講義録 医学英語Ⅰ』Chapter 5. pp.34-57.（メジカルビュー社） 日本医学英語教育学会編『医学英語検定3・4級教本』pp.54-65.（メジカルビュー社） 日本薬学英語研究会編『薬学英語2（改訂版）』Unit 7. pp.42-49.（成美堂） 『英語で学ぶ災害看護 基礎とコミュニケーション』（看護の科学社） 日本薬学会編『実用薬学英語』Unit 14. pp.91-95.（東京化学同人） 日本医学英語教育学会編（2016）『医学・医療系学生のための総合医学英語テキストStep 1』6. Chest Pain. pp.60-71.（メジカルビュー社） 『薬学生のための英語1』II 研究活動欄参照 日本医学英語教育学会編『医学・医療系学生のための総合医学英語テキストStep 2』3. Acute myocardial Infarction. pp.31-44.（メジカルビュー社） 『薬学生のための英語2』II 研究活動欄参照 『これからの薬学英語』II 研究活動欄参照 『薬学生のための英語会話』II 研究活動欄参照 『第4版 これだけは知っておきたい医学英語の基本用語と表現』II 研究活動欄参照
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		II 研究活動欄 2.学会発表参照
4 その他教育活動上特記すべき事項 平成24年度私立大学教育研究活性化設備整備事業申請	2012年	「e-ラーニング教材利用による薬学生の総合的英語力向上」というプロジェクトにて文科省への申請を行い採択された。PC51台が導入され、e-ラーニング教材ソフトであるALC NetAcademy2「医学英語＜基礎＞コース」、「スーパースタンダードコース」等を導入し英語授業で活用した。

平成24年度ベストティーチャー賞受賞 神戸大学医学部医学科での医学英語教育 日本薬学会平成27年度文部科学省委託事業「薬学教育の改善・充実に関する調査研究」改訂コアカリ英訳作業 2017-2018年度ベストティーチャー賞受賞 入試委員会委員 薬用植物園運営委員会委員 学生就職委員会委員 国際交流委員会委員 図書館長	2013年6月 1999年4月～2018年3月 2016年1月～2018年3月 2018年 2015年4月～2017年3月 2016年4月～2018年3月 2017年4月～2018年3月 2017年4月～現在 2019年4月～現在	2012年度「実用薬学英語I」学生評価によるベストティーチャー賞受賞 神戸大学医学部医学科5年次「臨床英語」担当（非常勤講師） 「海外の薬学教育との比較調査委員会 改訂コアカリ英訳作業部会」メンバーとして改訂コアカリ英訳を行った。文部科学省 平成28年度 大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業「薬学教育の改善・充実に関する調査研究」報告書（平成29年3月）p.156 2017-2018年度学生評価によるベストティーチャー賞受賞 本学図書館長としてスタッフと共に学生の図書館利用の促進、効果的な研究支援ができる図書館を目指している。新図書館構築にも注力している。
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
平井清子、金子利雄、堀内正子（責任者）、齋藤弘明、板垣正、河野享子、金澤洋子、玉巻欣子（編著者）、田沢恭子、山田恵、井原久美子、和治元義博。日本薬学英語研究会編	著書（教科書）	『薬学生のための英語1』Unit 8, Unit 14 (pp. 55-62, 102-109). Listening & Speaking. Unit 1～16.(2017)（成美堂）
金子利雄、堀内正子（責任者）、玉巻欣子（編著者）、エリック・スカイヤー、板垣正、井原久美子、河野享子、齋藤弘明、高橋和子、竹内典子、田沢恭子、平井清子、吉澤小百合、日本薬学英語研究会編	著書（教科書）	『薬学生のための英語2』 pp.85-91 (Unit 13). Pharmaceutical Terminology. Units 1～16.(2019)（成美堂）
野口ジュディー（監）、天ヶ瀬葉子、神前陽子、スミス朋子、玉巻欣子、堀朋子、村木美紀子	著書（教科書）	『これからの薬学英語』 pp.26-33 (Lesson 5).(2019)（講談社サイエンティフィック）
金子利雄、エリック・スカイヤー、板垣正、井原久美子、岩澤真紀子、河野享子、齋藤弘明、高橋和子、玉巻欣子、平井清子、堀内正子、吉澤小百合、渡辺朋子	著書（教科書）	『薬学生のための英語会話』 Dictation Unit 1～15、Reading comprehension & Listening Comprehension Unit 14.(2021)（東京化学同人）
玉巻欣子、藤枝宏壽、Randolph Mann	著書（教科書）	『第4版 これだけは知っておきたい医学英語の基本用語と表現』（2021）（メジカルビュー社）
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名

玉巻欣子「ナラティブ・メディスンを意識した薬学部教養教育の試み 神戸薬科大学2年次『総合文化演習』玉巻ゼミでの取り組み」	2017年9月2-3日	第2回日本薬学教育学会（名古屋）講演要旨集p.123.ポスター発表
玉巻欣子,田内義彦「神戸薬科大学における発信型海外薬学研修プログラムの構築と検証 米国薬学部でのプレゼンテーションと薬局フィールドワークの取り組み」	2018年9月1-2日	第3回日本薬学教育学会（東京）講演要旨集p.123.ポスター発表
玉巻欣子,田内義彦「米国薬学生から見た日本人薬学生の英語プレゼンテーション」	2019年9月16日	日本社会薬学会第38年会（松山）ポスター発表
Kinko Tamamaki, Yoshihiko Tauchi. Study abroad program as cultural competency education for pharmacy students.	2020年6月1日	第23回日本医学英語教育学会学術集会（高知） 新型コロナウイルス感染拡大により学術集会は中止。抄録集での発表 J. of Medical English Education Vol.19 No.2
Kinko Tamamaki, Shoji Kawauchi, Yoshimi Tomita, Yoshihiko Tauchi. Remote Lecture by a Pharmaceutical Professional in the U.S. as an Alternative for “Study Abroad Pharmacy Program”	2021年7月18日	第24回日本医学英語教育学会学術集会（金沢） 新型コロナウイルス感染拡大によりオンライン開催。オンラインでの口頭発表（英語） J. of Medical English Education Vol.20 No.2
3. その他		
演題名	発表年・月	学会名
玉巻欣子「医療系学部における英語教育」（招待講演）	2018年10月7日	日本大学私立大学ブランディング事業「スポーツ日大によるアンチ・ドーピング教育研究拠点確立とポストオリンピックへの展開」体育の日イベント
学会等および社会における主な活動		
2008年4月～2012年3月	大学英語教育学会研究企画委員	
2010年4月～2015年3月	大学英語教育学会社員	
2015年4月～現在	大学英語教育学会会員	
2014年7月～2018年6月	日本医学英語教育学会評議員、医学英語検定試験制度委員	
2009年7月～2014年6月 2018年7月～現在	日本医学英語教育学会理事、医学英語検定試験制度委員	
2015年6月～現在	日本社会薬学会会員	
2016年～現在	日本薬学会会員	
2022年～	American Association of Colleges of Pharmacy 会員	
2022年～	American Association for Applied Linguistics 会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	薬品化学研究室	職名	教授	氏名	上田 昌史
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日		概要	
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
薬学入門、有機化学系の実習、演習および講義を担当した		2001年度～現在		3年次配当(2013年度から2年次)の医薬品化学実習では、医薬品を実際に合成する実習を実施した。また、未知検体の構造決定を化学反応や確認試験を利用して行った。医薬品の性質を深く理解させるために、スモールグループディスカッションを通して使える有機化学について教育した。	
		2009年度～2015年12月		2年次配当の有機化学演習では、復習を兼ねた小テストを毎回行い、学生の理解度の状況を把握した上で、問題解答解説を行った。	
		2010年度～2012年度		神戸大学医学部保健学科の学生に、基礎有機化学の講義を行った。高校で学んだ有機化学の内容を大学レベルの視点から解説し、有機化合物の性質に影響を及ぼす官能基について概説した。さらに、習熟度を考慮しながら、医薬品の開発過程や最新の医薬品事情について説明した。	
		2012年度～2014年度		1年次の薬学入門の講義を担当した。解熱鎮痛薬を化学系薬学の観点から講義し、有機化学が生命現象の理解に重要であることを概説した。また、スモールグループディスカッションを実施し、薬学関連科目の密なつながりについて説いた。	
		2012年度～現在		3年次配当の医薬品化学(旧有機化学VI)の講義では、医薬品構造と薬理作用の関連性について解説し、薬学における有機化学の重要性について説いた。また、高学年になっても忘れない覚える有機化学ではなく考える有機化学を徹底して説いた。	
		2014年度～2016年11月		2年次配当の有機化学IVの講義では、カルボン酸誘導体の反応につて講義した。医薬品に多く含まれるカルボニル基の反応を、生体内での反応や医薬品の反応を例に挙げて、学生が興味をもつように心掛けた。	
		2017年4月～現在		2年次配当の有機化学IIIの講義では、アルケンおよびアルキンの性質や反応につて講義した。有機化学の基礎であるので、反応機構を丁寧に何度も繰り返し説明し、学生全体の理解度の向上を目指した。	
		2018年8月～現在		4年次配当の夏期集中講義として、合成化学IIを担当した。これまで学修した有機化学関連分野の知識の定着と応用力の醸成のため、複雑な化合物の合成経路の立案をSGD形式で行った。また、学生同士の総合評価も組み入れた評価を行った。	
2 作成した教科書、教材、参考書		2001年（毎年改訂）		有機化学系II実習書	

	2015年	スタンダード薬学シリーズ 3 日本薬学会編 化学系薬学 I . 化学物質の性質と反応、東京化学同人、SB023
	2015年	化学構造と薬理作用 医薬品を化学的に読む 廣川書店、中枢神経興奮薬、脳循環・代謝改善薬
	2017年	パートナー医薬品化学 南江堂、第3章 複素環化合物、複素環関連医薬品
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		2021年度ベストティーチャー賞受賞
研究活動		
1 . 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Sugita S., Takeda N., Tohnai N., Miyata M., Miyata O., Ueda M.	論文	Angew. Chem. Int. Ed., 2017, 56(9), 2469-2472. "Gold-Catalyzed [3+2]/Retro-[3+2]/[3+2] Cycloaddition Cascade Reaction of N-Alkoxyazomethine Ylides"
Nishida Y., Takeda N., Matsuno K., Miyata O., Ueda M.	論文	Eur. J. Org. Chem. 2018, 3928-3935. "Acylation Coupling of Amine and Indole Using Chloroform as a Carbonyl Group"
Konishi K., Takeda N., Yasui M., Matsuzaki H., Miyata O., Ueda M.	論文	J. Org. Chem. 2019, 84(21), 14320-14329. "Copper-Catalyzed Cycloisomerization of Cyclopropenylimine for Synthesis of Pyrroles"
Konishi K., Yasui M., Okuhira H., Takeda N.,	論文	Org. Lett., 2020, 22(17), 6852-6857. "Copper-Catalyzed Sequential Cyclization/Migration of Alkynyl Hydrazides for Construction of Ring-Expanded N-N Fused Pyrazolones"
Matsuzaki H., Takeda N., Yasui, M., Okazaki M., Suzuki S., Ueda M.	論文	Chem. Commun., 2021, 57(91), 12187-12190. "Synthesis of multi-substituted 1,2,4-triazoles utilising the ambiphilic reactivity of hydrazones"
2 . 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名

Aminocarbonylation of homoallylic amine with chloroform	2017年・7月	18th Tetrahedron Symposium Asia Edition
オキシムエーテルを有するシクロプロペン類を基質としたピロール類の新規合成法の開発	2018年・8月	第38回有機合成若手セミナー
Synthesis of pyrazoles from conjugated hydrazone through acid-promoted -protonation/nucleophilic addition/cyclization/aromatization sequence	2019年・9月	7th International Society of Heterocyclic Chemistry Congress
連続的閉環 - 開環反応によるイソキサゾロン合成法の開発	2020年・10月	第70回日本薬学会関西支部大会
環状N-アルコシキプロピオール酸アミドの閉環-官能基化によるイソキサゾロン合成法の開発	2021年・10月	第47回反応と合成の進歩シンポジウム
3. その他		
演題名	発表年・月	学会名
窒素原子上にヘテロ原子をもつイミンおよびアミドの特性を活用したヘテロ環合成	2018年・1月	近畿化学協会ヘテロ原子部会第3回懇話会（依頼公演）
連続するヘテロ原子を活用した複素環合成	2019年・2月	第11回徳島文理大学薬学部学術講演会（依頼公演）
学会等および社会における主な活動		
1999年～現在に至る	日本薬学会会員	
2000年～現在に至る	有機合成化学協会会員	
2011年～現在に至る	近畿化学協会会員	
2011年2月～現在に至る	有機合成化学協会関西支部幹事	
2009年4月～2011年3月	日本薬学会 ファルマシアトピックス専門小委員	
2011年5月～2016年5月	次世代を担う有機化学シンポジウム世話人	

上田 昌史

2017年5月～2021年3月	日本薬学会広報委員
2017年8月～現在に至る	アメリカ化学会会員
2019年4月～2022年3月	日本薬学会 学術誌編集委員
2020年4月～現在に至る	日本薬学会 化学系薬学部会役員

専任教員の教育・研究業績

所属 薬剤学研究室	職名 教授	氏名 大河原 賢一
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
(1) 学部学生への教育	2018年～ 2018年～ 2018年～ 2018年～ 2020年～ 2018年～	毎回の講義内容に関連する演習問題を宿題として課し、翌週の講義の冒頭で解答・解説を行うことで、復習を促すと共に、遅刻の抑止力となることを期待している。 薬物動態学1（3年次前期） 臨床薬剤学I（4年次前期） アクティブラボ（1～3年次通年） 薬剤学・製剤学実習（3年次後期） 臨床薬剤学II（6年次前期） 総合薬学講座（6年次通年）
(2) 大学院生への教育	2018年～ 2018年～	最新のトピックを取り入れると共に、自分自身の研究生活で経験した様々な事柄（主に失敗談）を披露することで、受講生のモチベーション上昇に繋がればと期待している。 薬剤学特論（大学院修士課程） 臨床薬剤学特論（大学院博士課程）
(3) 他大学での講義	2018年4月～2018年8月 2019年9月2-3日 2020年11月25日	岡山大学薬学部「薬剤学」（3年生前期） 岡山大学大学院自然科学研究科「薬の体内動態とその解析手法について」集中講義 京都大学大学院薬学研究科にて特論講義
2 作成した教科書、教材、参考書		
『創薬科学-ゲノム創薬が拓く未来-』（裳華房、2017）	2017年	「薬物の送達システム」（pp. 242-268）を執筆
図解 腫瘍薬学（川西正祐/賀川義之/大井一弥編集、南山堂）	2020年	「マイクロRNAを用いた次世代がん診断」を分担執筆
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		

	該当なし	
4 その他教育活動上特記すべき事項	該当なし	
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
T. Minamisakamoto, S. Nishiguchi, K. Hashimoto, K. Ogawara, M. Maruyama, K. Higaki	原著論文	Eur. J. Pharm. Biopharm., 2021, 169, 20-28. Sequential administration of PEG-Span 80 niosome enhances anti-tumor effect of doxorubicin-containing PEG liposome"
M. Hosokawa, R. Seiki, S. Iwakawa, K. Ogawara	原著論文	Biochem. Biophys. Res. Commun., 2021, 578, 157-162. "Combination of azacytidine and curcumin is a potential alternative in decitabine-resistant colorectal cancer cells with attenuated deoxycytidine kinase"
H. Iida, T. Komagata, H. Tanaka, R. Nagasawa, T. Nishio, T. Shono, J. Kitagawa, K. Ogawara, K. Shinozaki, A. Seki, M. Bruce, Tomoya Ohno	原著論文	J. Pharmacol. Exp. Ther., 2021, 379, 400-408. "Novel Platform for Predicting Drug Effects in Patients with Acromegaly: Translational Exposure-Response Evaluation of Growth Hormone-Inhibitory Effect of Octreotide Following Growth Hormone-Releasing Hormone Stimulation"
S. Tanaka, M. Hosokawa, A. Tatsumi, S. Asami, R. Imai, K. Ogawara	原著論文	Biochem. Biophys. Res. Commun., 2022, 607, 9-14. "Improvement of Resistance to Oxaliplatin by Vorinostat in Human Colorectal Cancer Cells through Inhibition of Nrf2 Nuclear Translocation"
Y. Kono, A. Fushimi, Y. Yoshizawa, K. Higaki, K. Ogawara	原著論文	Int. J. Pharm., 2022, 623, 121904 "Effects of particle size and release property of paclitaxel-loaded nanoparticles on their peritoneal retention and therapeutic efficacy against mouse malignant ascites"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
(シンポジウム、招待講演) Optimization of cancer treatment with nano-DDS formulations: Knowledge of tumor vasculatures to make things work	2018年7月	The 2nd Workshop for Korea-Japan Young Scientists on Pharmaceutics (Sookmyung Women's University, Seoul, Korea)

非イオン性界面活性剤Spanを用いたパクリタキセル内封PEGニオソームの調製とその機能評価	2021年5月	第36回日本薬剤学会（オンライン開催）
腫瘍溶解性ウイルスであるレオウイルスの前投与によるPEG修飾リポソームの腫瘍内集積性の向上	2022年3月	日本薬学会第142年会
ドキソルビシン (DOX) 耐性腫瘍に対するDOX-PEGリポソームの抗腫瘍効果に及ぼす腫瘍組織内血管内皮細胞特性の影響	2022年5月	第37回日本薬剤学会（オンライン開催）
血管新生阻害剤 SU5416 - パクリタキセル (PTX) 内封 PEGリポソームの逐次的頻回併用療法の転移性乳がん4T1担がんマウスにおける抗腫瘍効果	2022年5月	第37回日本薬剤学会（オンライン開催）
学会等および社会における主な活動		
2011年4月～2021年3月	日本薬剤学会 FG世話人（2015年より副リーダー，2019年よりリーダー）	
2011年4月～	日本薬剤学会 代議員	
2014年4月～	日本DDS学会 評議員	
2017年4月～	日本薬物動態学会 評議員	
2018年4月～	日本薬学会 近畿支部委員	

専任教員の教育・研究業績

所属	生命有機化学研究室	職名	教授	氏名	波多野 学
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2020.4～現在	1年次の「有機化学II」を指導している。有機化合物の構造・性質・反応に関する基本的事項を習得させる。授業ではしばしば生体内の反応や生物活性物質との関連などに触れ、学生に興味を持たせるよう取り組んでいる。		
		2020.4～現在	3年次の「機器分析学実習」を指導している。有機化合物の分析を目的とする物質の定性・定量に関する基本的事項を修得させる。PLQの実施や積極的な議論を行い、理解を深める工夫をしている。		
		2021.4～2022.3	1年次の「早期体験学習」を指導した。薬学生としての意識やモチベーションを高める指導を行った。SGDでは充実したプレゼン資料作成を支援し、活発なクラス内での議論ができた。全体発表会でも活発によく質問できた。		
2 作成した教科書、教材、参考書		2021.11	有機合成化学協会編「有機合成のための新触媒反応101(編集 檜山為次郎, 野崎京子, 中尾佳亮, 中野幸司)」[分担] 19. 不斉Diels-Alder反応および関連反応 (pp. 38-39)、80. エステル合成 (pp. 160-161) 波多野 学、石原 一彰		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項		2021.7	ハリマ化成グループ広報誌にて取材記事掲載。Harima Quarterly (HQ), No 147 (2021 SUMMER) 「One Hour Interview」100%を超える価値の創造を目指して 神戸薬科大学 教授 波多野 学		
研究活動					

1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Manabu Hatano, Kohei Toh, Kazuaki Ishihara	論文	Enantioselective Aza-Friedel-Crafts Reaction of Indoles and Pyrroles Catalyzed by Chiral C1-Symmetric Bis(phosphoric Acid). <i>Org. Lett.</i> 2020, 22(24), 9614-9620.
Manabu Hatano, Xue Zhao, Takuya Mochizuki, Kyogo Maeda, Ken Motokura, Kazuaki Ishihara	論文	Reusable Silica-Supported Ammonium BINsate Catalysts for Enantio- and Diastereoselective Friedel-Crafts-Type Double Aminoalkylation of N-Alkylpyrroles with Aldimines. <i>Asian J. Org. Chem.</i> 2021, 10(2), 360-365.
Jie Qi Ng, Hiro Arima, Takuya Mochizuki, Kohei Toh, Kai Matsui, Manussada Ratanasak, Jun-Ya Hasegawa, Manabu Hatano, Kazuaki Ishihara	論文	Chemoselective Transesterification of Methyl (Meth)acrylates Catalyzed by Sodium(I) or Magnesium(II) Aryloxides. <i>ACS Catal.</i> 2021, 11(1), 199-207.
Hiroyuki Hayashi, Shotaro Yasukochi, Tatsuhiko Sakamoto, Manabu Hatano, Kazuaki Ishihara	論文	Insight into the Mechanism of the Acylation of Alcohols with Acid Anhydrides Catalyzed by Phosphoric Acid Derivatives. <i>J. Org. Chem.</i> 2021, 86(7), 5917-5212.
Hideyuki Ishihara, Jianhao Huang, Takuya Mochizuki, Manabu Hatano, Kazuaki Ishihara	論文	Enantio- and Diastereoselective Carbonyl-Ene Cyclization-Acetalization Tandem Reaction Catalyzed by Tris(pentafluorophenyl)borane-Assisted Chiral Phosphoric Acids. <i>ACS Catal.</i> 2021, 11(10), 6121-6127.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Multiselective Diels-Alder Reaction Induced by Chiral Supramolecular Lewis Acid Catalysts	2017年・9月	The 8th International Meeting on Halogen Chemistry (HALCHEM VIII) (招待講演)
高活性第四級アンモニウム塩触媒を用いるエステル交換反応	2017年・12月	日本プロセス化学会2017ウィンターシンポジウム (受賞講演)
Development of Chiral Supramolecular Catalysts for Multiselective Diels-Alder Reaction	2019年・3月	Asian International Symposium – Organic and Green Chemistry, The 99th CSJ Annual Meeting (招待講演)
Chiral Macrocyclic O-Shaped Catalysts for Enantioselective Addition of Lithium Acetylides to Simple Ketones	2019年・9月	The 14th International Conference on Cutting-Edge Organic Chemistry in Asia (招待講演)

マルチ選択的反応を制御するキラル酸塩基協奏型触媒の精密設計	2020年・8月	有機合成化学協会関西支部・有機合成夏期セミナー「明日の有機化学合成」
3. その他		
演題名	発表年・月	学会名
Multiselective Diels–Alder Reaction Induced by Chiral Supramolecular Lewis Acid Catalysts	2017年・6月	International Symposium on Pure & Applied Chemistry (ISPAC) 2017 (招待講演)
高活性アンモニウム塩触媒によるエステル交換反応	2017年・9月	第1回日本プロセス化学会 東海地区フォーラム (招待講演)
学会等および社会における主な活動		
1998年4月～現在に至る	日本化学会会員	
2000年4月～現在に至る	有機合成化学協会会員	
2000年4月～現在に至る	近畿化学協会会員	
2003年4月～現在に至る	日本プロセス化学会会員	
2007年4月～現在に至る	アメリカ化学会会員	
2017年4月～2020年3月	先端錯体工学研究会会員	
2010年4月～2012年3月	日本化学会東海支部化学教育協議会委員	
2012年4月～2016年3月	日本化学会東海支部代議員	
2015年4月～2018年3月	有機合成化学協会東海支部庶務幹事	
2016年4月～2020年3月	日本プロセス化学会東海支部幹事	
2016年4月～現在に至る	産学研究協力委員会「分子性触媒による高度分子変換技術」第194委員会委員	
2017年4月～2020年3月	有機合成化学協会東海支部幹事	

波多野

2021年4月～現在に至る	日本薬学会関西支部委員
---------------	-------------

専任教員の教育・研究業績

所属	機能性分子化学研究室	職名	教授	氏名	田中 将史
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日		概 要	
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2018年～2021年度		基礎化学実習（1年次後期）・・・実習書の更新、動画を用いた実演指導を行った	
		2022年～現在		基礎物理化学（1年次前期、兼任）・・・プリント冊子の作成、Webclassを用いた演習を実施した	
		2016年～現在		物理化学（2年次後期、兼任）・・・プリント冊子の作成、アルバイトによる添削課題を実施した	
		2017年～現在		生物物理化学（3年次前期、兼任）・・・プリント冊子の作成、動画コンテンツを利用した理解の促進を図った	
		2008年～2019年		薬学英語入門I（3年次前期）・・・協調学習（ジグソー法）の導入、講義支援ソフトを利用した疑問点の抽出を行った	
		2019年・21年		物理系創薬学特論（大学院博士）	
		2014年・16年・22年		物理系基礎創薬学特論（大学院修士）	
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					

4	その他教育活動上特記すべき事項		2021年度ベストティーチャー賞
研究活動			
1. 著書・論文等			
	氏名	種別	内容
	Tanaka M.*, Nishimura A., Takeshita H., Takase H., Yamada T., Mukai T.	論文	Chem. Phys. Lipids 2017, 202: 6-12. "Effect of Lipid Environment on Amyloid Fibril Formation of Human Serum Amyloid A"
	Tanaka M.*, Kawakami T., Okino N., Sasaki K., Nakanishi K., Takase H., Yamada T., Mukai T.	論文	Arch. Biochem. Biophys. 2018, 639: 9-15. "Acceleration of Amyloid Fibril Formation by Carboxyl-Terminal Truncation of Human Serum Amyloid A"
	Takase H., Tanaka M.*, Nakamura Y., Morita S., Yamada T., Mukai T.	論文	Chem. Phys. Lipids 2019, 221: 8-14. "Effects of Lipid Composition on the Structural Properties of Human Serum Amyloid A in Reconstituted High-Density Lipoprotein Particles"
	Tanaka M.*, Miyake H., Oka S., Maeda S., Iwasaki K., Mukai T.	論文	Biochim. Biophys. Acta 2020, 1862 (5): 183209. "Effects of Charged Lipids on the Physicochemical and Biological Properties of Lipid-Styrene Maleic Acid Copolymer Discoidal Particles"
	Tanaka M.*, Fujita Y., Onishi N., Ogawara K., Nakayama H., Mukai T.	論文	Chem. Phys. Lipids 2020, 232: 104954. "Preparation and Characterization of Lipid Emulsions Containing Styrene Maleic Acid Copolymer for the Development of pH-Responsive Drug Carriers"
2. 学会発表			
	演題名	発表年・月	学会名
	Effect of Carboxyl-Terminal Truncation on Amyloid Fibril Formation of Human Serum Amyloid A	2018年3月	16th International Symposium on Amyloidosis

スチレンマレイン酸共重合体 (SMA) 含有脂質エマルションの作製と生体内応用の検討	2019年3月	日本薬学会第139年会
AAアミロイドーシス発症の分子基盤の解明	2019年4月	AASAA (AAアミロイドーシスと血清アミロイドA) 研究会
pH応答性を有する脂質エマルション粒子の細胞内分布	2019年10月	第69回日本薬学会関西支部大会
SAA分子の特徴とアミロイド原性	2021年11月	第8回日本アミロイドーシス学会学術集会
学会等および社会における主な活動		
1999年3月～現在	日本薬学会正会員	
2005年8月～現在	日本生化学会正会員	
2007年2月～現在	日本膜学会正会員	
2007年8月～現在	日本ペプチド学会正会員	
2015年3月～現在	AAアミロイドーシスと血清アミロイドA (AASAA) 研究会 幹事	

専任教員の教育・研究業績

所属 総合教育研究センター	職名 教授	氏名 白木 孝
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2010年9月～2018年2月	姫路獨協大学薬学部医療薬学科4年次学生に対して、医療現場でのコミュニケーションに関する実習を行った。作成した模擬実例課題を用いて、薬局、病棟での初回面談や服薬指導などが実践できるようにした。教科書などではなかなか理解しにくい部分が多いので、病院などでの実際の自分の経験を基に、学生が病院や薬局での実務実習に行った際に役に立つように実習を行った。
	2013年4月～2021年7月	姫路獨協大学薬学部医療薬学科1年次学生（2013年度はカリキュラム変更のため2012年度入学2年次学生も同時開講）に対して、医療倫理の講義を行った。1年次学生が医療倫理について考える必要性を理解できるよう、臨床現場で自らが経験してきた具体的な事例を多く紹介し、実際に医療現場で起きていることを、できるだけ臨場感を持って考えてみるができるように講義を行った。
	2014年4月～2021年2月	姫路獨協大学薬学部医療薬学科6年次学生に対して、機能性食品学の講義を行った。6年次学生対象の科目で実務実習も終了しているので、実際によく使用されている機能性食品を具体的に取り上げ、また臨床現場で問題となり得る医薬品との相互作用についても解説し、より実践的な講義を行った。
	2016年4月～2021年7月	姫路獨協大学薬学部医療薬学科4年次学生に対して、調剤学の講義を行った。処方箋の見方から始まり、調剤の基本的な流れや注意すべき点等について、具体的な内容に基づいて学習を進め、模擬薬局実習を受けるために必要な基本的な知識を修得できるよう講義を行った。

	2018年9月～2021年1月	姫路獨協大学薬学部医療薬学科4年次学生に対して、臨床準備教育に相当する模擬薬局実習において、医療現場でのコミュニケーションに関する実習を行った。作成した模擬実例課題を用いて、薬局、病棟での初回面談や服薬指導などが実践できるようにした。教科書などではなかなか理解しにくい部分が多いので、病院などでの実際の自分の経験を基に、学生が病院や薬局での実務実習に行った際に役に立つように実習を行った。
	2018年12月～2019年12月	姫路獨協大学薬学部医療薬学科6年次学生に対して、先端薬物療法論の講義を行った。肝移植後の薬物療法について、免疫抑制剤などの使用法や、肝炎ウイルスに対する薬物治療など、現場で実際に行われている薬物療法を、病院での実際の経験に基づいて講義を行い、学生にとっても臨場感のあるものとなるように努めた。
	2022年4月～現在	1年次学生に対して、薬学入門の第2回から第4回の講義を行った。1年次学生が現在の薬剤師を取り巻く環境について、少しでも興味を持って理解できるよう、臨床現場で自らが経験してきた具体的な事例を含めて紹介し、実際に医療現場で起きていることを、できるだけ臨場感を持って考えてみるができるように講義を行った。
	2022年4月～現在	4年次学生に対して、OTCヘルスケア論の第1回から第6回の講義を行った。OTC薬について考える上でも、他の科目で学習してきた知識や考え方は非常に重要であるため、その都度復習としての説明も行い、有機的な知識の連携ができるように努めた。
	2022年4月～現在	4年次学生に対して、薬事関係法規・薬事制度の第2回から第8回の講義を行った。細かい内容が多い科目であるが、具体的な事例を含めることで、興味を持ち理解を助けることができるよう努めた。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		

4 その他教育活動上特記すべき事項		
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
簡易懸濁法適用が難しい抗HIV薬の懸濁液の調製について	2019年11月	日本医療薬学会第29回年会
学会等および社会における主な活動		
2013年4月～現在	病院・薬局実務実習近畿地区調整機構委員	
2014年4月～現在	兵庫県薬剤師会薬学教育部委員	
2016年6月～2018年5月	兵庫県薬剤師会理事	
2017年6月～現在	病院・薬局実務実習近畿地区調整機構運営委員	
2017年6月～2022年3月	病院・薬局実務実習近畿地区調整機構 事務局長補佐	
2018年6月～現在	兵庫県薬剤師会薬学教育部副委員長	
2018年8月～2022年3月	病院・薬局実務実習近畿地区調整機構 WEBシステム検討作業部会委員	
2022年4月～現在	病院・薬局実務実習近畿地区調整機構 事務局長	
2022年4月～現在	病院・薬局実務実習近畿地区調整機構 ICT作業部会座長	

専任教員の教育・研究業績

所属 総合教育研究センター	職名 教授	氏名 山野 由美子
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	1985年4月～2021年12月	「機器分析学実習」を指導している。学生がより理解を深められるよう討議を活発に行い、また、関連した国家試験問題も紹介して解説した。
	1985年4月～2021年6月	研究室に配属された学生の研究指導を行った。実験操作法、実験ノート作成の仕方、研究の進め方、文献の読み方など、基本からの指導を行った。また、定期的に報告書を作成させ、卒業前にはパワーポイントを用いて口頭発表を行わせた。
	2004年4月～現在に至る	「有機化学演習」を受け持ち、有機化学の演習を行っている。電子の動きにより化学反応が説明できることを理解させるために、電子の動きを中心に冊子にまとめて教材とした。
	2007年10月～2019年	「有機化学」でカルボニル基の化学を担当した。練習問題を解かせ、学生が理解度をチェックできるよう工夫した。2019年度は、スライドプリントを配り、スライドを用いた授業を行った。削減できた黒板に書く時間分を、反応機構を書かせる時間や問題を解く時間に当てた。
	2017年10月～現在に至る	「合成化学」では、有機化学I～IVまでで教えきれていない重要と思われる所を教科書から抜き出し、プリントに要点をまとめて、講義を行った。2020年度からは、生物有機化学分野を担当した。生体成分の性質や反応を化学構造式から考えら得るように講義内容を冊子にまとめ、パワーポイントで講義した。講義で使用したスライド資料に練習問題の答えと解説を入れて、毎週webclassにアップロードした。また、2022年度は、webclassを使った確認テストを2回行った。
2009年10月～2017年3月	4年次生に対する授業科目として、「精密有機合成化学」（2016年度まで有機化学と称した）の講義を行っていた。医薬品合成を例として、これまでに習った有機化学がどのように応用されているか解説した。CBT受験前であることを意識し、基本的な反応を復習できるよう努めた。また、教材冊子の中には問題を掲載し、自主学習がしやすいよう工夫した。	

	2009年10月～2015年3月	2年次生に対する授業科目として、「生物有機化学」の講義を行っていた。生体成分の性質と反応を有機化学的に理解できるよう、黒板にできるだけ構造式を書き、どの官能基がどのように反応するのか解説した。また、要点をまとめた冊子を作成し、教科書のページ数も記載して、自主学習しやすいよう工夫した。
2 作成した教科書、教材、参考書	2009年～2015年 2009年～2018年 2009年～2019年 2020年～現在	「生物有機化学」の教材作成：生体成分の性質と反応を有機化学的に理解できるよう要点にまとめた。 「精密有機合成化学」の教材作成：これまでに習った有機化学の知識で理解できる医薬品合成例と、スペクトルを冊子にまとめた。 「有機化学系 実習書」の作成 「合成化学1」の教材作成
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 神戸薬科大学FD	2020年10月	AIを用いた入学試験並びに修学状況のIR分析結果の報告と前期遠隔授業に対する学生アンケートの集計結果について
4 その他教育活動上特記すべき事項 なし		
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Takatani N., Beppu F., Yamano Y., Maoka T., Hosokawa M.	論文	J. Oleo Sci. 2021, 70, 549–558. “Seco-type -apocarotenoid generated by -carotene oxidation exerts anti-inflammatory effects against activated macrophages”
Takatani N., Taya D., Katsuki A., Beppu F., Yamano Y., Wada A., Miyashita K., Hosokawa M.	論文	Mol. Nutr. Food Res. 2021, 65, 200405. “Identification of Paracentrone in Fucoxanthin-Fed Mice and Anti-Inflammatory Effect against Lipopolysaccharide-Stimulated Macrophages and Adipocytes”

Okitsu T., Yamano Y., Shen Y.-C., Sasaki T., Kobayashi Y., Morisawa S., Yamashita T., Imamoto Y., Shichida Y., Wada A.	論文	Chem. Pharm. Bull. 2020, 68, 265-272. "Synthesis of one double bond-inserted retinal analogs and their binding experiments with opsins: preparation of novel red-shifted channelrhodopsin variants"
Tsuboi, M., Iwasaki, H., Kaya, K., Wada, A., Yamano, Y.	論文	Jpn. Tokkyo Koho (2020), JP 6696060 B1 20200520. "Vitamin A derivative and method for the preparation thereof"
Yamano, Y., Masumoto, M., Takaichi, S., Wada, A.	論文	Tetrahedron 2018, 74, 1533-1539. "Total synthesis of myxol and deoxymyxol stereoisomers and their application to determining the absolute configurations of the natural products"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
セコカロテノイドの合成研究	2021年3月	日本薬学会第141年会
(9E)-Gyroxanthin diesterの全合成	2021年3月	日本薬学会第141年会
-Carotene由来アポカロテノイドによる炎症抑制機構	2020年11月	日本油化学会第59回年会
Fucoxanthin酸化代謝物の合成と抗炎症効果	2020年3月	日本薬学会第140年会
Siphonaxanthinおよびloroxanthinの全合成	2019年9月	第45回反応と合成の進歩シンポジウム
3. その他		
ヒドロキシメチルカロテノイドの全合成研究	2020年12月	大阪市立大学 人工光合成研究拠点共同利用・共同研究成果報告会 での講演
学会等および社会における主な活動		

山野

1983年1月～現在に至る	日本薬学会会員
1986年1月～2020年12月	日本ビタミン学会会員
1995年1月～現在に至る	日本カロテノイド研究会会員
2002年4月～2021年12月	有機合成化学協会会員
2014年10月～2020年12月	近畿化学協会会員

専任教員の教育・研究業績

所属 薬学部	職名 教授	氏名 畑 公也
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ドイツ語	1981年～現在に至る	「読む」「書く」「聞く」「話す」の総合的なドイツ語運用能力の養成を目指す。授業中にできるだけ多くの口頭、筆記による練習を行うことによって技能の定着を図っている。
教養リテラシー	2006年～2021年	総合文化演習のプレトレーニングとして、日本語の読み書き能力の涵養とスモールグループによるディスカッションとプレゼンテーションの訓練を行っている。
総合文化演習	1995年～現在に至る	「現代の音楽」と「ドイツの歴史と文化」をテーマに小グループによる演習を行っている。テーマ設定や発表、レポート作成に際し、学生の自発性を尊重し、積極性を引き出すことを目指している。
講義「現代の音楽」	2006年～2019年	アンケートやインタビューによって学生の意見を聞き、その結果を授業に反映させることにより、双方向的な教育を行っている。
早期体験学習	2008年～現在に至る	新入生の薬学学習に対するモチベーションを高めるための実習を指導している。
2 作成した教科書、教材、参考書		

3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2015年	小山淳子、中平典子、畑公也、児玉典子「神戸薬科大学図書館における学習支援に向けた活動について」(Libra 2015, 15, 95-107)
4 その他教育活動上特記すべき事項	2012年～2016年	図書館長の業務に従事。
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
畑 公也	研究ノート	Libra 2016, 16, 1-17(3月発行)「『環境音楽』、または『環境』と『音楽』」
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
学会等および社会における主な活動		
1978年～現在に至る	日本独文学会会員	
1978年～2019年	阪神ドイツ文学会会員	
1978年～現在に至る	大阪大学ドイツ文学会会員	
1978年～現在に至る	オーストリア文学会会員	
2007年～現在に至る	日本ポピュラー音楽学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 薬学部	職名 教授	氏名 中山 尋量
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） （1）薬学部学生への教育	2006年4月～2022年3月 2022年4月～ 2006年4月～2012年3月	神戸薬科大学の6年制への学生には、基礎化学、無機錯体化学、物理化学Ⅰ、総合薬学講座の講義、基礎化学実習の指導を行っていた。 また、5年次生からは卒業研究の指導を行っていた。 研究リテラシー、総合薬学講座（前期）、ロジカル思考演習を担当している。
（2）薬学研究科院生への教育	2009年～2022年3月	物理化学Ⅰ（旧カリ） 神戸薬科大学薬学研究科院生に薬学演習、課題研究の指導を行っていた。
2 作成した教科書、教材、参考書		
薬学生のための基礎化学	2015年2月28日	編集 廣川書店
薬学生のための基礎物理	2016年3月30日	編集 廣川書店
物理系薬学Ⅰ.物質の物理的性質（第2版）	2015年3月20日	編集 東京化学同人
物理系薬学Ⅱ.化学物質の分析	2016年4月1日	編集 東京化学同人
物理系薬学Ⅲ.機器分析・構造決定	2016年11月4日	編集 東京化学同人
薬学演習Ⅱ.基礎科学	2021年10月	執筆 東京化学同人
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
学生部長	2008年4月～2010年3月	
学生就職部長	2010年4月～2012年3月	
教務部長	2013年4月～2019年3月	
学生支援センター長	2018年4月～2022年3月	
研究活動		

1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Maeda H., Katsushiro M., Nariai H., Nakayama H.	論文	Phosphorus Res. Bull., 2017, 32, 21-25. "Introduction of Phosphate Group into β -Arbutin by cyclo-Triphosphate"
Maeda H., Tsuchida S., Nariai H., Nakayama H.	論文	Phosphorus Res. Bull., 2018, 34, 9-12. "Phosphorylation of Hydroxyproline with Trisodium cylo-Triphosphate and Evaluation of their Moisture Retaining Property"
Hayashi A., Fukui H., Nakayama H., Tsuhako M.,	論文	Applied Clay Sci., 2020, 187, 105480, Adsorption of Gaseous Aromatic Compounds in Linear Quaternary Ammonium-modified γ -Zirconium Phosphate"
Tanaka M., Fujita Y., Onishi N., Ogawara K., Nakayama H., Mukai T.	論文	Chem. Phys. Lipids, 2020, 232, 104954. "Preparation and Characterization of Lipid Emulsions Containing Styrene maleic Acid Copolymer for the Development of pH-responsive Drug Carriers,"
Hayashi A., Tsushima M., Yano M., Nakayama H..	論文	Clay Sci., 2021, 25, 47-53. "Glycyrrhizic Acid Dipotassium Salt Composite with layered Double Hydroxide as Moisturizer"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
「シクロデキストリンによるエトドラク の 苞 接 能 評 価 」	2017年3月	第137回日本薬学会年会
「アセトニトリルを用いた炭酸型層状複水酸化物によるカルボン酸化合物のインターカレーション」	2018年3月	第98回日本化学会年会
「塩化物型層状複水酸化物によるカルボン酸ガス吸着特性」	2019年3月	第99回日本化学会年会

「シクロデキストリンによるルシノールの溶解性改善とチロシナーゼ活性の評価」	2021年3月	第140回日本薬学会年会
「シクロデキストリンによるトリアムテレンの溶解性の改善」	2020年3月	第141回日本薬学会年会
3. 講演等		
演題名	発表年・月	場所等
学会等および社会における主な活動		
2016年9月～2020年8月	日本無機リン化学学会副会長	
2020年9月～現在	日本無機リン化学学会会長	
2005年4月～2022年	日本薬学会近畿支部委員	
2011年4月～2018年3月	近畿化学協会代議員	
2012年9月～2015年3月	薬学教育モデル・コアカリキュラム改訂に関する調査研究チーム委員	
2016年8月～2021年3月	医道審議会薬剤師分科会薬剤師国家試験出題基準改定部会委員	
2008年7月～現在	薬学共用試験センター-CBT実施委員会委員	
2018年7月～2020年6月	薬学共用試験センター財務委員会委員	
2018年4月～現在	大学コンソーシアムひょうご神戸FD・SD委員会 副委員長	
2017年4月～2018年3月	大学基準協会評価委員会委員	

専任教員の教育・研究業績

所属 薬学部	職名 教授	氏名 松家 次朗
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2002年4月～2010年3月	大学院の前期課程において「医療倫理学特論」を担当し、生命倫理学の成立背景と考え方を論ずるとともに医療専門職の倫理についても講義を行う。（ただし開講年度は隔年である）
	2002年4月～2020年3月	神戸大学医学系大学院において「保健倫理学特論」を担当し、主に医療専門職の倫理学を講義する。（オムニバス形式）
	2006年4月～	「社会薬学」では、生命倫理学の成立背景と基本的な事例を参考に、生命倫理学の基本的な考え方を論じ、さらに、医療専門職としての薬剤師の倫理について講義を行う。（ただし、2013年4月より「社会薬学」のみの講義。2015年度より新カリに移行し、廃止）「現代社会論」では、民主主義社会における行動規範の基本的構造を具体的問題（2015年度からは、定常化社会における社会保障の問題）を取り上げながら講義する。「医療と人間」では、終末期をめぐる種々の倫理的・社会的問題（2015年度からは、生命倫理学の最近の主要問題：2020年3月で終了）を取り上げながら講義を行う。「総合文化演習」（平成25年度より「総合文化演習」に名称変更）では、現代医療の問題をテーマとし、学生の資料調査、発表、及びレポート作成の指導を行う。
	2008年4月～	「生命倫理学」と「医療倫理学」において各倫理における主要問題と課題をとりあげ、ケーススタディーも援用しながら講義を行う。「総合文化演習」（平成26年度より廃止）では、医療における倫理的問題をテーマとして、学生の資料調査、発表、レポート作成の指導を行う。
	2010年4月～	大学院修士課程において医薬品研究開発特論共同担当し、講義を行う。
	2012年4月～	大学院薬学研究科薬学専攻博士課程において「薬学研究基盤形成」（オムニバス形式）で生命倫理について講義を行う。

	2013年4月～	「教養リテラシー」において発表、調査、レポートの書き方(2015年度からは主に本の読み方、論点のまとめ、キーワード探索等の)指導を行う。神戸大学医学部(医学科・保健学科)との合同初期体験実習の指導を行う。(初期体験実習は、2020年3月まで)
	2016年4月～2020年3月	社会科学研究室ゼミ(卒業研究・・・)の指導を始める。
	2016年9月～2020年3月	2年生後期科目として医療コミュニケーション演習を始める。
	2017年9月～	3年生後期科目として医療倫理学演習を始める。SGDによるケーススタディ。
2 作成した教科書、教材、参考書	2015年3月	共著 『薬剤師になる人のための生命倫理と社会薬学』(法律文化社)
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2005年4月～2007年4月	早期体験学習の担当委員の一人となり新入生全員を対象とした早期体験学習を指導する。
	2013年4月～	(同上)
	2015年3月17日	新カリに早期体験の一環として救命救急講習が組み込まれたため、神戸市の応急手当普及員(救急インストラクター)の認定を受ける。
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
松家次朗	翻訳	ジョン・グレゴリー「医師の義務と資格にかんする講義(承前)(神戸薬科大学研究論集Libra第16号、2016年3月)

松家

松家次朗	翻訳	改訳：クリスティアン・ヴォルフ「哲学一般についての予備的叙説」山本道雄著『ドイツ啓蒙の哲学者クリスティアン・ヴォルフのハレ追放顛末記 ドイツ啓蒙思想の一潮流 2』所収。Pp.129-255.（晃洋書房、2016年8月）
松家次朗	翻訳	ジョン・グレゴリー「医師の義務と資格にかんする講義（承前）（神戸薬科大学研究論集Libra第17号、2017年3月）
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
学会等および社会における主な活動		

専任教員の教育・研究業績

所属 薬学部	職名 教授	氏名 安岡 久志
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2022年9月～	「ロジカル思考演習」を担当し、1年次生の基礎力及びプレゼンテーション能力等の向上に資する指導を行っている。
2 作成した教科書、教材、参考書	2017年 (兵庫県立加古川東高校)	中学校・高等学校における学習指導・授業づくり。 藤田祐介・加藤秀昭・坂田仰編著 若手教師の成長をどう支援するか-養成・研修に活かす教職の基礎- pp43-47, 株式会社教育開発研究所, 東京
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2022年6月20日 2022年7月19日	神戸薬科大学SD研修会「高等学校の現状と今後の教育の方向性」～兵庫県立明石北高校を例として～ 神戸薬科大学FD研修会「授業改善と成績評価について」～兵庫県立明石北高校を例として～
4 その他教育活動上特記すべき事項	2012～13年 2022年	神戸薬科大学非常勤講師 リメディアル教育「化学」を担当 (神戸大学附属中等教育学校) 兵庫県立長田高校 課題研究アドバイザー 兵庫県立西宮高校 課題研究アドバイザー
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
学会等および社会における主な活動		
1986年4月～現在	兵庫県高等学校教育研究会科学部会会員・副会長（2020～2021年度）・顧問（2022年度）	
2013年4月～現在	日本スクール・コンプライアンス学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 総合教育研究センター	職名 教授	氏名 奥川 斉
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		4年次の実務実習事前学習 漢方医学 5年次の学外実務実習 6年次のIPW実習
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2017年1月24日 2017年2月12日 2017年7月2日 2017年7月23日 2018年1月24日 2018年7月8日 2018年10月1日 2019年1月23日 2019年6月23日 2019年7月28日 2020年1月14日 2021年1月12日 2021年10月30日 2022年1月12日	漢方の不思議であたりまえのこと シニアカレッジ（西宮）講演 高齢者と漢方 神戸薬科大学同窓会京都支部講演会（京都）講演 がん医療と漢方 神戸薬科大学同窓会徳島支部講演会（徳島）講演 高齢者と漢方 京都女子薬剤師会講演会（京都）講演 漢方の不思議であたりまえのこと シニアカレッジ（西宮）講演 小児における漢方薬神戸薬科大学同窓会徳島支部講演会（徳島）講演 漢方と養生 第13回健康サポートセミナー（神戸）講演 漢方と養生 シニアカレッジ（西宮）講演 夏かぜ・夏バテと漢方 神戸薬科大学同窓会山口支部講演会（山口）講演 痛みと漢方薬 神戸薬科大学同窓会徳島支部講演会（徳島）講演 漢方と養生 シニアカレッジ（宝塚）講演 漢方と養生 シニアカレッジ（宝塚）講演 漢方薬は効くの？ 第18回くすり与健康セミナー（神戸）講演 漢方と養生 シニアカレッジ（宝塚）講演
4 その他教育活動上特記すべき事項	2016年4月～現在	エクステンションセンター 健康食品講座企画委員

研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
学会等および社会における主な活動		
1973年4月～現在	日本東洋医学会会員	
1973年5月～現在	日本生薬学会員	
1980年4月～現在	日本薬学会会員	
2011年3月～現在	日本臨床腫瘍学会会員	
2017年10月～現在	兵庫県立こども病院 治験審査委員会外部委員	
2020年2月～2022年2月	兵庫県薬事審議会委員	

河本

専任教員の教育・研究業績

所属 総合教育研究センター	職名 教授	氏名 河本 由紀子
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2016年4月～現在 2016年4月～現在 2016年4月～現在 2018年4月～現在 2020年4月～現在	4年次の実務実習事前学習 5年次の学外実務実習 6年次の総合薬学講座 1年次の早期体験学習 4年次の社会保障と薬剤経済
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2022年6月3日	第24回 大学 - 医療連携講演会（神戸学院大学）講演
4 その他教育活動上特記すべき事項		
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名

神戸市立医療センター中央市民病院におけるトレーシングレポート運用の現状と課題	2019年1月	第40回日本病院薬剤師会近畿学術大会
薬学実務実習生における薬剤師連携の学習としての服薬情報提供書（トレーシングレポート）に関する検討	2020年2月	第41回日本病院薬剤師会近畿学術大会
兵庫県中小病診対策部活動報告	2020年2月	第41回日本病院薬剤師会近畿学術大会
トレーシングレポートを介した双方向の情報提供による薬剤師連携のアウトカム検証	2020年10月	日本医療薬学会年会第30回年会
学会等および社会における主な活動		
2000年4月～2016年3月	日本病院薬剤師会代議員	
2004年4月～2016年3月	兵庫県薬剤師会病診支部長	
2004年4月～2020年5月	兵庫県病院薬剤師会副会長	
2012年4月～2016年3月	日本病院薬剤師会療養病床委員会委員	
2012年4月～2020年5月	兵庫県薬事協会理事	
2014年4月～2020年5月	日本病院薬剤師会近畿ブロック中小病診委員会委員	
2020年5月～現在	兵庫県病院薬剤師会顧問	
1996年～現在	日本医療薬学会会員	
2016年～現在	日本くすりと糖尿病学会会員	
2016年～現在	日本老年薬学会会員	
2021年～現在	日本薬学会会員	
2021年～現在	日本薬学教育学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 総合教育研究センター	職名 教授	氏名 高尾 宜久
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2018年4月～現在	4年生を対象に「地域医療・プライマリケア論」を担当している。
	2018年4月～現在	4年生を対象に「在宅医療」を担当している。
	2019年4月～現在	5年生を対象に「在宅医療演習」を担当している。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2007年6月～2013年7月	認定実務実習指導薬剤師養成ワークショップタスクフォース
	2017年4月～現在に至る	エクステンションセンター事業統括委員会委員
	2017年4月～2018年3月	生涯教育企画委員会委員
	2017年4月～現在に至る	生涯研修事業委員会委員
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
高尾宜久、麻生美樹、増本憲生、南幸栄、岩川精吾	論文	日本医療マネジメント学会雑誌第17巻第3号，2016.「転倒転落危険度の新たな予測指標としての夜間12時間活動量と日中歩数との比率検討」

2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
神戸薬科大学地域連携サテライトセンターにおける健康サポートセミナー	2018年3月	日本薬学会 第138年会
学会等および社会における主な活動		
1995年6月～2012年3月	日本病院薬剤師会 生涯教育認定薬剤師	
1999年4月～現在に至る	日本薬剤師研修センター 認定薬剤師	
1999年5月～現在に至る	神戸市応急手当普及員（救急インストラクター）	
2003年12月～現在に至る	日本医療薬学会会員	
2004年5月～2006年5月	兵庫県病院薬剤師会評議員	
2004年12月～現在に至る	日本医療マネジメント学会会員	
2007年10月～2010年5月	兵庫県病院薬剤師会伊丹支部支部長	
2008年11月～2016年3月	日本病院薬剤師会 実務実習指導薬剤師認定	
2008年4月～2010年3月	兵庫県病院薬剤師会理事	
2010年3月～現在に至る	日本薬剤師研修センター 認定実務実習指導薬剤師	
2010年4月～2016年3月	兵庫県病院薬剤師会常任理事	
2010年4月～2016年3月	兵庫県薬剤師会 医療保険部委員	
2010年4月～2017年3月	武庫川女子大学非常勤講師	
2012年3月～現在に至る	公認スポーツファーマシスト	
2014年4月～現在に至る	一般社団法人薬学教育評価機構 評価実施員	
2015年12月～現在に至る	日本アンガーマネジメントファシリテーター	

2016年2月～現在に至る	日本老年薬学会会員
2016年2月～現在に至る	キャラバンメイト・認知症サポーター
2016年3月～現在に至る	ユマニチュード入門研修終了者
2017年4月～2022年5月	東灘区薬剤師会理事
2017年2月～現在に至る	日本アンガーマネジメントキッズトレーナー
2017年9月～現在に至る	禁煙指導認定薬剤師
2018年5月～2022年5月	神戸市薬剤師会理事
2018年5月～現在に至る	コグニサイズ指導者
2021年4月～現在に至る	社会福祉法人すこやか会幼保連携型認定こども園甲南すこやかこども園 学校薬剤師
2021年4月～現在に至る	一般社団法人日本口腔ケア学会 薬剤師部会委員・評議員
2021年11月～現在に至る	神戸市地域包括ケア推進部会「多種職連携による口腔機能管理に関する専門部会」委員
2021年6月～現在に至る	東灘区薬剤師会副会長

専任教員の教育・研究業績

所属 総合教育研究センター	職名 教授	氏名 福井 英二
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2017年4月～現在に至る	4年次生の実務実習事前教育
	2017年4月～現在に至る	5年次生の学外実務実習
	2017年12月～現在に至る	6年次生の総合薬学講座
	2018年4月～現在に至る	1年次生の早期体験学習
	2019年10月～現在に至る	5年次生のIPW演習
	2020年4月～現在に至る	6年次生のがん薬物療法論
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2019年4月～現在に至る	がん専門医療人材（がんプロフェッショナル）養成プラン 実習コーディネーター
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
中心静脈栄養療法を行う患者の NST 介入の現状と課題について	2017年・2月	第32回日本静脈経腸栄養学会学術集会
直接作用型経口抗凝固薬(DOAC)の適正使用状況調査	2017年・3月	第81回日本循環器学会学術集会
学会等および社会における主な活動		
1981年5月～現在に至る	日本病院薬剤師会会員	
1998年9月～現在に至る	日本医療薬学会会員	
2000年2月～現在に至る	日本臨床栄養代謝学会会員	
2003年3月～現在に至る	日本クリニカルバス学会会員	
2004年11月～現在に至る	日本臨床腫瘍学会会員	
2005年8月～現在に至る	日本癌治療学会会員	
2012年4月～2016年5月	兵庫県病院薬剤師会理事	
2013年5月～現在に至る	日本薬剤師会会員	
2014年4月～2016年3月	日本病院薬剤師近畿ブロック薬事制度委員会委員	
2014年6月～2016年5月	兵庫県薬剤師会薬局経営部委員	

専任教員の教育・研究業績

所属	総合教育研究センター	職名	教授	氏名	山本 克己
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日		概要	
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2017年4月～現在 2017年4月～現在 2017年4月～現在 2018年4月～現在 2019年4月～現在	4年次の実務実習事前教育 5年次の学外実務実習 6年次の総合薬学講座 5年次・6年次の病院（2施設）における卒業研究を担当 4年次の処方解析学 を担当		
2	作成した教科書、教材、参考書 薬学生のための病院・薬局実務実習テキスト 2010年版～2018年版（各年改訂）（じほう） 研究倫理審査申請準備ガイド （日本薬剤師会 臨床・疫学研究推進準備委員会）	2010年～2018年 2018年3月	「計数・計量調剤」の項を執筆 研究計画書の記載方法について監修		
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等 臨床・基礎薬学連携シンポジウム（主催 神戸薬科大学） 「臨床から基礎までをつなぐ新しい薬学教育のあり方」 第53回薬剤師実践塾（神戸薬科大学 生涯研修講座） 2020年度 生涯研修e-learning講座05（神戸薬科大学） 2020年度 生涯研修e-learning講座09（神戸薬科大学）	2018年10月 2019年6月 2020年10月 2020年10月	演題：「臨床から基礎までをつなぐ新しい薬学教育を目指して」 「レベルアップ輸液調製」 「レベルアップ輸液調製～危険な医薬品の取り扱い～」 「ポリファーマシーに関する対策について」		
4	その他教育活動上特記すべき事項 大阪薬科大学 特任・招聘教授	2009年4月～2015年3月	病院実習導入講義（注射剤混合調製）		

近畿大学薬学部 実務実習評価連絡会議 委員	2010年4月～2016年3月	病院・薬局実務実習指導者による評価の妥当性の検証
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
小林政彦, 但馬重俊, 山本克己, 村田久枝, 石倉久美子, 真常美紀, 吉良俊彦, 谷本祐子, 木下里紗, 辻井佳代, 堀越博一, 守島繁昭, 前田恵治, 隠岐尚吾	論文	大阪市天王寺区における5病院と保険薬局の連携～ 疑義照会項目における統一の効果と課題～, 日本薬剤師会雑誌, 70(3), 27-32, (2018)
辰見明俊, 前川裕希, 小森由理子, 山本克己, 濱口常男, 高橋一栄, 國正淳一	論文	ニボルマブによる重篤な免疫関連有害事象の発現予測因子としての好中球・リンパ球比および血小板・リンパ球比の有用性, 医療薬学, 46(6), 331-339, (2020)
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
“間違わせない仕組み”の導入による医療安全強化と業務の効率化	2017年2月	第38回日本病院薬剤師会 近畿学術大会
採用薬剤の適正使用に関わる電子カルテ薬剤マスタ管理の重要性	2017年2月	第38回日本病院薬剤師会 近畿学術大会
高齢者の睡眠導入剤投与における転倒・転落事故対策とクリニカルパス活用効果	2017年3月	第10回日本医療マネジメント学会 大阪支部学術集会
免疫チェックポイント阻害剤ニボルマブによる免疫関連有害事象発現予測因子の探索	2019年6月	日本医療薬学会 第3回フレッシュャーズ・カンファランス
医薬品情報創出に向けた臨床研究の審査体制(シンポジウム) 「倫理審査委員会」	2021年6月	第23回日本医薬品情報学会総会・学術大会
3. その他		
講演名	発表年・月	会の名称
学校薬剤師の研究活動における今後について	2018年3月	平成29年度第2回大阪府薬剤師会学薬部会 学校薬剤師研修会
ポリファーマシーに関する対策について	2020年1月	高槻市薬剤師会 『薬業連携を通してポリファーマシー!』研修会
薬物療法の現状と展望 - 薬剤の分類、薬効、副作用など -	2020年2月	日本臨床衛生検査技師会 令和元年度認定認知症領域検査技師日臨技指定講習会

無菌調製の基礎知識	2021年6月	令和3年度 大阪府薬剤師会 無菌調剤室利用者研修会
倫理審査における審査委員の観点について ~ 倫理審査申請時の注意点 ~	2022年2月	大阪府薬剤師会 令和3年度学術研究倫理に関する研修会
学会等および社会における主な活動		
2008年4月～現在	一般社団法人 大阪府薬剤師会 理事（2010年4月～2016年6月 副会長）	
2018年6月～現在	一般社団法人 大阪府病院薬剤師会 顧問	
2017年6月～現在	大阪府社会保険診療報酬請求書審査委員会 審査委員	
2011年7月～現在	大阪府献血推進協議会 適正使用対策部会 委員	
2016年9月～現在	公益社団法人 日本薬剤師会 臨床・疫学研究推進委員会 委員	
2017年3月～現在	一般社団法人 大阪府薬剤師会 学術研究倫理審査委員会 委員長	
2008年4月～2016年3月 2022年4月～現在	公益社団法人 日本薬剤師会 代議員	
2008年4月～2016年6月	一般社団法人 大阪府病院薬剤師会 理事（2010年4月～2016年6月 副会長、2016年7月～2018年6月 監事）	
2010年4月～2014年3月	一般社団法人 日本病院薬剤師会 代議員	
2017年6月～2022年3月	公益社団法人 臨床心臓病学教育研究会（JECCS） 理事	
2011年5月～2017年3月	大阪府社会保険診療報酬請求書審査委員会学識経験者審査委員選考協議会選考協議会 委員	
2015年8月～2018年5月	大阪府地域職域連携推進協議会 NCD対策検討部会 委員	
2021年4月～2021年8月	病院・薬局実務実習近畿地区調整機構委員	
1980年～現在	日本薬学会 会員	
2006年～現在	日本医療薬学会 会員	
2017年～現在	臨床心臓病学教育研究会 会員	
2020年～現在	日本医薬品情報学会 会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 総合教育研究センター	職名 教授	氏名 國東 ゆかり
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2021年4月～現在 2021年4月～現在 2021年4月～現在 2021年4月～現在	1年次の初期体験臨床実習 4年次の実務実習事前学習，処方解析1 5年次の学外実務実習 6年次の総合薬学講座
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
ブリナツモマブを安全に投与するためのレジメン登録	2019年10月	第57回日本癌治療学会学術集会
HIV 感染品胎妊婦の母子感染予防にジドブジン注射剤を使用した経験	2019年11月	第29回日本医療薬学会年会
乳がん患者 EC 療法におけるアプレピタントとオランザピンの副作用予防効果の比較	2020年2月	第41回日本病院薬剤師会近畿学術大会
心不全チームと緩和ケアチーム連携後の末期心不全患者における呼吸困難緩和に対するモルヒネの使用実態調査	2020年7月	第84回日本循環器学会学術集会
薬剤師によるirAE対策の遵守確認介入前後におけるフォロー件数の単施設後視的比較検討	2020年10月	第30回日本医療薬学会年会
小児がんに関連した難治性便秘症を回避するための薬剤指導とバイオマーカー診断	2020年11月	第62回日本小児血液・がん学会学術集会
学会等および社会における主な活動		
1983年4月～現在に至る	日本病院薬剤師会会員	
1983年4月～現在に至る	日本薬剤師会会員	
2008年8月～現在に至る	日本臨床腫瘍学会会員	
2008年8月～現在に至る	日本癌治療学会会員	
2008年8月～現在に至る	日本医療薬学会会員	
2010年7月～2020年6月	日本病院薬剤師会生涯研修履修認定	
2011年2月～現在に至る	日本臨床腫瘍薬学会会員	
2017年4月～2021年3月	兵庫県病院薬剤師会理事	
2022年3月～現在に至る	日本薬学会会員	

小椋

専任教員の教育・研究業績

所属 総合教育研究センター	職名 教授	氏名 小椋 千絵
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2022年4月～	4年次の実務実習事前学習，処方解析 5年次の学外実務実習 6年次の総合薬学講座
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項 社会医療法人愛仁会 明石医療センター附属看護専門学校	2016年4月～2020年3月	薬理学講義担当
研究活動		
1．著書・論文等		
氏名	種別	内容
小川 智孝，寺沢 匡史，小椋 千絵	論文	薬剤師による外来化学療法室における全患者指導の構築 愛仁会医学研究誌 VOL.50,108-110,2018
2．学会発表		

演題名	発表年・月	学会名
妊婦授乳婦薬物療法領域における薬剤師業務の構築	2017年11月	第27回日本医療薬学会年会
簡易懸濁法導入への取り組み	2018年2月	近畿薬剤師合同学会大会2018 (第39回日本病院薬剤師会近畿学会大会 第20回近畿薬剤師学会大会)
外来から入院までを通じた薬剤師のシームレスな周産期患者への関わり	2019年1月	第40回日本病院薬剤師会近畿学会大会
薬剤師における外来化学療法室での専従体制の評価	2019年11月	第29回日本医療薬学会年会
ペンプロリズムブの奏功因子の検討	2020年2月	第41回日本病院薬剤師会近畿学会大会
3. その他		
学会等および社会における主な活動		
2009年5月～現在に至る	公益財団法人日本薬剤師研修センター研修認定薬剤師	
2009年7月～現在に至る	認定実務実習指導薬剤師	
2013年9月～現在に至る	日病薬認定指導薬剤師	
2013年7月～2018年6月まで	日本病院薬剤師会生涯研修履修認定	
2018年7月～現在に至る	日病薬病院薬学認定薬剤師	
2019年4月～現在に至る	公認スポーツファーマシスト認定	
1986年4月～現在に至る	日本病院薬剤師会会員	
2016年4月～現在に至る	日本薬剤師会会員	
2016年7月～現在に至る	日本医療薬学会会員	
2018年5月～2022年5月	兵庫県病院薬剤師会理事	
2022年4月～現在に至る	日本薬学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 中央分析室	職名 准教授	氏名 竹内 敦子
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2018年8月～現在に至る	構造解析学II（分担）で質量分析法の応用編を担当した。実際のスペクトル解析も演習形式で行い、理解を深める講義を行った。
	2017年9月～現在に至る	分析化学III（新カリ）（分担）を担当した。薬学研究で生体分子を解析するために必要な分析法を習熟させることを目的として講義を行った。
	2008年4月～現在に至る	分析化学III（旧カリ）から構造解析学（分担）、薬学英語入門I、薬学英語入門IIの講義を担当した。分析化学III（旧カリ）-構造解析学では、生体分子を解析する方法としての質量分析法を習熟させることを目的として講義を行った。3年次前期で担当する薬学英語入門Iでは、医療や薬学などを中心とする自然科学の分野で必要とされる英語の基礎的な知識を修得し、同時に理系英語の初歩的な技能と運用能力を養成することを目的として講義を行った。
	2002年4月～現在に至る	実習としては、2002年から2007年度まで有機化学系実習II、2008年度から有機化学系III実習、2021年度から機器分析学実習を担当した。質量分析計の前での測定を実演したり、自ら作成したポスターを使って質量分析に対する理解を深めるための努力をするとともに、国家試験を意識した解説も行った。
	1981年4月～現在に至る	毎年数名のゼミ生ならびに大学院生の指導を行った。質量分析を通して、研究の目的、実験結果の考え方を把握し、さらなる研究意欲を培わせることを心がけて指導を行った。また、プレゼンテーションについても、わかりやすく聞き手に伝えるかをポイントにおいて指導した。大学院講義では、学生が研究に活用できるような質量分析に関する最近の話題について講義した。
2 作成した教科書、教材、参考書		質量分析法の原理や基礎的内容を学習するための図式化などを取り入れたプリント教材を作成した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		

4 その他教育活動上特記すべき事項		
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Sato K., Yamashita T., Ohuchi H., Takeuchi A., Gotoh H., Ono K., Mizuno M., Mizutani Y., Tomonari S., Sakai K., Imamoto Y., Wada A., Shichida Y.	論文	Nat. Commun. , 2018, 9(1), 1255. doi: 10.1038/s41467-018-03603-3. "Opn5L1 is a retinal receptor that behaves as a reverse and self-regenerating photoreceptor"
Katsuda T, Matsuzaki J, Yamaguchi T, Yamada Y, Prieto-Vila M, Hosaka K, Takeuchi A, Saito Y, Ochiya T.	論文	Elife. 2019 Aug 8;8. pii: e47313. "Generation of human hepatic progenitor cells with regenerative and metabolic capacities from primary hepatocytes."
Takaoka Y, Takeuchi A, Sugano A, Miura K, Ohta M, Suzuki T, Kobayashi D, Kimura T, Sato J, Ban N, Nishio H, Sakaeda T.	論文	PLoS One. 2019 Nov 15;14(11):e0225244. "Establishment of the experimental procedure for prediction of conjugation capacity in mutant UGT1A1."
Takeuchi A, Tode C, Nishino M, Wijaya YOS, Niba ETE, Awano H, Takeshima Y, Saito T, Saito K, Lai PS, Bouike Y, Nishio H, Shinohara M.	論文	Kobe J Med Sci. 2019 Sep 5;65(3):E95-E99. "Newborn Screening for Spinal Muscular Atrophy: DNA Preparation from Dried Blood Spot and DNA Polymerase Selection in PCR."
Wijaya YOS, Nishio H*, Niba ETE, Shiroshita T, Kato M, Bouike Y, Tode C, Ar Rochmah M, Harahap NIF, Nurputra DK, Okamoto K, Saito T, Takeuchi A, Lai PS, Yamaguchi S, Shinohara M.	論文	Genet Test Mol Biomarkers. 2021 Apr;25(4):293-301. "Dried Blood Spot Screening System for Spinal Muscular Atrophy with Allele-Specific Polymerase Chain Reaction and Melting Peak Analysis."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Evaluation of UDP-glucuronosyltransferase 1A1 activity towards bilirubin	2018.8	22nd International Mass Spectrometry Conference
濾紙血DNA を用いた新生児スクリーニングシステムの開発	2019.3	日本薬学会第139年会

マウス採尿法によるプロスタグランジン代謝物の定量操作の工夫について	2019.5	第67回質量分析総合討論会
UGT1A1活性が薬物代謝に及ぼす影響の検証	2020.3	日本薬学会第140年会
遺伝子疾患の診断システムの開発と応用	2021.3	日本薬学会第141年会
学会等および社会における主な活動		
1981年～2009年	日本ビタミン学会会員	
1981年～	日本薬学会会員	
2001年～	日本質量分析学会会員	
2004年～	日本医用マススペクトル学会会員	
2005年～2017年	American Society for Mass Spectrometry会員	
2006年7月	第33回BMS(Biological Mass Spectrometry)コンファレンス実行委員	
2010年7月	第37回BMS(Biological Mass Spectrometry)コンファレンス実行委員	
2013年7月	第40回BMS(Biological Mass Spectrometry)コンファレンス実行委員長	
2013年～	BMS研究会世話人	
2014年～	日本医用マススペクトル学会評議員	
2015年7月	第42回BMS(Biological Mass Spectrometry)コンファレンス実行委員	
2017年7月	第44回BMS(Biological Mass Spectrometry)コンファレンス実行委員	

専任教員の教育・研究業績

所属 英語第一研究室	職名 准教授	氏名 赤井 朋子
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
英語	1992年～現在に至る	<p>1年生、2年生を対象に英語の総合的な運用能力の養成を目的とした授業を行う。具体的な授業内容は科目や時期によって異なり、教科書も様々なものを使用してきたが、中でも自然科学的な内容(医療や健康、環境問題等)のテキストは早くから積極的に使用してきた。また、4年制の時代(～2005年)においては、1クラスの人数が約80人と非常に多かったため、人数が多くても遜色がないようにビデオ教材など視聴覚教材の使い方を様々な工夫して授業を行った。</p> <p>2013年度から導入された選択必修制の英語の授業(2年次生「英語V」「英語VI」)においては、病院での簡単な英会話や、医療に関する英文の講読を行っている。習熟度別に授業が行われる科目(1年次生「英語I」「英語II」「英語III」「英語IV」)においては、英語を得意としない学生にもわかりやすいように、理解度をチェックしながらの双方向的な授業を心がけている。いずれの科目においても、会話や読解等、様々な機会において、ペア・ワークやグループ・ワークを積極的に活用している。</p>
総合文化演習	1995年～現在に至る	<p>2年生を対象に演習形式の授業を行う。映画や演劇に関するゼミとイギリス文化に関するゼミを担当。作品に関するディスカッションや文献購読などの演習を行い、その上で、学生の研究発表とレポート作成を指導する。2002年度からスモール・グループ・ディスカッション方式も取り入れ、特定の課題についてすべての学生がディスカッションに参加できるように工夫している。また、演劇や映画を通して人間や文化に対する理解を深め、グローバル社会に欠かせない、文化の多様性に対する寛容性を養うことも視野に入れている。そして、互いの意見を尊重しながら問題解決につなげていくコミュニケーションの取り方をゼミ生が習得できるように心がけている。</p>

早期体験学習	2005年～現在に至る	新入生の早期体験学習が円滑に行われるように様々な形で学生のサポートを行っている。特に、2005年度（早期体験学習トライアル）、2009年度、2013年度、2017年度、2021年度には新入生の担任としてクラス授業を行い、体験学習後のプレゼンテーションの指導や、報告書原稿の添削等を行っている。また、学生の学習先である病院や薬局を訪問したり、学生の引率を行ったりもしている。
2 作成した教科書、教材、参考書 授業のプリントを作成	2013年～現在に至る	英語V、VIにおいて、学生が予習しやすいように、各章毎に予習プリントを作成し配布している。薬学に特化した市販の教科書が比較的少ないため、既存の教科書を本学の学生向けにカスタマイズして使用している。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項 入学予定者のための英語教育	2003年～2021年	推薦入試による入学予定者に、あらかじめ問題集を送付し、返送されてきた学生の解答に目を通した上で、2月にそれに関する解説の授業を行った。
クラス担任	2005年～現在に至る	クラス担任として、種々の関係業務に従事。
習熟度別英語科目のとりまとめ役	2013年～現在に至る	習熟度別英語科目である「英語II」「英語IV」において、担当の先生方（非常勤講師）と、毎年、テキスト選定や授業の運営等についてミーティングを重ねている。本学の場合、学生間で英語の学力に大きな差が見られるので、教員同士の連携やコミュニケーションをはかることにより、多様な学生への効果的な対応に取り組んでいる。
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

赤井 朋子	論文	森佳子・奥香織・新沼智之・萩原健（編）『演劇と音楽』（森話社、2020年）223-241. 「ノエル・カワードの『作詞作曲』（一九三二）試論——言葉と音楽によるレビュー」
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
「坪内士行の英国体験と宝塚少女歌劇」（口頭発表）	2017年3月	英米文化学会比較文学分科会
"Cultural Transfer between London and Takarazuka: the Imitation and Adaptation of Musical Revue in 1920s Japan"（口頭発表）	2017年8月	Association for Asian Performance 17th Annual Conference (AAP 2017) (Las Vegas, USA)
"Cultural Transfer between London and Takarazuka: the Translation and Adaptation of Western Comedies in Late 1910s-1920s Japan"（口頭発表）	2018年7月	International Federation for Theatre Research World Congress 2018 (IFTR 2018) (Belgrade, Serbia)
"The Takarazuka Girls' Opera and the Urban-Rural Boundary"（口頭発表）	2019年7月	International Federation for Theatre Research World Congress 2019 (IFTR 2019) (Shanghai, China)
「ヴィクトリア劇場と <i>Emily of Emerald Hill</i> 」（口頭発表）	2020年9月	アジア・パシフィック劇場文化分科会
3. その他		
「坪内士行の英国留学と宝塚少女歌劇について」	2018年9月	第36回英米文化学会大会 ワークショップ「交差するまなざし——外国（人）が見つけた日本、日本（人）が見つけた日本をめぐって——」

「Cultural Centre Theatreと <i>Mimi Fan</i> (1962)ーシンガポール最初の英語演劇」	2021年9月	第39回英米文化学会大会 ワークショップ「共振するアジア・パシフィック演劇ー劇場空間から読みとく複数性ー」
学会等および社会における主な活動		
1992年4月～現在	日本英文学会 会員	
1992年4月～現在	日本シェイクスピア協会 会員	
2000年4月～現在	日本演劇学会 会員	
2004年4月～現在	日本比較文化学会 会員	
2004年6月～2008年6月	日本演劇学会 幹事	
2006年8月～現在	International Federation for Theatre Research 会員	
2007年4月～2009年3月	日本演劇学会『近現代演劇研究』編集委員	
2010年4月～2011年8月	日本演劇学会大阪大会(IFTR Osaka 2011) 実行委員	
2011年8月～現在	英米文化学会 会員	
2017年3月～現在	Association for Asian Performance 会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 総合教育研究センター	職名 准教授	氏名 竹仲 由希子
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
有機化学実習の講義と実験指導	2002年1月～2017年	基礎的な実験操作をパワーポイントを用いた事前の講義で詳しく説明し、イメージしやすくしている。
基礎化学実習の講義と実験指導	2020年9月～現在に至る	基礎的な実験操作を写真や動画を挿入したパワーポイントを用いた事前の講義で詳しく説明し、イメージしやすくしている。
有機化学演習の講義	2006年4月～現在に至る	毎回小テストをおこない、学生の理解度を確認しながら進めている。
有機化学Iの講義	2008年10月～2016年	まとめおよび練習問題のプリントを配布し、学生が学習内容を整理しやすくしている。毎回小テストをすることにより、分からない箇所を学生に認識させる。
生薬化学の講義	2017年4月～現在に至る	天然由来の化合物を骨格毎に生成経路も含めてまとめたプリントを配布している。講義では、生薬学や有機化学で学んだことの復習もかねながら、色々な観点から構造式をとらえられるようにしている。
構造解析学IIの講義	2018年8月～現在に至る	天然物の構造決定の歴史とともに、各種スペクトルデータを用いた構造解析の手法を講義した後、実際のNMRチャートを使用し構造決定の練習をさせる。演習として、スペクトルデータを用いて、数人のグループで未知の化合物の構造決定をさせる。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
チューター学生に対する指導	2005年4月～2008年3月	
6年生に対する国家試験勉強の指導	2017年4月～現在に至る	
研究活動		

1 . 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Yukiko Takenaka, Yoshiyuki Mizushina, Nobuo Hamada, Takao Tanahashi	論文	<i>Heterocycles</i> 2017, 94 (9), 1728-1735, doi:10.3987/com-17-13704. "A cytotoxic pyranonaphthoquinone from cultured lichen mycobionts of <i>Haematomma</i> sp. "
Yukiko Takenaka, Takao Tanahashi	論文	<i>Phytochemistry Letters</i> , 2018, 26 , 64-67. "Biosynthetic origin of alkylated decaline-type polyketides and induction of a new metabolite by addition of benzoate in cultured mycobionts of <i>Pyrenula</i> sp."
Duy Hoang Le, Yukiko Takenaka, Yoshiyuki Mizushina, Takao Tanahashi	論文	<i>Vietnam J. Chem.</i> , 2019, 57 (1), 112-115, doi:10.1002/vjch.201960018. "Evaluation of DNA polymerase inhibitory activities of depsidones, depsides and diaryl ethers from the Vietnamese lichen <i>Rimelia clavulifera</i> "
Yukiko Takenaka, Naoaki Okazaki, Toyoyuki Nishi, Naotaka Nagakura, Takao Tanahashi	論文	<i>Heterocycles</i> , 2020, 101 (1), 186-194, doi:10.3987/COM-19-S(F)10. " Iridoid glucosides from <i>Linociera sangda</i> "
Yukiko Takenaka, Satoko Seki, Toyoyuki Nishi, Takao Tanahashi	論文	<i>Journal of Natural Medicines</i> , 2020, 74 (4), 811-818, doi:org/10.1007/s11418-020-01436-3. " Two new sesquiterpenes from <i>Artemisia annua</i> L. "
2 . 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
学会等および社会における主な活動		
2010年1月～2011年12月	日本地衣学会評議員	
2014年1月～2015年12月	日本地衣学会監事、評議員	
2016年1月～2017年12月	日本地衣学会庶務幹事	

専任教員の教育・研究業績

所属	医療薬学研究室	職名	准教授	氏名	佐々木 直人
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日		概要	
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2016年10月～2017年3月		3年次生の薬物治療学を担当した。臨床医としての経験を生かした講義を行った。	
		2018年9月～現在		3年次生の薬物治療学を担当している。臨床医としての経験を生かした講義を行っている。	
		2018年4月～現在		4年次生の処方解析・処方解析を担当している。病態・薬物治療に関して、最新の知見・薬物も交えて講義している。	
		2016年10月～現在		4年次生の実務実習事前教育を担当している。臨床医としての経験を生かした教育を行っている。	
		2017年11月～現在		6年次生の総合薬学講座を担当している。国家試験対策のポイントを示しながら、分かりやすく講義している。	
		2016年10月～2020年3月		6年次生の処方解析学・処方解析演習を担当した。病態・薬物治療に関して、最新の知見・薬物も交えて講義した。	
		2016年10月～現在		学部学生および大学院生に実験操作、実験ノート作成、研究発表などの指導を行っている。また、学生自身が目的意識をもって研究を進められるように指導している。	
		2017年4月～現在		大学院修士課程において病態解析治療学特論の講義を行っている。	
		2018年4月～現在		大学院博士課程において疾患解析治療学特論の講義を行っている。	
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					

研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Sasaki N, Yamashita T, Kasahara K, Fukunaga A, Yamaguchi T, Emoto T, Yodoi K, Matsumoto T, Nakajima K, Kita T, Takeda M, Mizoguchi T, Hayashi T, Sasaki Y, Hatakeyama M, Taguchi K, Washio K, Sakaguchi S, Malissen B, Nishigori C, Hirata K.	論文	Arterioscler Thromb Vasc Biol. 37:66-74, 2017. "UVB exposure prevents atherosclerosis by regulating immunoinflammatory responses."
Amin HZ, Sasaki N, Yamashita T, Mizoguchi T, Hayashi T, Emoto T, Matsumoto T, Yoshida N, Tabata T, Horibe S, Kawauchi S, Rikitake Y, Hirata KI.	論文	Scientific Reports. 9(1):8065, 2019. "CTLA-4 Protects against Angiotensin II-Induced Abdominal Aortic Aneurysm Formation in Mice."
Emoto T, Sasaki N, Yamashita T, Fukunaga A, Masaki T, Nishigori C, Hirata KI.	論文	Photomedicine and Photobiology. 40:17-22, 2019. "Possible beneficial effects of narrow-band UVB therapy on hypertension and vitamin D levels in patients with cutaneous disease."
Amin HZ, Sasaki N, Hirata KI, Rikitake Y.	論文	Circ Rep. 2:339-342, 2020. "Cytotoxic T Lymphocyte-Associated Antigen-4 Protects Against Angiotensin II-Induced Kidney Injury in Mice."
Tanaka T, Sasaki N, Rikitake Y.	論文	J Clin Med. 10(24):5907, 2021. "Recent Advances on the Role and Therapeutic Potential of Regulatory T Cells in Atherosclerosis."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
特定の紫外線B波照射による動脈硬化抑制効果の検討	2021年1月	第42回日本光医学・光生物学会
特定波長の紫外線B波による動脈硬化抑制効果とその機序の解明	2021年3月	日本薬学会第141年会
Development of novel LED phototherapy to limit atherosclerosis.	2021年3月	第85回日本循環器学会学術集会
Development of a novel anti-inflammatory phototherapy against atherosclerosis.	2021年10月	第19回国際動脈硬化学会議

Cytotoxic T-Lymphocyte-Associated Antigen-4 Downregulates Immunoinflammatory Responses and Improves Angiotensin II-Induced Kidney Injury and Abdominal Aortic Aneurysm Formation.	2021年10月	第19回国際動脈硬化学会議
学会等および社会における主な活動		
2000年5月～現在	日本内科学会会員（2005年9月～現在：日本内科学会認定内科医、2015年12月～現在：日本内科学会総合内科専門医）	
2000年5月～現在	日本循環器学会会員（2008年4月～現在：日本循環器学会認定循環器専門医）	
2008年6月～現在	日本動脈硬化学会会員（2019年7月～現在：評議員）	
2008年12月～現在	日本免疫学会会員	
2012年5月～現在	American Heart Association会員	
2015年5月～現在	日本臨床免疫学会会員	
2016年11月～現在	日本薬学会会員	
2017年6月～現在	日本光医学・光生物学会	

専任教員の教育・研究業績

所属 薬理学研究室	職名 准教授	氏名 八巻 耕也
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2002.4.1 - 2003.4.1 - 2006.3.31 2006.4.1 - 2009.3.31 2006.4.1 - 2011.3.31 2016.4.1 - 2020.3.31 2018.4.1 - 2007.4.1 - 2007.4.1 - 2009.4.1 - 2013.4.1 - 2014.4.1 - 2018.4.1 - 2018.4.1 - 2020.3.31 2018.4.1 - 2020.3.31 2020.4.1 -	薬理学実習（兼任） 情報リテラシー助手 薬理学（兼任） 臨床薬理学特論（兼任） アクティブラボ（兼任） 病態解析治療学特論（兼任） 薬理学 薬学総合講座（兼任） 基礎薬学（C B T）演習（兼任） 薬学入門（兼任） 医薬品毒性学（兼任） 高齢者医療（兼任） 在宅医療演習（兼任） 海外薬学研修（兼任） 医薬品構造学（兼任） 講義においては自作のプリントやプレゼンテーションを作成し、学生の理解が深まるように努力した。また、講義中も適宜、学生に反応を確認したり、問いかけを行うことにより、学生が講義を理解しているかを把握するように努めた。 2008年度の薬理学、2012年度の薬理学Iの講義では、授業評価を基にした「ベストティーチャー賞(学内賞)」を受賞した。
2 作成した教科書、教材、参考書		

		講義を行うにあたり、自作のプリントやプレゼンテーションを作成し利用した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		<p>学術論文 八巻 耕也, 上田 昌史, 上田 久美子, 江本 憲昭, 水谷 暢明, 池田 宏二, 八木 敬子, 田中 将史, 土生 康司, 中山 喜明, 武田 紀彦, 森脇 健介, 北河 修治 薬学雑誌., 2016, 136, 1051-1064. “基礎から臨床までを繋げる分野横断的統合型初年次導入教育「薬学入門」の学習効果”</p> <p>学術論文 八巻 耕也, 池田 宏二, 上田 久美子, 土生 康司, 中山 喜明, 武田 紀彦, 森脇 健介, 和田 昭盛, 小山 淳子, 児玉 典子, 北河 修治 薬学雑誌., 2017, 137, 1285-1299. “分野横断的統合型初年次導入科目「薬学入門」へのミニッツペーパー導入が生み出す学習意欲と学習効果”</p>
4 その他教育活動上特記すべき事項	2005.4.1 - 2006.4.1 - 2007.3.31 2007.4.1 - 2020.3.31	<p>高校での出張講義</p> <p>チューター（成績不良な学生への学習支援）</p> <p>実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップのタスクフォース</p> <p>高校、大学（正規の講義以外）、卒後の薬剤師のための教育にも可能なかぎり参画している。</p>
研究活動		
1 . 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Yamaki K, Terashi M, Ogura S, Inoue S, Naka N, Nakagaki T, Oka N, Koyama Y	論文	Pharmazie. 2020, 75, 7, 339-343. "Anti-allergic effect of the Src family kinase inhibitor saracatinib."
2 . 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名

皮膚への免疫複合体の斑点状の分布を指標とした IgG 依存性アレルギーモデル (G-ASDIS) の確立とそれを利用した抗アレルギー物質の探索	2018 年 3 月	日本薬学会 第 138 年会
Src family kinase 阻害薬 saracatinib の抗アレルギー作用	2019 年 3 月	日本薬学会 第 139 年会
IgA は抗原分布および B 細胞の活性化を制御し、認識抗原に対する感作を抑制する	2020 年 3 月	日本薬学会 第 140 年会
IgG 依存性アレルギーモデル G-ASDIS の確立とその誘導に關与する細胞及び分子の探索	2021 年 3 月	日本薬学会 第 141 年会
マウス脾臓 B 細胞の B cell receptor 刺激による活性化に対する IgA の抑制効果	2022 年 3 月	日本薬学会 第 142 年会
学会等および社会における主な活動		
2002 年 ~ 現在	日本薬学会 会員	
2002 年 ~ 現在	日本薬理学会 会員	
2016 年 ~ 現在	日本薬学教育学会 会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 総合教育研究センター	職名 准教授	氏名 児玉 典子
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2009年～現在に至る	（総合薬学講座）Zoomと対面授業： 重要ポイントの説明と、間違いやすい問題をピックアップし、基本知識を活用して応用問題を解く方略を示した。
	2009年～現在に至る	（感染制御学）オンデマンド授業： スライドだけでなく、教科書を活用して丁寧に説明した。基本問題と応用問題を含む確認テスト（課題）を提出してもらい、その解答と解説を行った。
	2020年～現在に至る	（感染制御学）オンデマンド授業： 院内感染の事例を、ニュースや論文から抽出して、薬剤耐性菌の発現メカニズムを説明できた。また、病原体、耐性機構、治療薬、臨床の場での課題などを考えてもらった。
	2008年～現在に至る	（薬学英語入門）オンデマンド授業： 生命の誕生を深いレベルで理解させるために、他の先生と協力してQ&A形式（先生と生徒役）の授業を行い、学生に授業内容の理解と専門知識の復習や新しい領域（知識）を学んでもらった。
	2008年～現在に至る	（薬学英語入門）：オンデマンド授業： 一方通行の授業とならないように、他の先生と協力してQ&A形式に加えて、ディスカッション形式を取り入れた授業を行い、高血圧の発症のメカニズムなど既存の専門知識の正確性について吟味・修正してもらった。
	2009年～現在に至る	（生化学）オンデマンド授業： 理解度チェック問題と解説にgoogleフォームの活用と補講を行った。授業では上級学年の科目との関連を示しながら、生体における糖の重要性を理解してもらった。
	2008年～現在に至る	学習支援： 留年生の学習及び生活指導を行った。学力レベルの向上を目指し、予習・復習を中心としたZoomを活用した勉強会を実施した。
	2009年～現在に至る	学習カウンセリングを対面の他、Zoom、メール、電話を活用して行った。

	2018年～現在に至る	新入生対象（希望者）のリメディアル化学勉強会を開催し、オリジナルテキストを用いて学生の勉強方法の改善と知識の定着を目指す補習授業を、Zoomを活用して実施した。
2 作成した教科書、教材、参考書	2012年3月 2016年3月 2018年9月 2020年3月	HUMAN READER 生命科学英語 - life and disease - HUMAN READER 生命科学英語 - life and disease - 改訂版 感染制御学 病原微生物との共存と戦い 初版 ホッコリする化学計算 リメディアル化学 vol.1 - 化学計算の基礎 - 第1版 (企画・編集)
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2009年10月～現在 2017年8月～現在 2010年10月～現在 2010年12月～2014年12月 2012年 4月～現在 2013年9月	キャリアカウンセラー資格取得（CCE, Inc. 認定 GCDF-Japan） キャリアコンサルタント資格取得（キャリアコンサルティング協議会 認定） ゲシュタルト療法研修修了資格（日本心理療法士協会） TA心理カウンセラー2級資格取得（日本心理療法協会） 認定心理士資格取得（日本心理学会） 睡眠健康指導士上級（日本睡眠教育機構認定）
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
児玉 典子, 細川 美香, 藤波 綾, 小山 淳子, 竹内 敦子	論文	薬学教育, 2018, 2, 167-174. "薬学英语学習の過程で生じる正感情と影響要因の検討 動機づけ予測に関連した感情の観点からの考察 "
児玉典子, 小山淳子, 安岡由美	研究ノート	Libra, 2019, 19, 1-9. "Audience response system (ARS) の学習意欲に及ぼす影響因子について 学習意欲を向上させる双方向性授業を目指して "
児玉典子, 内田吉昭, 川西和子, 安岡由美, 西村克己, 小山淳子, 佐子綾香, 和田昭盛	研究ノート	Libra, 2020, 20, 1-8. "研修会前後における気分・感情・意欲の変化 意欲向上の予測因子について "
児玉典子	研究ノート	Libra, 2021, 21, 1-8. "協調学習における学習活動と自己効力感の関連 "
児玉典子, 竹仲由希子, 西村克己, 山崎渚, 宮田興子	研究ノート	Libra, 2021, 21, 9-17. "薬学部1年生の学業成績に及ぼす影響要因について "

2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
クリッカーを用いた双方向性授業の実践例と学生の意識調査	2019年8月	日本薬学教育学会（第4回）ポスター発表
薬学英語学習者の予習の自己効力感を促す個人的要因の探索	2020年3月	日本薬学会（第140年会）ポスター発表
“ Stay home ” 期間，学生の効果的な自学学習とリメディアル教育におけるメタ認知的学習支援の試み	2020年9月	日本薬学教育学会（第5回）オンライン発表
新入生の学年移行時における学習の動機づけ・学習観の変化	2021年3月	日本薬学会（第141年会）オンライン発表
Zoomを活用したオンライン型研修会の試み・今後の課題について	2021年8月	日本薬学教育学会（第6回）オンライン発表
学会等および社会における主な活動		

専任教員の教育・研究業績

所属 生化学研究室	職名 准教授	氏名 灘中 里美
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） (1) 本学薬学部学生への教育	2008年4月-現在に至る	<p>学部学生に分子生物学の講義を行っている。</p> <p>1) 担当している分野の進歩は著しいので、講義担当のコアカリの SB0s を満たすように努めながら、講義に関連する内容における最近の発見や注目されている事項（新しい遺伝子医薬品の開発例や病因の解明など）についてプリントを作成し、適宜配付している。</p> <p>2) ベーシックな分子生物学的知識を習得する課題であるが、できるだけ医療に関連するよう解説し、高学年で習う臨床系の科目の理解につながる基盤をつくってもらえるように努めている。</p> <p>3) 1回の講義では、なるべくテーマを絞り、1つのテーマに関して単回で終了するように心掛けている</p> <p>4) 講義した内容が薬剤師国家試験にどのように出題されているかを知ってもらうために、過去に出題された国家試験の問題を10～20問選んでプリントで配布して解説を行い、これらの問題に関連したものを定期試験に出題している。</p> <p>5) 講義内容を深く理解してもらうために、文章問題を演習として取り入れている。また、昨今の国家試験に対応できる能力を養うため、定期試験ではマーク式問題だけでなく思考力を問う文章問題を出題している。</p>
	2007年4月-現在に至る	<p>学部学生に生物学系の実習指導を行っている。</p> <p>1) 実習前の導入講義では、講義で習った基礎知識を復習するとともに、実習内容が医学・薬学の領域で実際に活用されていることが想像できるように努めている。また、コンパクトにまとめて30分以内で説明が終了するように心掛けている。</p>

		2) 実習時間後に学生個々にレポートを作成してもらい、その日に行った実習を理解できるようにしている。
	2007年4月-現在に至る	<p>学部学生に卒業研究の指導を行っている。</p> <p>1) 受け身の講義と違い、参加型の実習であるので、学生自身が問題解決していけるようなトレーニングを行えるよう心掛けている。具体的には、学生のレベルに合った課題を与え、実験目的や方法を説明した後は、各自で日常の実験計画を立ててもらい、学生自身の力で課題を解決していくようなスタイルをとっている。学生だけでは目標達成が難しい場合はサポートするが、目標をクリアできない場合においても、答えのない課題に対してアプローチしていくプロセスを経験してもらうように心掛けている。</p> <p>2) 論理的な考え方や表現力が身に付くように、定期的に研究内容を学生にまとめさせ、発表するためのサポートを行っている。</p> <p>3) 卒業研究I, IIで行った研究活動の成果をまとめる卒業論文の作成、および研究成果を発表する際のプレゼンテーションの指導を行っている。</p>
(2) 本学大学院生への教育	2007年4月-現在に至る	大学院特論(生化学特論)の講義を担当している。研究活動を通して知り得た最新の知識を講義で紹介できるよう努めている。
2 作成した教科書、教材、参考書	2011年4月-現在に至る 2020年4月-現在に至る	生物学系II実習(生化学実習)テキスト 薬学生化学(分子生物学II)教科書(廣川書店)
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		特になし
4 その他教育活動上特記すべき事項		特になし
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

Sakamoto, K., Ozaki, T., Ko, Y.-C., Tsai, C.-F., Gong, Y., Morozumi, M., Ishikawa, Y., Uchimura, K., Nadanaka, S., Kitagawa, H., Zulueta, M. M. L., Bandaru, A., Tamura, J., Hung, S.-C., and Kadomatsu, K.	論文	Nature Chem. Biol. (2019) 15, 699-709. doi.org/10.1038/s41589-019-0274-x Glycan sulfating patterns define autophagy flux at axon tip via PTPR -cortactin axis.
Nadanaka, S., and Kitagawa, H.	総説	Glycoforum (2019) 22 (3), A8. doi:10.32285/glycoforum.22A8 Insight into the key roles of chondroitin sulfate proteoglycans in cancer biology
Nadanaka, S., Hashiguchi, T., and Kitagawa, H.	論文	FASEB J., (2020) 34 (6), 8385-8401. doi.org/10.1096/fj.201902076R Aberrant glycosaminoglycan biosynthesis by tumor suppressor EXTL2 deficiency promotes liver inflammation and tumorigenesis through Toll-like 4 receptor signaling.
Akasaka-Manyo, K., Manyo, H., Nadanaka, S., Kitagawa, H., Kondo, Y., Ishigami, A., and Endo, T.	論文	J. Biochem.,(2020) 167 (5), 483-493. doi.org/10.1093/jb/mvz113 Decreased ADAM17 expression in the lungs of a-Klotho reduced mouse.
Nadanaka, S., Miyata, S., Yaqiang, B., Tamura, J. and Kitagawa, H.	論文	Biomolecules (2020) 10, 1499. doi.org/10.3390/biom10111499 Reconsideration of the Semaphorin-3A Binding Motif Found in Chondroitin Sulfate Using Galnac4s-6st-Knockout Mice.
2 . 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
がん細胞の増殖や浸潤シグナルを制御するグリコサミノグリカン Insights into the key roles of glycosaminoglycan signaling in cancer biology	2019.09.18-20	第92回日本生化学会大会
Chondroitin sulfate-mediated N-cadherin/beta-catenin signaling is associated with basal-like breast cancer cell invasion	2019.09.29- 10.03	11th International Conference on Proteoglycans
神経可塑性に関わるセマフォリン3Aが認識する糖鎖構造の解析	2019.08.19 - 21	第38回日本糖質学会年会

グリコサミノグリカンの合成異常に着目したAAアミロイドーシス発症制御因子の解明	誌上開催 2020.11.21- 11.23	第39回日本糖質学会年会
グリコサミノグリカンの合成異常による肝細胞がん発生メカニズムの解析	誌上開催 2020.11.21- 11.23	第39回日本糖質学会年会
学会等および社会における主な活動		
2001年～現在	日本分子生物学会会員	
1994年～現在	日本生化学会会員	
2001年～現在	細胞生物学会会員	
1995年～現在	糖質学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 放射線管理室	職名 准教授	氏名 安岡 由美
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2013年～現在に至る 2009年～現在に至る 2010年，2014年，2018年 1990年～現在に至る 1991年～現在に至る 1991年～現在に至る 2010年～現在に至る	放射化学：放射線に関する基礎知識 放射線管理学：放射線に関する総合的理解 早期体験学習：問題意識を持ち早期体験学習への積極性の育成 物理化学系実習（放射線実習）：放射性物質の安全取扱い ゼミ生の教育：環境放射能・公衆衛生 放射線業務従事者教育訓練：法令を順守と放射性物質の取り扱い法 実務実習事前教育：放射性医薬品の取り扱いについて
2 作成した教科書、教材、参考書	2007年～現在に至る	物理化学系実習（放射線実習）テキスト
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		

研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Iwata, D., Nagahama, H., Muto, J., Yasuoka, Y.	論文	Scientific reports 2018, 8,13028. "Non-parametric detection of atmospheric radon concentration anomalies related to earthquakes."
Wakabayashi, A., Yasuoka, Y., Janik, M., Nagahama, H., Fukuhori, N., Mori, Y., Arai, Y., Fujii, S., Mukai, T.	論文	Radioisotopes 2019 68 317-329."Derivation and validity evaluation of calibration factors for activated-charcoal radon collectors."
Higuchi S., Kamishiro Y., Ishihara M., Yasuoka Y., Mori Y., Hosoda M., Iwaoka K., Tokonami S., Takahashi R., Janik M., Muto J., Nagahama H., Mukai T.	論文	Radiation Protection Dosimetry 2019,184, 426-429."Evaluation of a radon air monitor in the measurement of radon concentration in water in comparison with a liquid scintillation counter."
Omori, Y., Nagahama, H., Yasuoka, Y., Muto, J.	論文	Scientific reports 2021, 11, 4092."Radon degassing triggered by tidal loading before an earthquake."
Muto, J., Yasuoka, Y., Miura, N., Iwata, D., Nagahama, H., Hirano, M., Ohmomo, Y., Mukai T.	論文	Scientific reports 2021, 11, 7451."Preseismic atmospheric radon anomaly associated with 2018 Northern Osaka earthquake."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
空気用ラドンモニタを用いた水中ラドン濃度測定におけるスクリーニング法の検討2	2021年12月	第3回日本放射線安全管理学会・日本保健物理学会合同大会
2018年大阪府北部地震前後の大気中ラドン濃度変動の検討	2019年7月	第56回アイソトープ・放射線研究発表会

監視モニタによる空气中ラドン濃度測定の検討 温度依存性の評価	2019年10月	第69回日本薬学会関西支部大会
空気用ラドンモニタを用いた水中ラドン濃度測定におけるスクリーニング法の検討	2020年6月	日本保健物理学会第53回研究発表会 Web大会
排気モニタによる大気中ラドン濃度の推定	2020年6月	日本保健物理学会第53回研究発表会 Web大会
学会等および社会における主な活動		
1990年～現在に至る	日本薬学会会員	
1990年～現在に至る	日本アイソトープ協会	
1990年～現在に至る	日本保健物理学会会員 (2021/7～ 理事)	
2001年～現在に至る	日本放射線安全管理学会会員	
2002年11月～現在に至る	放射線医学総合研究所 客員協力研究員	
2011年4月～2012年3月	日本放射線安全管理学会 メンタルケア委員会 委員	
2011年9月～2013年3月	日本保健物理学会 専門研究会「暮らしの放射線Q&A対応委員会委員」	
2011年9月11日	神戸市消防局 感謝状	
2011年11月1日	平成23年度主任者部会年次大会ポスター賞	
2014年7月～現在に至る	岡山県 環境放射線等測定技術委員会委員	
2016年10月～現在に至る	ISO/TC147(水質) /SC3 (放射線測定) 国内審議委員会委員	
2017年10月12日	日本アイソトープ協会 平成29年度放射線安全取扱部会表彰 放射線安全取扱部会功労表彰	

専任教員の教育・研究業績

所属	微生物化学研究室	職名	准教授	氏名	中山 喜明
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
(1) 本学薬学部学生への教育(講義、実習)		2014年より2016年	「生物学系 実習」(3年次後期)を分担した。微生物の取扱い、検出、同定についての基本的技能などを指導した。		
		2015年より現在	「アクティブラボ」(1-3年次通年)を分担した。低学年次の研究室未配属学生に対して微生物化学研究室で行っている研究について、体験学習を行った。		
		2015年より現在	「薬学入門」(1年次前期)を分担した。生物系薬学に関する基礎的講義を実施した。SGDやピア評価により能動的学習の導入を実践した。		
		2016年より現在	「微生物化学実習」(2年次後期)を分担した。微生物の取扱い、検出、同定についての基本的技能などを指導した。		
		2017年より現在	「免疫学」(2年次後期)を分担した。		
(2) 本学薬学部学生への研究指導		2014年より現在	研究室に配属された学部学生に対して、研究指導を実施した。		
(3) 本学薬学研究科大学院生への教育		2013年, 2017年, 2019年	「生命科学特論」を分担。大学院生に対して、講義を実施した。		
(4) 他大学での講義		2015年	京都大学大学院薬学研究科「基盤生物化学概論・生命科学概論講義」を分担した。		
2 作成した教科書、教材、参考書			該当なし		

3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		<p>学術論文 八巻 耕也, 上田 昌史, 上田 久美子, 江本 憲昭, 水谷 暢明, 池田 宏二, 八木 敬子, 田中 将史, 土生 康司, 中山 喜明, 武田 紀彦, 森脇 健介, 北河 修治 薬学雑誌., 2016, 136, 1051-1064. “基礎から臨床までを繋げる分野横断的統合型初年次導入教育「薬学入門」の学習効果”</p>
		<p>学術論文 八巻 耕也, 池田 宏二, 上田 久美子, 土生 康司, 中山 喜明, 武田 紀彦, 森脇 健介, 和田 昭盛, 小山 淳子, 児玉 典子, 北河 修治 薬学雑誌., 2017, 137, 1285-1299. “分野横断的統合型初年次導入科目「薬学入門」へのミニッツペーパー導入が生み出す学習意欲と学習効果”</p>
4 その他教育活動上特記すべき事項	2016年より現在 2018年6月14日	実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップのタスクフォース 兵庫県立小野高校への出張授業「薬学とは」
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Nakayama, Y., Masuda, Y., Ohta, H., Tanaka, T., Washida, M., Nabeshima, Y., Miyake, A., Itho, N., Konishi, M.	論文	“Fgf21 regulates T-cell development in the neonatal and juvenile thymus.” Scientific Reports. 7(1)310. (2017)
Masuda, Y., Nakayama, Y., Tanaka, A., Naito, K., Konishi, M.	論文	“Antitumor activity of orally administered maitake -glucan by stimulating antitumor immune response in murine tumor.” PLoS One. 12(3)e0173621. (2017)
Masuda Y, Nakayama Y, Mukae T, Tanaka A, Naito K, Konishi M	論文	“Maturation of dendritic cells by maitake -glucan enhances anti-cancer effect of dendritic cell vaccination.” International Immunopharmacology. 67;408-406 (2019)

2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
分泌型ヘムタンパク質Neudesin遺伝子欠損マウスは赤血球代謝亢進と貯蔵鉄減少を示す	2018年11月	分子生物学会年会
分泌型ヘムタンパク質Neudesinによる赤血球代謝調節機構の解析	2019年6月	Pharmaco-Hematologyシンポジウム
腫瘍免疫抑制因子Neudesinの阻害ペプチドの開発	2020年10月	日本薬学会関西支部大会
学会等および社会における主な活動		
2004年8月～現在に至る	日本分子生物学会会員	
2012年8月～現在に至る	日本糖質学会会員	
2017年11月～現在に至る	日本薬学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 臨床心理学研究室	職名 准教授	氏名 中島 園美
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2010年4月～現在に至る	「社会心理学」は、オンデマンド講義であった。 対人関係における様々な理論や実験を概説し、自己と他者の考えや行動への理解が深まることを目的とした。質問紙などの心理学的手法を用いて自己分析を行なうなどし、学生が体験的に学べるよう工夫を行った。
	2012年4月～現在に至る	「総合文化演習」大学生の発達支援教育プログラムとして、将来のビジョンを獲得することを目的としたソリューション・フォーカスト・アプローチを導入した表現療法を実施している。さらに、疾患に関連する映画を用いたグループ発表を行い、患者や患者の家族への理解や生と死、医療のあり方について考えを深めた。また毎回SGDと小レポートを導入し、自己表現力や言語化能力向上を目指している。プレゼンテーション力を高めるために、まず最初に、グループでの発表、次に個人での発表と段階的にプレゼンテーション体験を積めるようにしている。その際、学生が到達目標を明確に理解できるように、ルーブリックを作成し、学生自身で達成度を評価できるようにした。それによって、自分の課題を発見することを目指した。
	2015年4月～2017年8月	「臨床心理学」医療人として、患者と患者の家族への共感を基盤としたコミュニケーション能力を養うために、各疾患毎に心理的特徴を中心に概説し、望ましい関わり方を提示した。さらに、チーム医療の一員として多職種の中で適切なコミュニケーションが発揮できるように連携の留意点も解説した。さらに講義内容が医療現場で実践できるように、ケースを設定して、ロールプレイ、SGDを導入し、最後に自身のロールプレイを振り返り、考察や今後の自身の課題を小レポートにまとめることを求めた。次回の授業にて数名分の小レポートを読み上げてコメントをし、小レポートへの積極的な関与を高めたり、より多くの適切な対応例を知ることができるようにした。
	2015年9月～現在に至る	「人の行動と心理」は、オンデマンド講義であった。 全人的医療を遂行できる医療人を養成するために、患者と家族の心理社会的側面を理解したり、医療現場でのコミュニケーション力の基盤を形成することを目指し、1年次に「人の行動と心理」、2年次の前期で「医療コミュニケーション」、後期で「医療コミュニケーション演習」と体系的・段階的なカリキュラムとなっている。 まず、1年次での「人の行動と心理」では、人の行動と心理のメカニズムやプロセスを学び、患者や家族の心理的な問題をアセスメントし、適切に援助するための基盤を形成する内容となっている。 コミュニケーション・トレーニングである「アサーション」ワークも導入している。内容は、学生の身近な問題をケースとして取り上げ、自分の考えや気持ちを、相手の立場や気持ちも考慮しながら、適切な言葉で伝え、相互尊重の関係を築くことのできるコミュニケーション・スキルの獲得を目的とした構成にしている。そして、次回の授業のスライドにおいて、学生のレポートの中のいくつかを取り上げフィードバックを行い、同級生の適切な表現をモデリングできるように意図している。

	2016年4月～現在に至る	<p>「医療コミュニケーション」はオンデマンド講義であった。1年次の「人の行動と心理」で学んだことを基盤として、2年次の本授業では、医療人として、患者と患者の家族への共感的なコミュニケーションを実践できるように、各疾患毎の患者の心理的特徴を中心に説明し、望ましい関わり方を提示した。また、患者の家族のストレスも説明し、家族にも配慮やサポートが必要なことを伝えた。さらに、チーム医療の一員として多職種の中で適切なコミュニケーションが発揮できるように連携の留意点も解説した。コミュニケーショントレーニング「アサーション」の「傾聴」ワークを導入している。ゲストスピーカーとして、ホスピスに従事しているチャプレンに終末期に関する話をして頂いた。臨床現場の話聞くことは、医療者としての態度形成に役立つと考えた。</p>
	2016年10月～現在に至る	<p>「医療コミュニケーション演習」「医療コミュニケーション」で学んだことを基盤とした患者や家族への支援や医療チームのメンバーへの対応する実践力を獲得するために、臨床事例を設定し、小グループで、ロールプレイ、SDGを行った。小グループでの活動を通して、チームでの問題発見・解決能力を養うことも意図している。</p>
	2016年11月～現在に至る	<p>「医療倫理学演習」医療現場における倫理的問題を有する事例を提示し、SGDをしてワークシートに記入という構成になっている。導入において、学生がテーマに興味をもち、活発なディスカッションが行えるよう、関係する内容の新聞記事や映画などを紹介してから、事例を提示するという工夫を行なっている。</p>
	2018年9月～現在に至る	<p>「高齢者医療」において、『高齢者の心理と接し方』担当。現代の超高齢社会、医療者として高齢者と円滑にコミュニケーションを取るための基盤となる高齢者の心理的側面を概説した。今後の薬剤師の在宅医療への積極的な参画が求められることから、在宅医療の事例を提示し、患者の立場では、どのように感じるか、どんな医療を求めているかなどワークシートをもとにSGDを行なってもらった。患者の体験を知り、患者の立場で考えられ医療者の態度育成を意図している。</p>
	2019年4月～現在に至る	<p>「在宅医療演習」において、「高齢者の終末期在宅医療を考える」の講義を担当。高齢者の在宅医療の事例を用いたスモールグループディスカッションを通して、在宅医療を担う医療者の態度育成を目指している。ワークシートを用いて、学生が考えを深めていけるよう工夫した。</p>
<p>2 作成した教科書、教材、参考書</p>		
<p>3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</p>	2013年9月	<p>「教育プログラムとしてのコラージュ療法 - 誘発コラージュ法と認知物語療法を導入した試み - 」日本心理臨床学会第32回秋季大会 大会シンポジウム発表 口頭発表 抄録集111 . 2013</p>
	2013年10月	<p>「コラージュ療法に認知物語アプローチを導入した教育プログラム開発研究 - コラージュ作品を用いてのグループ・ディスカッションの効果 - 」日本コラージュ療法学会第5回大会 一般演題 口頭発表 抄録集24-25 . 2013</p>
	2014年	<p>「コラージュ療法に誘発コラージュ法と認知物語療法を導入した教育プログラム開発研究 - イメージ変化と認知の変化の事例検討 - 」コラージュ療法学研究 5(1), 59-70 . 2014 .</p>

	2018年9月	「薬学生による「認知症カフェ」の取り組み メモリ・ブック作成による認知症患者と家族介護者との交流プログラム」第3回日本薬学教育学会大会 一般演題 ポスター発表 講演要旨集 222.
	2019年6月	学長裁量経費に基づく教育改革プログラム及び学内研究プログラム成果報告会(2018年度)「『認知症カフェ』における認知症高齢者そして家族介護者との交流活動を通しての薬学生の医療コミュニケーション力の変化 傾聴スキルの向上について」
	2020年3月	「医療系学生への共感力育成教育プログラム導入の効果検証 - 闘病記を用いた共感ワーク - 」日本薬学会第140年会 一般演題 ポスター発表 要旨集 194.
4 その他教育活動上特記すべき事項	2015年10月	第70回リカレントセミナー 講演「薬剤師のためのコーチング コーチングスキルを用いて患者さんとのコミュニケーション力をアップしよう」
	2016年6月	2016年度喫煙者の「禁煙教育」講演「認知行動アプローチで禁煙ワーク」場所：神戸薬科大学
	2016年6月	第1回健康サポートセミナー 講演「幸福へのヒントを得る心理学」場所：東灘区民センター(うはらホール)8階 会議
	2016年9月	平成28年度 兵庫地区大学月曜懇談会 9月例会 講演「軽度発達障害の特徴と学生支援」場所：神戸薬科大学
	2018年3月	がん哲学学校 in 神戸 第17回メディカル・カフェ 講演「ストレス・マネジメント」場所：地域連携サテライトセンター
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
編集代表：北河 編集：岩川、高尾、長嶺 執筆：山中、中島、小塚、長嶺、辻井、南、播本、白川、笠原、太田	著書	「薬剤師、在宅へ行く」南山堂 1章 Bad Newsを受容できない患者への対応 p 11-15. 8章 看取りに備えるーエンド・オブ・ライフケア p103-109.執筆担当(2022)
中島園美、松井左知子	論文	新型コロナウイルス感染症による活動自粛が認知症の家族介護者に与える精神的影響に関する質的研究 日本在宅医療連合学会誌第3巻別冊 40-44.2022. (査読有)
中島園美	論文	大学生への発達支援教育プログラムとしてのコラージュ療法の応用 - ソリューション・フォーカスト・アプローチに基づくワークシートを用いて - コラージュ療法研究 12(1),3-14.2021. (査読有)
2. 学会発表(2017.1.1~2021.12.31に行った学会発表)		
演題名	発表年・月	学会名

薬学生に対する終末期ケア教育の試み	2020年3月	日本薬学会第140年会
コラージュ療法を導入した大学生への発達支援教育プログラム	2020年11月	日本コラージュ療法学会第12回大会
薬学生への共感性を高める教育的プログラム Jefferson Scale of Empathyでの効果検証	2020年9月	第5回日本薬学教育学会大会
新型コロナウイルス感染症による活動自粛が認知症の家族介護者に与える精神的影響に関する質的研究	2021年11月	第3回日本在宅医療連合学会
薬剤師の声の高低は患者の安心感とパーソナリティ印象にどう影響するのか？	2021年8月	第6回日本薬学教育学会大会
学会等および社会における主な活動		
2006年4月～現在に至る	日本心理臨床学会員	
2009年4月～現在に至る	カウンセリング学会員	
2009年4月～2017年11月	地方独立行政法人 大阪府立病院機構 大阪はびきの医療センター（旧大阪府立呼吸器・アレルギー医療センター） 教育入院プログラム「ストレス・マネジメント」心理教育担当、アトピー性皮膚炎患者および家族へのカウンセリング担当	
2013年4月～現在に至る	日本コラージュ療法学会員	
2014年10月15日	帝塚山学園（帝塚山大学） 講演 教育セミナー「ストレスマネジメント 対人関係を円滑にするコミュニケーション」	
2014年12月	「重症アトピー性皮膚炎患者への長期的支援としての集団コラージュ療法 - 作品と認知物語療法を通して表現された心的世界の検討 - 」 第62回 京都文教コラージュ療法研究会 講演	
2015年12月～現在に至る	日本心身医学会員	
2016年4月～現在に至る	日本薬学教育学会員	
2016年4月～現在に至る	日本薬学会員	
2021年5月～現在に至る	日本在宅医療連合学会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	製剤学研究室	職名	准教授	氏名	古林 呂之
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） 学部学生に対する教育		2018年10月～ 2020年4月～	3年次科目『薬剤設計学』、4年次科目『臨床薬剤学』（3コマ）、6年次科目『臨床薬剤学』（1コマ）『総合薬学講座』を担当している。SBOsに基づき、薬剤師国家試験で取り扱われる内容をできる限り盛り込んだ資料を作成し、配布している。 4年次科目『臨床薬剤学』（3コマ）、6年次科目『臨床薬剤学』（1コマ）を担当している。SBOsに基づき、薬剤師国家試験で取り扱われる内容をできる限り盛り込んだ資料を作成し、配布している。		
2 作成した教科書、教材、参考書		年月日	概要		
(1) 製剤化のサイエンス(改訂7版) 寺田勝英 / 高山幸三編集		2015年3月23日	製剤化のサイエンス 第2部製剤設計 第2章製剤化と製剤試験法 「医薬品添加物」、「製剤化」ネオメディカル(pp.174-pp.202)を執筆した。(前職において作成)		
(2) 「わかりやすい薬物動態計算問題の解き方」(ネオメディカル)		2019年3月28日	腎クリアランスpp.113-pp.118、クレアチニンクリアランス(Cockcroft-Gaultの式)(pp.119-pp.123)を執筆した。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 特になし					
4 その他教育活動上特記すべき事項 特になし					
研究活動					
1. 著書・論文等					

氏名	種別	内容
Sakane T., Okabayashi S., Kimura S., Inoue D., Tanaka A., Furubayashi T.	論文	Pharmaceutics, 2020, 12, 1227-1234."Brain and Nasal Cavity Anatomy of the Cynomolgus Monkey: Species Differences from the Viewpoint of Direct Delivery from the Nose to the Brain"
Tanaka A., Takayama K., Furubayashi T., Mori K., Takemura Y., Amano M., Maeda C., Inoue D., Kimura S., Kiriya A., Katsumi H., Miyazato M., Kangawa K., Sakane T., Hayashi Y., Yamamoto A.	論文	Mol. Pharm. 2020, 17, 32-39."Transnasal Delivery of the Peptide Agonist Specific to Neuromedin-U Receptor 2 to the Brain for the Treatment of Obesity"
Inoue D., Furubayashi T., Tanaka A., Sakane T., Sugano K.	論文	Eur. J. Pharm. Biopharm., 2020, 149, 145-153."Quantitative estimation of drug permeation through nasal mucosa using in vitro membrane permeability across Calu-3 cell layers for predicting in vivo bioavailability after intranasal administration to rats."
Furubayashi T., Inoue D., Nishiyama N., Tanaka A., Yutani R., Kimura S., Katsumi H., Yamamoto A., Sakane T.	論文	Pharmaceutics, 2020, 12, 79-92."Comparison of Various Cell Lines and Three-Dimensional Mucociliary Tissue Model Systems to Estimate Drug Permeability Using an In Vitro Transport Study to Predict Nasal Drug Absorption in Rats."
Furubayashi T., Inoue D., Kimura S., Tanaka A., Sakane T.	論文	Pharmaceutics, 2021, 13, 1363. "Evaluation of Pharmacokinetics of Intranasal Drug Delivery for Targeting Cervical Lymph Nodes in Rats."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
ラマン分光法を利用した粉末状薬物の経鼻吸収性推定法の構築IV ~ 培養細胞上での溶解速度の頭打ちの検出 ~	2020年5月	日本薬剤学会第35年会
鼻粘膜を介した薬物の頸部リンパ節送達における動態制御に関する検討	2020年8月	第36回日本DDS学会学術集会
鼻腔内投与を想定した薬物のCalu-3細胞層透過に及ぼす薬液pHの影響に関する検討	2021年3月	日本薬学会第141年会
脂肪乳剤による薬物の鼻粘膜吸収促進作用に関する考察	2021年5月	日本薬剤学会第36年会

鼻粘膜を介したペプチド性薬物の頸部リンパ節送達	2021年6月	第37回日本DDS学会学術集会
3. その他		
講演演題名	発表年・月	会名
点鼻剤の過去・現在・未来～薬物動態学・製剤学から点鼻剤を考える～	2019年10月	第183回神戸西ブロック薬学研修会
学会等および社会における主な活動		
1995年9月～	日本薬物動態学会委員（現在に至る）	
1996年1月～	日本薬学会会員（現在に至る）	
1997年1月～	日本薬剤学会会員（現在に至る）	
2001年7月～	日本DDS学会会員（現在に至る）	
2008年9月～	米国薬学会 American Association of Pharmaceutical Scientists 会員（現在に至る）	
2013年9月～	創剤フォーラム会員（現在に至る）	
2019年5月～	日本がん免疫学会会員（現在に至る）	

専任教員の教育・研究業績

所属	薬品物理化学研究室	職名	准教授	氏名	佐野 紘平
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
(1) 本学薬学部学生への教育(講義、実習)		2016年～現在	物理化学系実習（2年次後期） GM計数管によるβ線の測定、計数の統計的変動の理解に関する実習等を担当。		
		2016年～現在	物理化学（2年次後期）（分担、6コマ） 溶液の性質および電気化学に関する講義を担当。 学生の理解を深めるために、問題演習を実施。		
		2016年～2020年	アクティブラボ（1～3年次通年） 1～3年次の学部学生に対して、物理化学関連の実験指導を実施。		
		2017年～現在	薬学入門（1年次前期） 物理系薬学に関する基礎的講義を実施。		
		2017年～現在	アイソトープ演習（3、4年次前期）（分担、6コマ） 放射線取扱主任者試験（国家試験）の資格取得を目指し、問題演習を実施。 2018年度と2020年度、受講生から第1種放射線取扱主任者試験に1名ずつ合格。		
(2) 本学薬学部学生への教育(講義、実習)		2016年～現在	研究室に配属された学部学生に対して研究指導を実施。 担当学生計5名が学会優秀発表賞を受賞（計6件）。		
(3) 本学薬学研究科大学院生への教育		2016年～現在	大学院生に対して、講義および研究指導を実施。 担当学生1名が学会優秀発表賞を受賞（1件）。		
		2019年、2021年	物理系創薬学特論（大学院博士）		
(4) 他大学での講義		2017年7月14日	京都大学大学院薬学研究科の大学院生にセラノスティックス分子プローブに関する講義を実施。		

2 作成した教科書、教材、参考書		該当なし
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		該当なし
4 その他教育活動上特記すべき事項		該当なし
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Kohei Sano, Yuko Kanada, Kengo Kanazaki, Ning Ding, Masahiro Ono, Hideo Saji	論文	<i>Journal of Nuclear Medicine</i> , 58 :1380-1385 (2017). Brachytherapy with intratumoral injections of radiometal-labeled polymers that thermo-responsively self-aggregate in tumor tissues.
Kohei Sano, Yuko Kanada, Katsushi Takahashi, Ning Ding, Kengo Kanazaki, Takahiro Mukai, Masahiro Ono, Hideo Saji	論文	<i>Molecular Pharmaceutics</i> , 15 :3997-4003 (2018) Enhanced delivery of radiolabeled polyoxazoline into tumors via self-aggregation under hyperthermic conditions.
Kohei Sano, Ling Bao, Natsuka Suzuno, Kento Kannaka, Toshihide Yamasaki, Masayuki Munekane, Takahiro Mukai	論文	<i>ACS Applied Polymer Materials</i> , 1 :953-958 (2019) Development of cancer-targeted single photon emission computed tomography/fluorescence dual imaging probe based on polyoxazoline.
Kohei Sano, Natsuka Suzuno, Ling Bao, Yoshie Haratake, Kohei Kijima, Masayuki Munekane, Toshihide Yamasaki, Takahiro Mukai	論文	<i>ACS Applied Polymer Materials</i> , 3 :4889-4895 (2021) Development of a poly(2-ethyl-2-oxazoline)-based fluorescence imaging probe targeting folate receptor in tumor tissues.
Kohei Sano, Yumi Ishida, Toshie Tanaka, Tatsuya Mizukami, Tomono Nagayama, Yoshie Haratake, Masayuki Munekane, Toshihide Yamasaki, Takahiro Mukai	論文	<i>Cancers</i> , 13 :5005 (2021) Enhanced delivery of thermoresponsive polymer-based medicine into tumors by using heat produced from gold nanorods irradiated with near-infrared light.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Enhanced delivery of radiolabeled thermoresponsive polymers into tumors under hyperthermic conditions for internal radiotherapy. (Best Poster Award受賞)	2018年・11月	The tenth China-Japan-Korea Symposium on Radiopharmaceutical Sciences

熱応答凝集性ポリマー型放射性薬剤を用いる内用療法の開発研究	2019年・11月	第59回 日本核医学会学術総会
生体直交型反応による薬物放出を可能とする抗がん剤内封リポソーム製剤の開発（JCA若手研究者ポスター賞受賞）	2021年・10月	第80回 日本癌学会学術総会
関節リウマチの診断、治療に資する蛍光色素標識酸化鉄ナノ粒子の開発（優秀ポスター発表賞受賞）	2021年・10月	第71回 日本薬学会関西支部大会
Internal radiotherapy of tumors using radiolabeled polymers that thermoresponsively self-aggregate under hyperthermic conditions. (Young Investigator Award受賞)	2021年・11月	The 11th China-Japan-Korea Symposium on Radiopharmaceutical Sciences
3. その他（講演等）		
演題名	発表年・月	学会名
水溶性ポリマーを母体とするがんの診断・治療用プローブの開発（日本薬学会物理系薬学部会奨励賞 受賞講演）	2017年・3月	日本薬学会 第137年会
Brachytherapy with intratumoral injections of radiometal-labeled polymers that thermo-responsively self-aggregate in tumor tissues. (日本核医学会研究奨励賞（最優秀賞）受賞講演）	2018年・11月	第58回 日本核医学会学術総会
水溶性高分子の物理化学的特性に基づくがんのセラノスティクス薬剤の創製（日本薬学会奨励賞）受賞講演）	2019年・3月	日本薬学会 第139年会
がんのセラノスティクスを目指した水溶性ポリマーを基盤とするDDS製剤の開発	2020年・8月	第36回 日本DDS学会学術集会
がんの核医学治療に資する小線源型放射性薬剤の開発	2021年・5月	核医学診断・治療のためのRI利用推進シンポジウム－ ⁶⁴ Cu・ ⁶⁷ Cu：核種製造と治療薬創製の展望－
学会等および社会における主な活動		
2003年～現在	日本薬学会会員	

佐野

2006年～現在	日本分子イメージング学会会員
2008年～現在	日本核医学会会員
2016年～現在	日本DDS学会会員
2019年～現在	日本癌学会会員

専任教員の教育・研究業績

所属	社会科学研究室	職名	准教授	氏名	小門 穂
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2019年4月～ 2020年4月～	<p>「医療政策倫理入門」では、医療者として考え判断するための基盤を身につけることを目標とし、医療政策という制度的な観点から医療倫理に関する原則、歴史と現状についての講義を行い、関連する事例を用いて自分で考える時間を作る。</p> <p>「医療倫理学」で医療倫理の原則や主要な問題について講義した後、「医療倫理学演習」で事例を用いた個人ワークを行う。「総合文化演習」ではQOLをテーマに、受講生の文献精読、発表、レポート作成を指導する。</p>		
2	作成した教科書、教材、参考書	2021年8月31日	松島哲久・宮島光志編『新版 薬学生のための医療倫理【コアカリ対応】』（丸善出版）に、「人工授精・体外受精」および「生殖革命・精子バンク・代理出産」を執筆した。		
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等				
4	その他教育活動上特記すべき事項				
研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別		内容	

小門

小門穂	論文	女性の身体の資源化に抗う 代理出産をめぐる日仏の動向、『科学技術社会論研究』17巻、2019年4月、93-103頁
小門穂	論文	フランスにおける性別表記変更の脱医療化 21世紀司法の現代化法のインパクト、『ジェンダー法研究』第6号、2019年12月、157-165頁
Jusaku Minari, Megumu Yokono, Kayo Takashima, Minoru Kokado, Ryuichi Ida, Yutaka Hishiyama	論文	Looking back: three key lessons from 20 years of shaping Japanese genome research regulations, Journal of Human Genetics, May 2021, https://doi.org/10.1038/s10038-021-00923-z
小門穂	論文	フランス生命倫理法2021年改正の動向、『医事法研究』第3号、2021年3月、121-129頁
小門穂	論文	フランス生命倫理法改正と「母親」の変容、『年報医事法学』36号、2021年9月、10-15頁
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
How to regulate the use of gene editing technology on human embryos-the Japanese context	2020年8月	4S (Society for Social Studies of Science)
フランス生命倫理法改正と「母親」の変容	2020年11月	日本医事法学会第50回研究大会
研究倫理審査と感染症流行の「緊急事態」:海外の主な検討を題材に	2020年12月	第32回日本生命倫理学会年次大会
How Japan governs reproductive technologies-An analysis of the current debate	2021年10月	4S (Society for Social Studies of Science)
配偶子提供に関わる倫理と意思決定 躊躇と受容の要因分析	2021年11月	第33回日本生命倫理学会年次大会
学会等および社会における主な活動		

小門

2003年4月～現在に至る	日本生命倫理学会会員
2005年9月～現在に至る	科学技術社会論学会会員
2015年4月～現在に至る	日本医事法学会会員
2016年12月～現在に至る	日本フランス語教育学会会員
2017年2月～現在に至る	4S (Society for Social Studies of Science)会員
2018年1月～現在に至る	日本生命倫理学会第10期・第11期国際交流委員会委員
2020年12月～現在に至る	日本生命倫理学会評議員・推薦理事
2021年1月～現在に至る	内閣府総合科学技術・イノベーション会議 生命倫理専門調査会委員

専任教員の教育・研究業績

所属	臨床薬学研究室	職名	准教授	氏名	原 哲也
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2020年7月1日 -	<p>学部学生に薬物治療学、薬物治療学、処方解析、総合薬学講座を担当している。これまでの臨床医としての経験に基づき、学生の疾患の病態への理解と興味を引き出すため、実際に経験した症例とのエピソード、病棟での実体験をできるだけ織り交ぜながら講義するようにしている。講義前にパワーポイントファイルをプリントし、一部穴埋め式にして、集中力を維持させるよう工夫している。少単元毎、もしくは授業毎に講義したことの復習や、具体的に国家試験で求められる知識レベルをイメージできるように、過去問を提示して、解答させるようにしている。グーグルフォームを用いて、リアルタイムに学生の理解力を把握する。これにより、正解率が高い問題の解説は少なくし、低い問題には時間を費やす、という対応ができるように独自に工夫をしている。神戸大学医学部医学科の学生や、研修医への教育にも従事しており、研究室に配属された学生には、医学部学生との合同授業や、研修医との合同ミーティングをZOOMを用いて参加させている。これらによって多職種連携への意識づくり、医師視点での考え方を身に着け、将来の医師への情報提供、疑義照会がスムーズにできるように工夫している。</p>		
2	作成した教科書、教材、参考書 遮断薬のすべて 第三版	2008年	「遮断薬の血管、血管内皮に対する作用」を担当した。		
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等				
4	その他教育活動上特記すべき事項				

研究活動		
1 . 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Okano M, Hara T, Nishimori M, Irino Y, Satomi-Kobayashi S, Shinohara M, Toh R, Jaffer FA, Ishida T, Hirata K.	論文	In Vivo Imaging of Venous Thrombus and Pulmonary Embolism Using Novel Murine Venous Thromboembolism Model JACC Basic Transl Sci.2020;5:344-356.
Hisamatsu E, Nagao M, Toh R, Irino Y, Iino T, Hara T, Tanaka H, Satomi-Kobayashi S, Ishida T, Hirata KI.	論文	Fibronectin-containing High-Density Lipoprotein is Associated with Cancer Cell Adhesion and Proliferation. Kobe J Med Sci 2020;66:E40-E48.
Oshita T, Toh R, Nagano Y, Kuroda K, Nagasawa Y, Harada A, Murakami K, Kiriyama M, Yoshikawa K, Miwa K, Kubo T, Iino T, Nagao M, Irino Y, Hara T, Shinohara M, Otake H, Shinke T, Nakajima K, Ishida T, Hirata KI.	論文	Association of cholesterol uptake capacity, a novel indicator for HDL functionality, and coronary plaque properties: An optical coherence tomography-based observational study. Clin Chim Acta. 2020;503:136-144.
Suzuki M, Tanaka H, Yokota S, Hara T, Ueda Y, Hirata KI.	論文	Multiple cardiac complications associated with collagen disease. J Echocardiogr. 2020, in press.
Yoshikawa S, Hara T, Suzuki M, Fujioka M, Taniguchi Y, Hirata KI.	論文	Imatinib Dramatically Improved Pulmonary Hypertension Caused by Pulmonary Tumor Thrombotic Microangiopathy (PTTM) Associated with Metastatic Breast Cancer. Int Heart J. 2020;61:624-628.
Jaffer FA, Hara T.	論文	PET/MR Illumination of Atherosclerosis Pathobiology: How a Nanobody Becomes Somebody. JACC Cardiovasc Imaging. 2019;123:2027-2028.
2 . 学会発表		

演題名	発表年・月	学会名
Real-Time in Vivo Imaging of Thrombosis Initiated by Red Blood Cell Aggregation in Novel Murine Stasis Model of DVT.	2018年7月	日本動脈硬化学会 学術総会
Establishment of novel deep venous thrombosis model suitable for in vivo imaging.	2018年11月	AHA Scientific Sessions 2018
新規マウス血栓モデルによるDVT生体イメージング	2018年9月	日本腫瘍循環器学会 学術総会
Establishment of femoral vein ligation model; a new DVT imaging model.	2019年4月	Vascular Discovery 2019.
Novel Deep Venous Thrombosis Model Enabled Visualization of Thrombus Formation and Organization Process in vivo.	2019年3月	日本循環器学会 学術総会
学会等および社会における主な活動		
2002年6月・	日本内科学会	2007年10月・現在 日本内科学会認定内科医、2018年12月・現在 日本内科学会総合内科専門医
2002年6月・	日本循環器学会	2009年4月・現在 日本循環器学会認定専門医
2021年6月・	ISHR日本部会 U45	leader

専任教員の教育・研究業績

所属 総合教育研究センター	職名 准教授	氏名 河内 正二
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2009年4月～現在 2012年4月～現在 2012年4月～2020年3月 2012年4月～現在 2014年4月～現在 2015年4月～現在 2016年4月～現在 2018年4月～現在 2019年4月～現在 2020年4月～現在 2020年4月～現在	4年次の「実務実習事前教育」を分担した。 4、5年次の「海外薬学研修」の講義を分担した。 6年次の「処方解析学・演習」を分担した。 6年次の「総合薬学講座」を分担した。 3年次の「調剤学」を分担した。 1年次の「早期体験学習（救命救急訓練）」を分担した。 4年次の「安全管理医療」を分担した。 4年次の「処方解析学」を分担した。 5年次の「在宅医療演習」を分担した。 2年次の「医療コミュニケーション演習」を分担した。 6年次の「感染制御学」を分担した。 臨床現場での経験を活かして最新の情報を提供することを心がけている。講義に使用する資料は、図表や写真画像および動画を多く取り入れ、学生が理解し、知識が定着するよう努めている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2016年4月～現在 2017年4月～現在に至る	神戸大学附属中学校と連携したがん教育プログラムの推進に参画した。 タスクフォースとして、薬剤師のためのワークショップに協力している。
研究活動		
1 . 著書・論文等		

氏名	種別	内容
Sato J, Horibe S, Kawauchi S, Sasaki N, Hirata K, Rikitake Y.	論文	J Neurochem. 2018; 147: 495-513. "Involvement of aquaporin-4 in laminin-enhanced process formation of mouse astrocytes in 2D culture: Roles of dystroglycan and -syntrophin in aquaporin-4 expression"
Horibe S, Kawauchi S, Tanahashi T, Sasaki N, Mizuno S, Rikitake Y.	論文	Biochem BiophysRes Commun. 2018; 507 (1-4) :426-432. "CD44v-dependent upregulation of xCT is involved in the acquisition of cisplatin resistance in human lung cancer A549 cells"
Kawauchi S, Horibe S, Sasaki N, Tanahashi T, Mizuno S, Hamaguchi T, Rikitake Y.	論文	Mar Drugs. 2019; 17 (2) :104. "Inhibitory effects of sodium alginate on hepatic steatosis in mice induced by a methionine- and choline-deficient diet"
Kawauchi S., Horibe S., Sasaki N., Hirata KI., Rikitake Y.	論文	Exp Cell Res. 2019; 374(2): 333-341. "A novel in vitro co-culture model to examine contact formation between astrocytic processes and cerebral vessels"
Amin HZ, Sasaki N, Yamashita T, Mizoguchi T, Hayashi T, Emoto T, Matsumoto T, Yoshida N, Tabata T, Horibe S, Kawauchi S, Rikitake Y, Hirata KI.	論文	Sci Rep. 2019; 9(1):8065. "CTLA-4 Protects against Angiotensin II-Induced Abdominal Aortic Aneurysm Formation in Mice"
2 . 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
インドメタシン誘発小腸粘膜障害モデルにおける小腸と肝臓でのCYPsおよびmdr1a の発現変動機序の検討	2017年3月	日本薬学会第137年会
アルギン酸ナトリウムのマウス非アルコール性脂肪肝炎モデルに対する抑制効果	2018年3月	日本薬学会第138年会
Inhibitory effects of sodium alginate on methionine and choline-deficient diet-induced hepatic steatosis in mice.	2018年6月	10th International Symposium on Cell/Tissue Injury and Cytoprotection /Organoprotection 2018

データマイニング手法によるNASHの原因医薬品の探索ならびに自己組織化マップの有用性	2019年3月	日本薬学会第139年会
肝性脳症患者へのリファキシミン長期投与による有効性と安全性の調査	2019年10月	第69回 日本薬学会関西支部総会・大会
3. その他		
演題名	発表年・月	学会名
心臓移植時の不整脈管理が免疫抑制剤の薬物動態に及ぼす影響	2017年8月	兵庫県薬剤師会・病院薬剤師会連携1周年記念大会 分科会4 大学と臨床現場とを繋ぐ研究 - 臨床現場の課題解決を目指して -
学会等および社会における主な活動		
2005年4月～現在	日本病院薬剤師会	
2005年4月～現在	日本医療薬学会	
2009年4月～現在	日本薬学会	
2010年4月～現在	日本薬剤師会	
2017年4月～現在	登録販売者試験委員(兵庫県2017-2018、関西広域連合2019-)	

専任教員の教育・研究業績

所属 生命分析化学研究室	職名 准教授	氏名 大山 浩之
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
分析化学実習	2010年4月～現在	分析化学実習では、講義で学んだ原理・原則などについて実習を通してより理解を深くし、安全かつ円滑に実験を遂行するための手法や技術の指導に努めている。
分析化学II	2018年4月～現在	各種滴定の原理およびこれらの応用例を講義している。医薬品の定量分析では国家試験でよく出題されるポイントを中心に解説している。
卒業研究I,II,III	2010年4月～現在	研究テーマの背景やその新規性に関して、平易な例を示しつつその重要性や国内外での位置づけ、今後の発展性や社会における有用性を理解させるよう努めている。短期的なゴールを設定し、モチベーション維持させることを心掛けている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Oyama H., Morita I., Kiguchi Y., Morishita T., Nishimori Y., Niwa T., Kobayashi N.	論文	Biol. Pharm. Bull. 2017, 40(12), 2191-2198. "A single-step breeding generated a diagnostic anti-cortisol antibody fragment with over 30-fold enhanced affinity"

Kiguchi Y., Oyama H., Morita I., Katayama E., Narasaki M., Yokoyama A., Kobayashi N.	論文	Biol. Pharm. Bull. 2018, 41(7), 1062-1070. "Antibodies and engineered antibody fragments against M13 filamentous phage to facilitate phage-display-based molecular breeding"
Oyama H., Kiguchi Y., Morita I., Yamamoto C., Higashi Y., Taguchi M., Tagawa T., Enami Y., Takamine Y., Hasegawa H., Takeuchi A., Kobayashi N.	論文	Sci. Rep. 2020, 10, 4807. "Seeking high-priority mutations enabling successful antibody-breeding: systematic analysis of a mutant that gained over 100-fold enhanced affinity"
Kiguchi Y., Oyama H., Morita I., Morikawa M., Nakano A., Fujihara W., Inoue Y., Sasaki M., Saijo Y., Kanemoto Y., Murayama K., Baba Y., Takeuchi A., Kobayashi N.	論文	Sci. Rep. 2020, 10, 14103. "Clonal array profiling of scFv-displaying phages for high-throughput discovery of affinity-matured antibody mutants"
Oyama H., Kiguchi Y., Morita I., Miyashita T., Ichimura A., Miyaoka H., Izumi A., Terasawa S., Osumi N., Tanaka H., Niwa T., Kobayashi N.	論文	Anal. Chem. Acta. 2021, 1161, 238180. "NanoLuc luciferase as a suitable fusion partner of recombinant antibody fragments for developing sensitive luminescent immunoassays"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
高親和力を保持した抗エストラジオールscFv最少変異体調製の試み	2017年9月	日本分析化学会66年会
V _H -CDR3内チロシン残基を変異標的とする抗 ⁹ テトラヒドロカンナビノールscFvの親和性成熟	2018年3月	日本薬学会第138年会
In vitro affinity maturation of anti-cortisol antibodies to develop sensitive immunoassays	2019年5月	23rd IFCC-EFLM European Congress of Clinical Chemistry and Laboratory Medicine
高感度な発光ELISAを目的とするscFv融合用レポーター酵素の比較検討	2020年10月	第70回日本薬学会関西支部総会・大会

CDR内チロシン置換の抗 ⁹ テトラヒドロカンナビノールscFv 抗原結合能への影響	2021年3月	日本薬学会第141年会
学会等および社会における主な活動		
2004年4月～現在	日本薬学会会員	
2006年6月～現在	日本分析化学会会員	
2010年4月～現在	日本臨床化学会会員	
2013年4月～現在	生物化学的測定研究会会員	
2017年6月～現在	日本法中毒学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	中央分析室	職名	准教授	氏名	都出 千里
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		1996～2010	有機化学系III実習（旧 機器分析学実習および有機化学系II実習） 学生実習の円滑な進行を促すための準備をおこない、実習講義をおこない実習室で学生の指導に当たる。また、実習内容についての討議を学生と行い理解を深めさせた。		
		2003, 2005, 2006	情報リテラシー 講義の円滑な進行のためのサポートを行った。		
		2010～	構造解析学I（分担）担当分野をわかりやすくするためにパワーポイント、補充プリントを用いて講義を行っている。		
		2017～	有機化学演習（B4クラス）担当分野の説明をわかりやすくするために補助プリントを用いて講義を行っている。		
		2018～	情報リテラシー（分担）では担当範囲をわかりやすくするためパワーポイントを用いた講義を行っている。また、補講時間を設け、授業だけでは課題が終わらない学生に指導している。		
		2018～	構造解析学II（分担）で担当分野の説明をわかりやすくするためにパワーポイントや補助プリントを作成したり、実際のスペクトルの測定なども行っている。		
		2019～	有機化学演習で理解を深めるために、2回に1回の割合で学生に問題を2～3問、紙に解答させ、それを添削することで、個人個人に反応式の書き方などを指導した。		
		1996～	毎年数名のゼミ生の実験指導を行い、学年末にはプレゼンテーションのためのまとめ方、発表の方法などの指導を行った。		
2 作成した教科書、教材、参考書		2010～2012	分析化学III(分担)NMRやESRの原理を理解しやすくするための補充教材を作成し、簡潔にまとめている。		
		2013～	構造解析学I(分担)NMRやESRの原理を理解しやすくするための補充教材を作成し、簡潔にまとめている。		
		2010～	現在の薬学総合講座では最低限必要なことをまとめたプリントを用意するとともに毎年、国家試験の問題を追加して解説するための資料を作成している。		

	2018 ~	構造解析学 I I (分担) NMRでの構造解析を理解しやすくするための補充教材を作成し、簡潔にまとめている。演習するスペクトル課題を選定し、プリントにしている。
	2021 ~	構造解析学 I で使用している薬学機器分析学のNMRの部分について改定し、執筆した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Teraoka R. Fukami T. Furuishi T. Nagase H. Ueda H. Tode C. Yutani R. Kitagawa S. Sakane T.	論文	Chem. Pharm. Bull. (2019), 67(9), 940-944. "Improving the solid-state photostability of furosemide by its cocrystal formation"
Yutani R. Haku R. Teraoka R. Tode C. Koide T. Kitagawa S. Sakane T. Fukami T.	論文	Crystals (2019), 9(11), 553. "Comparative evaluation of the photostability of carbamazepine polymorphs and cocrystals"
Yoshimura H. Hirota Y. Soda S. Okazeri M. Takagi Y. Takeuchi A. Tode C. Kamao M. Osakabe N. Suhara Y.	論文	Bioorganic & Medicinal Chemistry Letters (2020), 30(8), 127059. "Study on structure-activity relationship of vitamin K derivatives: Conversion of the naphthoquinone part into another aromatic ring and evaluation of their neuronal differentiation-inducing activity"
Tode C. Maoka T. Takeuchi A.	論文	Carotenoid Science (2020), 24, 24-34. "Application of DOSY Experiment to Analysis of Astaxanthin and its Analogues"
Morita I., Kiguchi Y., Oyama H., Takeuchi A., Tode C., Tanaka R., Ogata J., Kikura-Hanajiri R., Kobayashi N.	論文	Anal. Methods, (2021), 13, 3954-3962. "Derivatization-assisted enzyme-linked immunosorbent assay for identifying hallucinogenic mushrooms with enhanced sensitivity"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名

都出

固体NMRでみるロキソプロフェン製剤の経時変化	2017.3	日本薬学会 第137年会
ζ-caroteneの合成研究 - その1 -	2019.9	第33回カロテノイド研究談話会
固体NMRを用いたロキソプロフェンナトリウムの構造解析	2020.3	日本薬学会 第140年会
ζ-caroteneの幾何異性体の合成研究	2021.3	日本薬学会 第141年会
NMRによるシクロデキストリン包接挙動の解明及び苦みマスク効果との関連	2021.9	第37回シクロデキストリンシンポジウム
学会等および社会における主な活動		
1993年12月～	日本薬学会会員	
1995年～	日本カロテノイド学会会員	
2006年～	日本核磁気共鳴学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	薬品化学研究室	職名	准教授	氏名	武田 紀彦
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2015年10月～現在	3年次の「医薬品化学実習」を担当している。医薬品合成を実施し、基本的な化学反応を理解してもらうように努めている。未知検体においては様々な定性試験から得られた官能基の情報をもとに、未知検体の正しい構造へ導ける論理的思考を養うように心がけている。			
	2015年4月～2022年3月	1年次の「薬学入門（分担）」の有機化学の部分を担当している。「これから習う有機化学」を意識しながら、NSAIDsを題材に講義をしている。またスモールグループディスカッションを行うことで、薬は有機化合物であり、有機化学、物理化学、薬理学、薬剤学など様々な学問と関連していることを理解してもらうように意識している。			
	2017年9月～現在	3年次の「医薬品化学（分担）」の「代謝系に作用する医薬品、抗がん剤、感染症治療薬」を担当している。薬剤名による単なる記憶ではなく、医薬品の構造式をみれば、どのような薬理作用を持ち、その投与方法、溶解度や酸性・塩基性などの物理的性質がイメージできる学問であることを意識してもらうように心がけている。			
	2017年9月～現在	3年次の「有機化学演習 B6」を担当している。これまで習った講義内容の総まとめであるが、すべての内容がつながり、より深く理解してもらう目的で、学生には適宜反応機構や解答などを板書してもらう。学生がわからない箇所、大事なポイントは特に丁寧に説明し、少しでも理解が深まるように意識しながら講義をしている。			
	2018年8月～現在	4年次の「合成化学II(分担)」を担当している。これまで習得した化学反応を活用し、与えられた分子の合理的な合成経路を提案してもらう。始めにチュートリアルで逆合成解析を説明し、各自練習問題を解いてもらう。次に複雑な分子を設定し、スモールグループディスカッションを通して様々な合成経路を議論・考慮し、最終的に合成経路を各グループ発表してもらう。各グループには質疑応答も対応できる十分な対策を練るよう指導している。			

	2020年4月～現在	6年次の「がん薬物療法論(分担)」の「低分子の細胞障害性抗がん薬」を担当している。有機化学の観点から抗がん薬の構造式の重要性、官能基が果たす役割、その作用機序を含めて説明している。特に抗がん薬にはヘテロ環が多く含まれているため、ヘテロ環の分類、化学的性質、反応性だけでなく生体内DNA関連のヘテロ環の説明から始まり、古典的なDNAのアルキル化による抗がん薬からチロシンキナーゼ阻害薬である分子標的薬まで幅広く、理解してもらえるように意識している。
	2021年4月～現在	2年次の「医薬品構造学(分担)」を担当している。パーキンソン病を題材に有機化学、薬理学、臨床薬学の視点から分野横断型講義を展開しています。履修している薬学系科目が全て繋がっていることを意識しながら説明している。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Takeda N., Futaki E., Kobori Y., Ueda M., Miyata O.	論文	Angew. Chem. Int. Ed. 2017, 56, 16342-16346. " Nucleophilic Arylation of <i>N,O</i> -Ketene Acetals with Triaryl Aluminum Reagents: Access to <i>o</i> -Aryl Amides through an Umpolung Process " https://doi.org/10.1002/anie.201708665
Matsuzaki H., Takeda N., Yasui M., Ito Y., Konishi K., Ueda M.	論文	Org. Lett., 2020, 22(23), 9249-9252. "Synthesis of Pyrazoles Utilizing the Ambiphilic Reactivity of Hydrazones" doi: 10.1021/acs.orglett.0c03465.

Takeda N., Kobori Y., Okamura K., Yasui M., Ueda M.	論文	Org. Lett., 2020, 22(24), 9740-9744. "Sequential Nucleophilic Arylation/Ring-Contractive Rearrangement of <i>N</i> -Alkoxy lactams" doi: 10.1021/acs.orglett.0c03821.
Takeda N., Kobori Y., Yasui M., Matsumoto Y., Orihara K., Kido Y., Ueda M.	論文	Tetrahedron. Lett., 2021, 73, 153098. "Sequential nucleophilic addition/1,2-rearrangement of <i>N</i> -iminolactam: A ring [^] contractive strategy for the synthesis of 2-acyl pyrrolidines" https://doi.org/10.1016/j.tetlet.2021.153098 .
Matsuzaki H., Takeda N., Yasui M., Okazaki M., Suzuki S., Ueda M.	論文	Chem. Commun., 2021, 57, 12187-12190. "Synthesis of multi-substituted 1,2,4-triazoles utilizing the ambiphilic reactivity of hydrazones" https://doi.org/10.1039/D1CC05326D .
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
アミドの極性転換反応： 位および 位への求核剤導入法の開発	2019年5月	第17回次世代を担う有機化学シンポジウム
連続ヘテロ原子を有するラクタムを利用したアルキン導入を伴う連続反応の開発	2019年10月	第45回反応と合成の進歩シンポジウム
ラクタムへの求核付加 - 脱水反応：四置換エナミンの合成	2021年8月	第41回有機合成若手セミナー「明日の有機合成を担う人のために」
オキシムエーテルの 位での極性転換を利用した <i>N</i> -アルコキシインドールの合成	2021年10月	第71回日本薬学会関西支部総会・大会
ヒドラゾンの求核性および求電子性を利用したピラゾールおよびトリアゾール合成	2021年10月	第50回複素環化学討論会
3. その他 (講演など)		

演題名	発表年・月	学会名
連続ヘテロ原子が関与するアミドの化学	2018年8月	第38回有機合成若手セミナー 「明日の有機合成を担う人のために」(依頼講演)
N - アルコキシアミドを用いた新分子変換法	2019年7月	第5回関西薬学シンポジウム：化学系の若い力 (依頼講演)
アミド・エナミドが創り出す新たな有機合成反応の 開発～連続ヘテロ原子を組み込むと何が出来る？～	2020年1月	ヘテロ原子部会第3回懇話会(依頼講演)
学会等および社会における主な活動		
2003年～現在に至る	日本薬学会会員	
2010年～現在に至る	有機合成化学協会会員	
2015年～現在に至る	近畿化学協会会員	
2019年～現在に至る	近畿化学協会ヘテロ原子部会幹事	

専任教員の教育・研究業績

所属	病態生化学研究室	職名	講師	氏名	多河 典子
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2006年10月～2016年9月 2009年10月～ 2013年10月～ 2017年4月～ 2009年4月～9月 1987年4月～ 2005年9月～ 2008年～ 1987年4月～ 1987年4月～1990年3月	学部3年生 臨床検査学 講義 学部1年生 生化学 講義 学部3年生 内分泌学 講義（2コマ） 学部3年生 臨床生化学 講義（科目名変更 旧 臨床検査学） 学部1年生 早期体験学習指導 学部4～6年生に卒業研究I・II指導 学部6（旧4）年生 総合薬学講座講義（2（1）コマ） 病態解析治療学特論（病態生化学特論） 1～2コマ 学部3（4）年次生 臨床検査（臨床化学）実習指導 学部4年生 臨床検査総論実習指導		
2 作成した教科書、教材、参考書		2006年10月～ 2009年10月～	臨床生化学（臨床検査学） 講義プリント 生化学 講義用プリント		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項		2009年～2011年 2010/11/10 2011/11/11 2014/6/21	推薦入学者の宿題作成、質問会で解説を行った。 出張講義 県立明石南高校、県立姫路南高校、県立小野高校		
研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別		内容	
Masumoto K, Tagawa N, Kobayashi Y, Kusuda S.		論文		Pediatr Neonatol. 2019;60(5):504-511. "Cortisol production in preterm infants with or without late-onset adrenal insufficiency of prematurity: A prospective observational study."	
Mitsumoto Y, Sato R, Tagawa N, Kato I.		論文		J Nutr Sci Vitaminol (Tokyo). 2019;65(2):202-204. "Rubiscolin-6, a -Opioid Peptide from Spinach RuBisCO, Exerts Antidepressant-Like Effect in Restraint-Stressed Mice."	

Kimura M, Kosuge K, Ko Y, Kurosaki N, Tagawa N, Kato I, Uchida Y.	論文	Chem Pharm Bull (Tokyo). 2020 Aug 1;68(8):810-813."Potent Antibacterial Activity of Synthetic Peptides Designed from Salusin- and HIV-1 Tat(49-57). "
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
マウス脂肪組織におけるnesfatin-1の発現・分泌促進について 多河 典子1)、浅川 明弘2)、藤波 綾1)、乾 明夫2)、加藤 郁夫1) 1) 神戸薬科大学 病態生化学研究室 2) 鹿児島大学 大学院医歯学総合研究科心身内科学分野	2018/4/26	第91回日本内分泌学会学術総会
肥満モデルマウスの視床下部及び脂肪組織での新規エネルギー代謝関連ペプチドの発現について 多河 典子1)、浅川 明弘2)、藤波 綾1)、乾 明夫2)、加藤 郁夫1) 1) 神戸薬大 2) 鹿児島大院医歯	2018/8/24	第58回日本臨床化学学会年次学術集会
消化管ホルモンxeninのELISA法の開発 多河 典子1)、中張 隆司2)、浅野 真司3)、桑原 厚和3)、丸中 良典3)、加藤 郁夫1) 1) 神戸薬大2) 立命館大薬 3) 立命館大総合科学技術研	2019/3/23	日本薬学会第139年会
マウス視床下部及び脂肪組織でのNUCB2 mRNA発現について 多河 典子1)、浅川 明弘2)、藤波 綾1)、乾 明夫2)、加藤 郁夫1) 1) 神戸薬科大学 病態生化学研究室 2) 鹿児島大学 大学院医歯学総合研究科心身内科学分野	2019/5/10	第92回日本内分泌学会学術総会
腸管ペプチドxeninのELISA法の確立とマウス小腸組織での定量 多河 典子1)、浅野 真司2)、中張 隆司3)、桑原 厚和3)、丸中 良典3)、加藤 郁夫1) 1) 神戸薬科大学病態生化学研究室2) 立命館大学薬学部分子生理学教室3) 立命館大学総合科学技術研究機構	2020/10/30 ~ 11/1	第60回日本臨床化学学会年次学術集会
学会等および社会における主な活動		
1986年7月 ~	日本薬学会会員	
2006年4月 ~	日本内分泌学会代議員	
2014年6月 ~	日本臨床化学学会評議員	

専任教員の教育・研究業績

所属	地域連携サテライトセンター	職名	講師	氏名	上田 久美子
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概	要	
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
(1) 学部学生への講義・実習					
がん薬物治療論（6年次前期、選択、兼任）		2020年4月-現在に至る	主な抗がん薬について、その体内動態や、臨床現場で薬物を投与する際に知っておくと役立つ薬剤学、製剤学の内容を盛り込んだ講義動画を作成している。		
薬物動態学（3年次後期）		2006年4月-2021年3月	薬物速度論について、プリント冊子を作成して講義した。式の導出については、途中の計算にもつまづかないよう、数学にて学習した内容などもプリント冊子に含めた。板書内容を効率よくプリント冊子に記入できるよう、プリント冊子の作成を工夫した。国家試験問題もプリント冊子に掲載することで、学生の勉強へのモチベーションを上げる努力をした。一方で、計算問題に苦手意識を持つ学生に対しては、複雑な計算問題を一問一答式に分解してプリント冊子に掲載することで、学習意欲をそがないようにした。さらに、毎時間講義の疑問点や感想を記載、提出させ、それらに紙面にて回答することで、学生の疑問に答えるとともに、学生との対話を試み、次年度以降のプリント冊子にその内容を反映させた。また、チーム基盤型演習を一部に取り入れることで、学生の勉強へのモチベーションをさらに上げる努力をした。グループ学習を全面的に取り入れたこともあったが、一部の学生は積極的に参加したものの、消極的な学生もみられた。翌年度からは通常講義に戻して実施した。		
薬学入門（1年次前期、兼任）		2012年4月-2021年3月	主にアスピリンの体内動態について、1年次生にもわかるようにパワーポイントでアニメーションを多様してスライドを作成して講義した。2020年度には、講義動画を作成するとともに、学生からの質問に回答する動画も作成した。		
臨床薬剤学（6年次前期、選択、兼任）		2020年4月-2020年9月	主に薬物速度論の計算問題の解説を中心とした講義動画を作成した。出来るだけ計算の過程がわかるよう丁寧に解説した。		
テーラーメイド医療（6年次前期、選択、兼任）		2017年4月-2019年9月	抗がん薬のうちテーラーメイド医療が行われている薬物について、プリントを作成して講義した。		

<p>臨床薬剤学（4年次前期、兼任）</p>	<p>2005年4月-2008年9月</p>	<p>主に薬物相互作用、TDMを担当した。薬物相互作用は、その機序や薬物名を簡単に整理できるよう、表形式にまとめて提示した。TDMについては、基礎となる考え方などがわかるよう、種々の文献から資料を集めて整理、提示した。午前2コマ連続（休憩を挟んで180分）の集中講義であり、遅刻する学生が多かったため、講義開始時に小テストを行い、前回の講義の振り返りをするともに、学生がある程度そろってからその日の講義を開始するように心がけた。2008年度に、ベストティーチャー賞を受賞した。</p>
<p>総合薬学講座（6年次、兼任）</p>	<p>2006年4月-2022年3月</p>	<p>主に薬物速度論を担当した。学生が苦手とする計算問題について、基礎的な問題を確実に得点できるよう指導することに力点を置いた。最終年度には、複合問題も担当した。</p>
<p>薬剤学・製剤学実習（3年次後期）</p>	<p>1998年6月-2021年3月</p>	<p>TDM、薬物動態を主に担当した。TDMでは、臨床現場での重要性を想像できるように、また基礎となる薬物速度論の概念が少しでも理解できるよう工夫した。薬物動態では、薬物速度論の基礎を実際にも実験して確かめることができるよう、また膨大な計算を時間内に効率良くできるよう、実習書を工夫した。</p>
<p>アクティブラボ（1-3年次、兼任）</p>	<p>2020年4月-2021年3月</p>	<p>がん研究の一部をアクティブラボ配属学生と一緒に実験し、まとめる手助けをした。予備知識がない学生にも理解できるように工夫した。</p>
<p>（2）研究室配属学生への研究指導</p>	<p>1998年6月-2021年6月</p>	<p>薬剤学研究室在籍時に、研究室配属学生のうち数名の卒業研究指導を行った。がんや薬物動態学に関する研究を通して、実験の目的や実験結果の考え方を理解させるように努力した。また、わかりやすいプレゼンテーションや卒業論文の作成を目指すよう指導することを心がけた。</p>
<p>（3）大学院での講義</p>	<p>2010年4月-2020年3月</p>	<p>薬剤学特論を2010年度、2012年度、2014年度、2016年度、2018年度、2019年度に1コマずつ担当した。受講生に合わせて、臨床的な内容、自身の研究内容、薬物動態の基礎などと内容を変えて実施した。</p>
<p>2 作成した教科書、教材、参考書</p>		
<p>3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</p> <p>FD研修会にて報告</p> <p>FD・SD研修会にて報告</p>	<p>2020年10月</p> <p>2006年12月</p>	<p>薬学総合教育・研究センター 統括部門、支援部門、教務課 "前期遠隔授業に対する学生アンケートの集計結果について"</p> <p>他大学で実施された共用試験OSCEトライアルの参加報告を行った。</p>
<p>4 その他教育活動上特記すべき事項</p> <p>（1）ベストティーチャー賞</p> <p>（2）神戸薬科大学学長裁量経費取得状況</p>	<p>2009年3月</p>	<p>2008年度 4年次前期 臨床薬剤学</p>

2021年度 神戸薬科大学学長裁量経費に基づく教育改革プログラムに採択	2021年4月	"低学力学生に対する「理解」を中心に据えた新たな演習プログラムの構築"
平成30年度（2018年度）神戸薬科大学学長裁量経費に基づく教育改革プログラムに採択（継続）	2018年4月	"チーム基盤型学習（TBL）を用いた分野横断統合演習の構築とピア評価システムの有用性の検討"
平成29年度（2017年度）神戸薬科大学学長裁量経費に基づく教育改革プログラムに採択（継続）	2017年4月	"チーム基盤型学習（TBL）の構築とピア評価システムの有用性の検討"
平成28年度（2016年度）神戸薬科大学学長裁量経費に基づく教育改革プログラムに採択	2016年4月	"チーム基盤型学習（TBL）を用いた分野横断統合演習の構築"
(3) 学内委員会活動		
実務実習運営委員	2006年4月～2018年3月	実務実習を受講する4年次生の実習施設振り分け作業を、他大学との交渉、実習施設や病院薬剤師会、薬剤師会との交渉を含め、学内の中心となって行った。また、3年次生対象の実務実習施設振り分け説明会にて、学生に対する説明を担当した。さらに、6年制長期実務実習開始時には、近畿6府県の各地区で開催された連絡会のほぼすべてに大学代表として出席し、実務実習指導薬剤師に対して本学での教育状況等を説明した。
実務実習問題対策委員	2006年4月～2018年3月	実務実習で発生した問題に対し、委員長や他の委員と協力して対応した。
OSCE実施委員会委員	2006年4月～2018年3月	共用試験OSCE開始前には他大学で実施されたトライアルを複数回見学し、また実際に評価者、責任者としても参加した。その経験をもとに、本学でのOSCEトライアルを複数回企画運営し、現在の本学のOSCEの原型を作った。
研究室・施設紹介冊子編集委員	2005年4月～2007年3月	現在の大学案内のもととなる「研究室・施設紹介冊子」を、他の委員と協力して新たに作成した。
(4) ワークショップへの参加		
全国薬学教育者ワークショップ	2006年8月	第19回全国薬学教育者ワークショップ近畿（大阪工業大学）
(5) 高校への出前講義、高大連携		
高大連携事業（薬学の講義）	2015年8月	大阪女学院高校
薬学の講義	2014年7月	姫路市立高校
薬学の講義	2007年3月	和歌山県立桐蔭高校
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

Ueda K, Nakamura T, Tanaka S, Hosokawa M, Iwakawa S, Ogawara KI.	論文	Drug Metab. Pharmacokinetics. 2020: 35: 124-130. "Numerical analysis of apparent decitabine uptake in HCT116 cells: Incorporation of a bidirectional first-order kinetic parameter for ENT1 transport and Michaelis-Menten parameters for subsequent phosphorylation.."
上田久美子、寺岡麗子、竹内敦子、安岡由美、内田吉昭、八巻耕也、土生康司、宮田興子、中山尋量、北河修治 .	資料	Libra, 2018: 18: 1-12. "薬学教育早期体験学習におけるピア評価の試み"
上田久美子、寺岡麗子、八巻耕也、土生康司、宮田興子、力武良行、中山尋量、北河修治 .	報告	Libra, 2018: 18: 29-44. "チーム基盤型学習を用いた分野横断統合演習の構築の試み その3 "
上田久美子、寺岡麗子、八巻耕也、土生康司、宮田興子、北河修治	実践報告	薬学教育、2017、doi: 10.24489/jjphe.2017-012. "チーム基盤型学習を用いた分野横断統合演習の構築の試み "
Ueda K, Masuda A, Fukuda M, Tanaka S, Hosokawa M, Iwakawa S	論文	Drug Metab. Pharmacokinet. 2017: 32: 301-310. "Monophosphorylation by deoxycytidine kinase affects apparent cellular uptake of decitabine in HCT116 colon cancer cells."
2 . 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
ヒト大腸がんHCT116細胞におけるデシタピンの取り込みの速度論解析 膜透過クリアランスと代謝クリアランスを含むコンパートメントモデル	2019年10月	第69回日本薬学会関西支部総会・大会
チーム基盤型学習を用いた分野横断統合演習の構築	2018年9月	第3回日本薬学教育学会
Kinetic analysis of decitabine uptake in HCT116 colon cancer cells	2018年1月	2018 International Meeting on 22nd Microsome and Drug Oxidations and 33rd Japanese Society for the Study of Xenobiotics
Monophosphorylation by deoxycytidine kinase affects apparent cellular uptake of decitabine in HCT116 colon cancer cells	2017年12月	日本薬物動態学会第32回年会
チーム基盤型学習を用いた分野横断統合演習の構築の試み	2017年9月	第2回日本薬学教育学会
学会等および社会における主な活動		
1992年 3月～現在に至る	日本薬学会 会員	

上田 久美子

1996年 9月～現在に至る	日本薬物動態学会 会員
1998年 6月～現在に至る	日本病院薬剤師会 会員
1997年 7月～現在に至る	日本医療薬学会 会員
1997年 7月～現在に至る	日本薬剤学会 会員
2002年 4月～2022年 1月	日本DDS学会 会員
2004年 1月～現在に至る	日本医療薬学会 医療薬学専門薬剤師
2004年 1月～現在に至る	日本医療薬学会 医療薬学指導薬剤師
2006年 4月～2017年 3月	薬学教育協議会 病院・薬局実務実習近畿地区調整機構 委員
2009年 4月～2011年 3月	日本薬学会 ファルマシア トピックス専門小委員
2016年 6月～現在に至る	日本薬学教育学会 会員
2019年12月～現在に至る	神戸市応急手当普及員（救急インストラクター）

専任教員の教育・研究業績

所属 生化学研究室	職名 講師	氏名 三上 雅久
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） (1) 学部学生への教育	2007年4月～現在に至る	学部1年次生に対して「生化学II」（2014年度新入生までは、学部2年次前期に開講）の講義を、また学部2年次に対して「生化学III」の講義を行っている。「生化学II」では、タンパク質・酵素について、できるだけ日常の話題や疾患との関連性を織り交ぜながら解説している。「生化学III」では、エネルギー代謝と恒常性の維持について、補助プリント等を用意して、体系的に理解してもらえよう努めている。また、学生からの質問に対して個別対応にとどまらず、後の講義やオフィスアワーなどで学生全体にフィードバックしている。 CBTや国家試験への対策として、関連する過去問の解説を実施し、その一部を定期試験に出題することで、学生の理解度の把握に努めている。学生評価アンケート（2年に一度）では、平均以上の評価を得ている。
	2008年9月～2011年3月	学部3年次生（約70名の少人数クラス）に対して、「薬学英語入門II」の講義を行った。既存の薬学英語のテキストや学術論文から抜粋した資料を用い、英文内容の背景ならびに概要の理解に重点をおいた。講義毎に、前回の講義で取り扱った頻出専門用語や注意すべき発音などについて確認テストを実施した。担当期間中に実施された2回の学生評価アンケートにおいて、いずれもベストティーチャー賞を受賞した。
	2000年4月～現在に至る	学部3年次生に対して、生物学系II実習（2014年度より生物学系I実習に、2017年度より生化学実習に名称変更）の実施を担当している。限られた時間の中で、当該分野の必須項目を満たし、自ら考えながら実習を行えるような実習プログラムを組み立てている。実習項目についても、最新の医療や遺伝子操作技術の進展と同調したものにするために、随時改訂している。実習時間の最後に、少人数のグループごとに質疑応答を行い、実習内容と講義や国家試験との関連性を意識させる指導を心がけている。
		学部学生の卒業研究に対する指導を行っている。与えられたテーマに対して、自ら積極的に取り組む姿勢を身につけさせることに重点を置いている。定期的開催される研究室のセミナーでの文献紹介や研究報告などを通じて、携わっている研究分野に対する深い理解と、プレゼンテーション能力や問題解決力の向上を目標に指導している。

<p>(2) 大学院生への研究指導</p>	<p>2000年4月～現在に至る</p>	<p>生化学講座所属の大学院生に対する研究指導ならびに大学院特論(生化学特論、2012年度以降、生命科学特論に改称)の講義を担当している。大学院特論では、糖鎖の生理機能の重要性と正常な機能に異常を来たした代謝異常症について発生的視点から講義をしている。大学院生に対しては、研究テーマを理解し、主体的に実験計画と組み立てながら課題解決に取り組めるようになることを目標に指導をしている。また、修了までの間に少なくとも1回の学会発表ができるよう、日々の研究指導にあっている。</p>
<p>2 作成した教科書、教材、参考書 教科書</p>	<p>2015年3月31日発行</p>	<p>第5章 糖質 スタンダード薬学シリーズII 4 生物系薬学I. 生命現象の基礎(東京化学同人, 2015) 28-34.</p>
	<p>2020年9月4日発行</p>	<p>第2章 タンパク質の基本、第3章 タンパク質の機能、第4章 タンパク質代謝、第5章 タンパク質解析技術、第16章 組織・器官の構築 「ニューダイレクション薬学生化学」(京都廣川書店)</p>
<p>3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 該当なし。</p>		
<p>4 その他教育活動上特記すべき事項 ベストティーチャー賞受賞</p>	<p>2008年度、2010年度</p>	<p>薬学英語入門II(2008年度および2010年度)</p>
<p>研究活動</p>		
<p>1. 著書・論文等</p>		
<p>氏名</p>	<p>種別</p>	<p>内容</p>
<p>Mikami, T., Kitagawa, H., and Iwasaki, N.</p>	<p>著書</p>	<p>In Glycoscience: Basic Science to Applications Insights from the Japan Consortium for Glycobiology and Glycotechnology(JCGG) Springer Chapter13, 2020, pp221-226. "Glycans in Osseous Tissue and Articulation"</p>

Mikami T., Kitagawa H.	著書	In Comprehensive Glycoscience, 2nd edition (ed. Joe Barchi) 2020, pp. 29-62, Elsevier. "Biosynthesis and Degradation of Glycans of the Extracellular Matrix: Sulfated Glycosaminoglycans, Hyaluronan, and Matriglycan"
Shida M., Mikami T., Tamura J., Kitagawa H.	論文	Biochem. Biophys. Res. Commun. 2017, 487(3), 678-683. "A characteristic chondroitin sulfate trisaccharide unit with a sulfated fucose branch exhibits neurite outgrowth-promoting activity: Novel biological roles of fucosylated chondroitin sulfates isolated from the sea cucumber <i>Apostichopus japonicus</i> "
Shida M., Mikami T., Tamura J., Kitagawa H.	論文	Biochim. Biophys. Acta Gen. Subj. 2019, 1863(9), 1319-1331. "Chondroitin sulfate-D promotes neurite outgrowth by acting as an extracellular ligand for neuronal integrin $\alpha 3$ "
Mikami T., Kitagawa H.	総説	Glycoconj. J. 2017, 34(6), 725-735. "Sulfated glycosaminoglycans: their distinct roles in stem cell biology"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
コンドロイチン硫酸鎖による破骨細胞分化の制御メカニズムの解析	2017年・7月	第36回日本糖質学会年会（旭川）
高硫酸化コンドロイチン硫酸Dによる神経突起伸長促進機構の解析	2018年・8月	第37回日本糖質学会年会（仙台）
Chondroitin sulfate-D promotes neurite outgrowth by acting as an extracellular ligand for neuronal integrin $\alpha 3$.	2019年・9-10月	11th International Conference on Proteoglycans (Kanazawa)
コンドロイチン硫酸の骨格筋可塑性における役割と加齢性変化	2020年・9月	第93回日本生化学会大会（横浜）

コンドロイチン硫酸の骨格筋維持機構における役割と加齢性構造変化	2021年・12月	第44回日本分子生物学会年会(横浜)
学会等および社会における主な活動		
1997年2月～現在に至る	日本薬学会会員	
1996年4月～現在に至る	日本生化学会会員	
2000年4月～現在に至る	日本糖質学会会員	
1998年4月～現在に至る	日本分子生物学会会員	

西村

専任教員の教育・研究業績

所属 総合教育研究センター	職名 講師	氏名 西村 克己
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2006年4月から	教科書と演習問題を連動させて解説し、理解に役立てるよう努めている。
2 作成した教科書、教材、参考書	2006年4月から	講義内容のレジユメを作成し、適宜配付している。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Nishimura K., Horii S., Tanahashi T.	論文	Heterocycles 2018, 97 (2), 865-876. "Asymmetric Synthesis of O-Methylneferine"

児玉典子、内田吉昭、川西和子、安岡由美、西村克己、小山淳子、佐子綾香、和田昭盛	研究ノート	神戸薬科大学研究論集Libra. 2020, 20, 1-8.
児玉典子、竹仲由希子、西村克己、山崎渚、宮田興子	研究ノート	神戸薬科大学研究論集Libra, 2021, 21, 9-17.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
アボルフィンアルカロイドの鎮痛作用と構造活性相関	2017・3	日本薬学会第137年会
クリッカーを活用した研修会参加前後における気分と意欲の変化及び関連性	2019・9	第3回日本薬学教育学会大会
“Stay home” 期間、学生の効果的な自学学習とリメディアル教育におけるメタ認知的学習支援の試み	2020・9	第5回日本薬学教育学会
新入生の学年移行時における学習の動機づけ・学習観の変化	2021・3	日本薬学会第141年会
Zoomを活用したオンライン型研修会の試み・今後の課題について	2021・8	第6回日本薬学教育学会大会
学会等および社会における主な活動		

専任教員の教育・研究業績

所属 総合教育研究センター	職名 講師	氏名 猪野 彩
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2010年4月～現在 2010年4月～現在 2011年4月～現在 2012年4月～2020年3月 2014年4月～現在 2017年4月～現在 2018年4月～現在	4年次の実務実習事前教育を分担した。 1年次生の初期体験臨床実習を分担した。 4年次の薬事関係法規・薬事制度を分担した。 6年次の処方解析学・演習を分担した。 3年次の調剤学 の講義を分担した。 2年次の医療コミュニケーション演習を分担した。 4年次の処方解析 を分担した。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

波多江 崇, 田中智啓, 猪野 彩, 田内義彦, 竹下治範, 辰見明俊, 瀧口常男	論文	日本人を対象とした食後血糖上昇に対する難消化性デキストリンの効果：二重盲検プラセボ対照ランダム化比較試験のメタアナリシス, 医薬品情報学,18(4)67-72, 2017
竹下治範, 北 早織, 若林知子, 藪田有沙, 猪野 彩, 原田祐 希, 中川素子, 中川道昭, 波多江 崇, 瀧口常男	論文	PTP包装からの錠剤の押し出し力に及ぼす製剤間の影響, 医薬品情報学,20(2) 98-103 , 2018
2.学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
NDBオープンデータを用いた乳幼児における抗ヒスタミン薬の 処方実態調査	2018年3月	日本薬学会第138年会
育児中の母親が薬の疑問について薬剤師に相談しない理由に ついての検討	2019年3月	日本社会薬学会第38年会
「副作用」の説明に着目した服薬指導時の薬剤師の対応につ いての検討	2019年3月	日本社会薬学会第38年会
学会等および社会における主な活動		
2002年～現在に至る	日本病院薬剤師会 会員	
2016年～現在に至る	日本薬学会 会員	
2021年～現在に至る	病院・薬局実務実習近畿地区調整機構委員	

専任教員の教育・研究業績

所属 薬用植物園	職名 講師	氏名 西山 由美
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	1986年～2008年6月	2年次生の生薬化学実習（2017年からは細胞生物学実習）を担当している。実習開始時の講義ではパワーポイントを使って、実験の目的や実験内容について説明し、実験終了時には、結果について考察するなどのディスカッションを行い理解を深めるようにしている。また、実験中は各実習机を見回り、手技が正しく安全に行われているかチェックし、正しい器具の取り扱いなどを習得してもらうようにしている。
	2010年8月～現在に至る	
	2011年4月～現在に至る	2年次生（2012年からは1年生）の生薬学を担当している。生薬に関する基本的なことから始め、薬としての生薬について理解を深めてもらえるようにしている。国家試験やC B T試験に必要な知識を習得しながら、生薬に興味を持てるように標本を用意して講義を行っている。また、希望者には屠蘇散を作ってもらい、生薬を身近な薬として考えてもらうようにした。
	2014年9月～2017年3月	2年次生の後期（2016年度は前期）の生薬化学の後半部分を担当していた。生薬由来の医薬品の内、特にアルカロイド化合物を中心に講義を行った。重要な医薬品が多いので、国家試験やC B T試験に必要な知識を中心に、興味を持ちやすい内容から始め、化合物の構造式やその特徴・作用を暗記ではなく、化学的に見れるような力をつけていけるように心掛けた。
	2017年9月～源氏に至る	3年生（後期）の薬用資源学を担当している。選択科目であり、生薬や天然物に関心のある学生のアドバンス教育として、深く掘り下げた内容で講義を行っている。2020年からは動画での講義であるが、オンデマンドの良さを生かしながら、学生がより興味を持ち学習しようと思えるように考えて動画を作成することを心がけている。
	2014年4月～現在に至る	4年次生（前期）の漢方医学（2014, 2015年度は4コマ、2016年度からは7コマ、2020年度からは11コマ）を担当している。これまで学んできた西洋医学とは概念が異なるので、その部分を意識して説明している。近年は、漢方薬も多く処方されるようになったことや、利用を希望する人も増えてきているので、漢方に関する基本的な知識や汎用される漢方薬を中心に講義し、またCBT試験や国家試験の問題に対応できるように工夫している。

	2017年9月～現在に至る	3年次生（後期）の薬学英語入門 を担当している。英語で書かれた専門的な文章をただ訳すだけでなく、図や資料使いながら内容を深く理解することを目標としている。
2 作成した教科書、教材、参考書	2013年8月～現在に至る	生薬学の講義で用いる冊子を毎年作成している。書き込み式なので、生薬について自分でまとめながら、勉強出来るようにしている。余白を使って、教科書に載っていないことなどを書き込み、生薬について自分だけのまとめのノートになるように使ってもらいたいと考えている。
	2015年8月～2017年3月	生薬化学の講義で用いる冊子を作成した。書き込み式で、重要な化合物を自分でまとめて勉強できるようにしている。余白を利用して、教科書の内容を自分でまとめて書いたり、教科書に載っていないことなども書き込んで、自分のまとめのノートとなるように使ってもらいたいと考えて作成した。
	2015年4月～現在に至る	漢方医学の講義で用いる冊子を毎年作成している。テキストには多くの情報があり、漢方医学のことを学ぶにはじっくり読むのが一番だが、馴染みのない単語や内容が多いことから、簡単に内容をまとめた冊子を作成した。ただし、冊子だけでは不十分なので、冊子とテキストの両方で勉強して欲しいと考えている。冊子には、国家試験やCBTの問題集も入れて、少なくともどんな内容を勉強し理解しないとイケないかを考えてもらうことにした。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2018年10月～2019年11月	薬用植物園を教育に活かすために、植物園を利用してどのような教育ができるかを検討するために、1年生を対象に薬用植物園トライアル実習を行った。植物園で、植物を直接観察したり五感を使って体験することで、植物の生態や利用法などを学んでもらった。また、薬用植物を用いた利用法として染色などを行うほか、簡単な実験も行い、知識がより定着するように工夫した。今後、これらの内容を、植物園を利用した実習などに役立てていく予定である。
	2020年9月～現在に至る	薬用植物園を利用した能動的な学習として、学生ガイドの育成を始めた。植物や生薬、ガイドに関心のある学生で希望者に対して行うものだが、学生は一般の人たちに向けてガイドするために、説明の内容だけでなく方法なども自ら考えて行い、能動的な学習につながると考えている。また、薬剤師に必要なコミュニケーション能力の向上にもつながるものと考えている。
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

西山

Nishiyama Y., Noda Y., Nakatani N., Shitan N., Sudo T., Kato A., Chalo Mutiso P. B.	論文	Journal of Natural Medicines, 2019, 73(1): 289-296. "Structure of constituents isolated from the bark of Cassipourea malosana and their cytotoxicity against a human ovarian cell line"
北河 修治、西山 由美	著書	果物の色に秘められた巧みな力 かきといちじく 大塚薬報 2019, 4月, No. 744, 22-25.
北河 修治、西山 由美	著書	果物の色に秘められた巧みな力 トロピカルフルーツ 大塚薬報 2019, 5月, No. 745, 26-29.
Sumiko Ikari, Shiou-Ling Lu, Feike Hao, Kenta Imai, Yasuhiro Araki, Yohei Yamamoto, Chao-Yuan Tsai, Yumi Nishiyama, Nobukazu Shitan, Tamotsu Yoshimori, Takanobu Otomo, Takeshi Noda	論文	PLoS One, 2020, 15(3): e0230156. "Starvation-induced autophagy via calcium-dependent TFEB dephosphorylation is suppressed by Shigyakusan"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
アボルフィンアルカロイドの鎮痛作用と構造活性相関	2017年・3月	日本薬学会137年会 仙台
ヒト卵巣がん細胞KOC7C株に対するタクシャの抗腫瘍活性成分の探索	2017年・9月	日本生薬学会64回年会 千葉
ヒト卵巣がん細胞KOC7C株に対する漢方薬とシスプラチンの併用効果	2018年・3月	日本薬学会138年会 金沢
バクシのヒト卵巣がん細胞KOC7C株に対する抗腫瘍活性成分の探索	2018年・3月	日本薬学会138年会 金沢
<i>Uvaria scheffleri</i> 根の成分検索	2019年・3月	日本薬学会139年会 千葉
3. その他		
演題名	発表年・月	学会名
研究って・・・? なんだか難しそう	2017年・1月	兵庫県立西宮高等学校 リサーチII 「課題研究入門・学術講演会」
植物のちから	2019年・9月	2019年度阪神地区相互利用担当者連絡会 神戸

西山

学会等および社会における主な活動	
1986年7月～現在に至る	日本生薬学会会員
1986年12月～現在に至る	日本薬学会会員
2018年4月～現在に至る	日本薬剤師会会員（兵庫県薬剤師会会員）

専任教員の教育・研究業績

所属	総合教育研究センター	職名	講師	氏名	藤波 綾
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		1995年度～現在に至る	臨床生化学実習（旧臨床検査実習） 学生実習の円滑な進行を促すための準備を行い、実習中は実習室で指導にあたっている。また、実験終了時には、結果について考察するなどのディスカッションを行い理解を深めるようにしている。		
		2004, 2007～2009年度	情報リテラシー 講義の円滑な進行のためのサポートを行った。		
		2011年度～現在に至る	薬学英語入門II		
		2020.4.1～現在に至る	薬学英語入門I 3年次生に対して、生命科学の分野で必要とされる基礎的な英語の知識を習得しながら、それまでの専門科目の講義内容をも復習できるように講義を行っている。2020年度からはオンライン講義となっているため、内容の理解に必要な資料を多く準備するとともに、学生の質問に答える体制づくりを行っている。		
		2015年度～現在に至る	薬物治療学（旧臨床検査学II） 3年次生に対して、血液に関する臨床検査の項目と意義、異常値に対する見方などを講義している。		
		2016.10.1～2019.9.30	総合薬学講座（病態・治療） 6年次生に対して、止血、凝固・線溶系と血液検査と疾患の関係および国試について解説し、問題文の条件設定がかなりヒントになることを伝えた。		
		2020.10.1～現在に至る	総合薬学講座（実務） 6年次生に対して、薬物療法の実践における「用法・用量」について注意すべき医薬品とその理由および相互作用について解説している。		
		2019.4.1～現在に至る	実務実習事前教育 4年次生に対して、5年次に行われる実務実習時に必要な技能や態度（特に調剤、処方せん監査、セルフメディケーションなど）を指導している。		
		2020.4.1～現在に至る	感染制御学II		

		適切な感染症診療を行うための臨床検査ならびに肺炎やインフルエンザなどの感染症についての予防と治療について解説している。
2 作成した教科書、教材、参考書		特になし
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2020年8月	第6回日本薬学教育学会 ポスター発表 リモート環境下においてグループ学習を活発に行うために、我々はグループ学習中に生じる感情に焦点を当てる必要があると考え、まず、従来のグループ学習での発言を「感情」の観点から分析した。
4 その他教育活動上特記すべき事項	2017年度～現在に至る	薬学教育者ワークショップタスク 実務実習指導薬剤師養成のためにタスクとして参加者にサポートを行っている。
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Imoto S, Kim SR, Amano K, Iio E, Yoon S, Hirohata S, Yano Y, Ishikawa T, Katsushima S, Komeda T, Fukunaga T, Chung H, Kokuryu H, Horie Y, Hatae T, Fujinami A, Kim SK, Kudo M, Tanaka Y.	論文	Dig Dis. 2017;35(6):531-40. "Serum IFN- 3 Levels Correlate with Serum Hepatitis C Virus RNA Levels in Symptomatic Patients with Acute Hepatitis C. "
藤波 綾、小山淳子、児玉典子	報告	Libra, 2018; 18: 59-71. 血糖値測定の話義を介した糖とその誘導体の重要性の理解度に関する調査・考察 基礎科目と臨床科目のコラボレーション授業を目指して
Ohta M, Fujinami A, Oishi K, Kobayashi N, Ohnishi K, Ohkura N.	論文	J. Diet Suppl., 2019; 16(3):331-344. "Ashitaba (Angelica Keiskei) exudate prevents increases in plasminogen activator inhibitor-1 induced by obesity in Tsumura Suzuki Obese Diabetic Mice. "
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
脂肪細胞とマクロファージの共培養系におけるTNF- α の分泌動態および高血糖、肥大化の影響	2017年・12月	ConBio2017
高脂肪食負荷マウスにおけるアシタバ由来成分カルコンの抗糖尿病作用	2018年・3月	日本薬学会第138年会

脳梗塞におけるアディポネクチンアイソフォームの臨床的意義	2019年・3月	日本薬学会第139年会
野生型マウスのメタボリックシンドローム関連因子に及ぼすナットウキナーゼ摂取の効果	2020年・3月	日本薬学会第140年会
3. その他		
演題名	発表年・月	講演内容
ポリフェノールの多彩な魅力 - ポリフェノールの王様 アシタバカルコンを通して -	2017年・7月	第18回神戸薬科大学健康食品講座
ポリフェノールの多彩な魅力 - ポリフェノールの王様 アシタバカルコンを通して -	2020年	2020年度神戸薬科大学健康食品講座
学会等および社会における主な活動		
1995年8月～現在に至る	日本臨床化学会会員	
1996年1月～現在に至る	日本薬学会会員	
2001年1月～現在に至る	日本生化学会会員	
2016年4月～現在に至る	初年次教育学会会員	
2016年4月～現在に至る	日本薬学教育学会会員	
2019年4月～現在に至る	日本薬剤師会会員	
2019年4月～現在に至る	日本病院薬剤師会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	医薬品情報学研究室	職名	講師	氏名	土生 康司
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日		概 要	
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2013～現在		CBT対策委員、実施委員	
		2013～現在		実務実習事前教育委員会委員	
		2014～現在		医薬品情報学（4年生前期）	
		2014～現在		薬学入門（1年生前期）	
		2014～現在		情報リテラシー（1年生前期）	
		2014～2017		薬剤設計学II（旧機能性製剤学）（4年前期、2コマ）	
		2015～現在		実務実習運営委員会委員	
		2021.4～現在		総合教育研究センター統括部門（兼任）	
2 作成した教科書、教材、参考書		2017.4		医薬品情報学（廣川書店）執筆、講義用プリント冊子作成	
		2018.9		臨床への有機と薬理からのアプローチ（京都廣川書店）執筆	
		2019.1		みてわかる薬学 図解医薬品情報学改訂第4版（南山堂）執筆	
		2021.12		できる薬剤師とよばれるために 上手に使いたい薬学ナレッジ101（じほう）執筆	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		2017.7		医薬品情報 様々な情報源、その選択と活用 土生 康司 第17回薬剤師のためのイブニングセミナー	

	2017.9	薬学統合学習の構築 第2報 臨床薬学-薬理学-有機化学の橋渡し教育を目指して 土生 康司、水谷 暢明、宮田 興子 第2回薬学教育学会.
	2017.10	医薬品、サプリメントの特徴にあった情報活用を考える 土生 康司 サプリメントフォーラム2017
	2018.8	薬学統合学習の構築 第3報 低学年次生への臨床薬学・薬理学・有機化学の橋渡し教育の導入 土生康司、水谷暢明、宮田興子 第3回薬学教育学会.
4 その他教育活動上特記すべき事項	2013～現在	情報委員会委員
	2014～2017.3	大学広報委員会委員
	2015～現在	個人情報保護委員会委員
	2016.4～2018.3	図書委員会委員
	2018.4～現在	国家試験対策委員会委員
	2018.4～現在	動物実験委員会委員
	2021.4～現在	インスティテューショナル・リサーチ委員会委員
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
八巻耕也、池田宏二、上田久美子、土生康司、中山喜明、武田紀彦、森脇健介、和田昭盛、小山淳子、児玉典子、北河修治	ノート(査読有)	分野横断的統合型初年次導入科目「薬学入門」へのミニッツペーパー導入が生み出す学習意欲と学習効果 薬学雑誌 137, 1285-1299 (2017).
上田久美子、寺岡麗子、八巻耕也、土生康司、宮田興子、北河修治	実践報告(査読有)	チーム基盤型学習を用いた分野横断統合演習の構築の試み 薬学教育 doi: 10.24489/jjphe.2017-012 (2017).
土生康司、水谷暢明、宮田興子	実践報告(査読有)	基礎系分野を臨床的課題の理解に繋ぐ思考プロセスを体験するためのジグソー型学習の実施 薬学教育 doi: 10.24489/jjphe.2020-018 (2020).
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
B型肝炎再活性化リスクのあるプレドニゾロン服用患者の抽出と疑義照会に向けたプログラム構築	2018.3	日本薬学会第138年会

大阪赤十字病院におけるがん疼痛コントロールマニュアル改定に伴うオピオイド持続静注処方内容及び指示の変化に関する調査	2018.3	日本薬学会第138年会
PMDA 添付文書情報検索サイトにおける糖尿病薬識別コードの登録様式の多様性	2019.3	日本薬学会第139年会
薬剤鑑別におけるPMDA 添付文書情報検索サイトの活用状況とニーズに関する病院薬剤師へのアンケート調査	2019.3	日本薬学会第139年会
近隣5病院統一の問い合わせ簡素化に対する医師の意識調査	2019.11	第29回日本医療薬学会年会
3. シンポジウム等		
シンポジウム『新時代の医薬品リスクマネジメント ～新たなハザードに対して』 医薬品情報を活用するベースはできているか ～ドイツの状況から再考～	2019.3	日本薬学会第139年会
臨床の諸問題を基礎薬学の知識でどのようにひも解くか SGLT2阻害薬について 臨床を考えた数字の読み方	2018.10	神戸薬科大学 臨床・基礎薬学連携シンポジウム
臨床から基礎までをつなぐ薬学教育をどのように構築するか 低学年での臨床から基礎薬学までをつなぐ薬学教育 ～チーム基盤型教育(TBL)を活用する橋渡し教育～	2018.10	神戸薬科大学 臨床・基礎薬学連携シンポジウム
教育講演 学会発表のhow-to	2018.2	近畿薬剤師合同学術大会2018
学会等および社会における主な活動		
2003～現在	日本医療薬学会会員	
2013～現在	日本医薬品情報学会会員	
2014～現在	日本薬学会会員	

士生

2003～現在	日本病院薬剤師会会員
2010～現在	日本薬剤師会会員
2007～現在	日本医療薬学会認定薬剤師

専任教員の教育・研究業績

所属	機能性分子化学研究室	職名	講師	氏名	前田 秀子
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2010年4月～現在に至る	1年生に「情報リテラシー」（前期）の講義をPower Pointを使用して行った。練習問題をやりながら基本操作を修得させる。さらに、定着させることを目指し課題を作成させた。		
		2009年4月～現在に至る	1年生に「基礎化学実習」（後期）を教えた。毎回、課題の提出をさせ、終了時に実験ノートの提出を行った。		
		2015年10月～現在に至る	1年生に「無機・錯体化学」（後期）を教えた。なるべく身近な化合物を例にあげて、無機化合物の機能や性質に興味を持たせるようにした。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項		2007年10月～2009年1月	神戸大学の非常勤講師として、1年生に化学実験を教えた。		
研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別		内容	
Maeda H., Katsushiro M., Nariai, H., Nakayama H.		論文		Phosphorus Res. Bull. 2017, 33: 21-25. "Introduction of Phosphate Group into -Arbutin by cyclo-Triphosphate"	

Maeda H., Obata S., Nakayama H.	論文	J. Incl. Phenom. Macrocycl. Chem. 2018, 91(3-4), 125-131. "Preparation and characterization of the inclusion complexes of equol with sulfobutylether-β-cyclodextrin: Their antioxidant activity and dissolution evaluation"
Maeda H., Morita K., Murokawa A., Matsuo R., Nariai H., Nakayama H.	論文	Phosphorus Res. Bull. 2019, 35: 55-58. "Introduction of Phosphonate Group into Kojic acid by Diphosphonate"
Maeda H., Matsushima T., Nagai T., Nakayama H.	論文	Phosphorus Res. Bull. 2020, 36: 29-35. "Phosphorylation of 5'-Deoxy-5-fluorouridine and 1-β-D-Arabinofuranosylcytosine with Disodium Diphosphonate"
Maeda H., Shiobara R., Tanaka M., Kajinami A., Nakayama H.	論文	Drug Dev. Ind. Pharm., 2021, 47: 535-41. "Effect of mechanochemical inclusion of triamterene into sulfobutylether-β-cyclodextrin and its improved dissolution behavior"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
シクロデキストリンによるエトドラクの包接能評価	2017.03.27	日本薬学会第137年会
ヒドロキシプロリンの保湿性向上を目指したシクロ三リン酸塩によるリン酸修飾	2017.08.25	第26回無機リン化学討論会
シクロデキストリンによるプラバスタチンの包接能評価	2019.09.12	第36回シクロデキストリンシンポジウム
美白成分の浸透性の向上を目指したジホスホン酸塩によるリン酸修飾	2020.09.25	第29回無機リン化学討論会

前田

シクロデキストリンによるルシノールの溶解性の改善とチロシナーゼ阻害活性の評価	2021.03.27	日本薬学会第141年会
学会等および社会における主な活動		
2010年10月～2018年10月	日本無機リン化学会学会誌編集委員	
2018年10月～現在に至る	日本無機リン化学会学会誌副編集委員長	
2020年9月～現在に至る	日本無機リン化学会総務担当理事	

専任教員の教育・研究業績

所属	総合教育研究センター	職名	講師	氏名	竹下 治範
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2014年～	4年生を対象に「実務実習事前教育」を担当している。 『実務実習事前教育』においては、5年次に行われる長期実務実習（病院・薬局）にスムーズに取り組めるよう、臨床現場で求められる知識・技能・態度の指導を行い、特に挨拶や身だしなみ教育についても力をいれている。		
		2014年～	『実務実習事前教育』において、輸液の種類と適応、輸液療法について、実薬を用いるとともに計算問題等も作成して、実務実習に先立つ知識をえられるような工夫を行った。また、医療安全の分野では学生が医療事故インシデントを楽しく理解できるようなSDGの運用に努めた。		
		2014年～	6年生を対象に「総合薬学講座」を担当している。 『総合薬学講座』の授業では、病院薬剤師業務や注射薬、輸液療法について授業を行った。		
		2014年～	3年生を対象に「調剤学」を担当している。 『調剤学』の授業では、オムニバスでその他の教員と分担している。私の分担は、注射薬の調剤（計数・無菌調製）、代表的な輸液と適応、栄養輸液など現場の経験をもとに写真を多く取り入れ、最新のトピックスを交えて興味をもてるように工夫を行った。		
		2017年～	3年生を対象に「医療倫理演習」を担当している。倫理の4原則など理論的な内容と臨床での症例を交えて、臨床経験を活かして学生が理解しやすいよう補足説明に力を入れて教えている。		

	2018年～	4年生を対象に「処方解析学1」「処方解析2」を担当している。処方解析学1では関節リウマチをメインに膠原病について、また処方解析学2では、酸関連疾患を4年生に、薬の知識だけでなく、症状、臨床検査値な幅広い知識と実務実習に役立つ内容を意識して講義している。
	2019年～	「在宅医療演習」の開講の初年度をむかえるが、約3年に渡り準備を行ってきた。甲南女子大学の看護リハビリテーション学部（看護・理学）とともに、在宅医療（地域包括ケアシステム）を想定したIPW(多職種連携)の合同授業の運営に携わり、次世代の多職種のあり方について学生が学べるようサポートした。 2020年度は、コロナ禍なのでオンライン開催の準備を行った。
	2020年～	「感染制御学」の開講のため、結核感染症、小児感染症、泌尿器感染症及び、感染に関わるエビデンスやアウトブレイク対応法などの授業準備を行った。最新のCovid-19感染など、感染症の話題などにも触れた。
2 作成した教科書、教材、参考書		
調剤学 教材	2014～	3年後期科目、注射薬調剤を全般的に作成した。
在宅医療演習	2020～	甲南女子大学とのIPEWのテキストを作成した。
処方解析	2017～	主要8疾患の中の免疫疾患・関節リウマチを作成した。
処方解析	2017～	酸関連疾患・消化性潰瘍及びH.ピロリ菌感染症を作成した。
感染制御学	2019～	6年前期科目、結核、小児感染症及び、院内感染対策委員会活動等を作成した。
総合薬学講座	2014～	6年通年科目の実務の範囲で注射薬とがん化学療法を作成した。
薬学生・薬剤師のための 添付文書徹底活用術 (薬事日報社,2016)	2016年10月1日	薬剤師の業務で起こり得る10の事例について、可能な限り添付文書やインタビューフォームで解決する方法を紹介し、薬学生・薬剤師が臨床現場で解決していけるようなヒントを与える構成となっている。
コンパス 調剤学 改訂第3版, 南江堂	2020年2月15日	改訂モデルコアカリキュラムに合わせて、最新の調剤業務、その他周辺情報など分かりやすい、基礎的な教科書として執筆した。
できる薬剤師とよばれるために-上手に使いたい薬学ナレッジ 101,じほう, 2021.	2021年12月24日	大学で学んだ基礎的な知識からさらにステップアップした臨床現場での疑問101例について分担執筆した。主に、中堅薬剤師のスキルアップを目的としている。

3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4	その他教育活動上特記すべき事項		
研究活動			
1. 著書・論文等			
	氏名	種別	内容
	波多江 崇, 田中智啓, 猪野 彩, 田内義彦, 竹下治範, 辰見明俊, 瀧口常男	論文	日本人を対象とした食後血糖上昇に対する難消化性デキストリンの効果：二重盲検プラセボ対照ランダム化比較試験のメタアナリシス, 医薬品情報学,18(4)67-72, 2017.
	竹下治範, 井上知美, 高瀬尚武, 波多江 崇, 室井延之, 瀧口常男	論文	副腎皮質ステロイド軟膏剤の適正使用に向けたFinger-tip unitによる服薬指導の実態調査と製剤学的使用性の評価, 医薬品情報学,18(4)48-54, 2017.
	竹下治範, 北 早織, 若林知子, 藪田有沙, 猪野 彩, 原田祐希, 中川素子, 中川道昭, 波多江 崇, 瀧口常男	論文	PTP包装からの錠剤の押し出し力に及ぼす製剤間の影響, 医薬品情報学,20(2) 98-103 , 2018.
	八野芳巳, 高取真吾, 柴田隆司, 北小路 学, 大嶋耐之, 難波弘行, 緒方 憲太郎, 枅淵泰宏, 八重徹司, 林雅彦, 垣東英史, 富永宏治, 名徳倫明, 二宮昌樹, 竹下治範, 島田憲一, 榎屋友幸	著書	コンパス 調剤学 改訂第3版, 南江堂, 2020.
	竹下治範, 藪田有沙, 北 早織, 若林知子, 猪野 彩, 原田祐希, 中川素子, 中川道昭, 波多江 崇, 瀧口常男	論文	患者がPTP包装から錠剤を出しやすくする手技についての科学的検討, 薬局薬学,12(1)1-8,2020.

北河修治（編集代表）清水忠，中川素子，中村 任，土生康司，矢野育子，土生康司，坂井祥一，山本和宏，加藤史恵，本庄達哉，内田享弘，小島穂菜美，丹田雅明，清水 忠，竹下治範，湯谷玲子，永井純也，中村 任，服部暁昌，大村友博，平大樹，鈴木豊史，國津侑貴，森田真也，磯野哲一郎，高尾良洋，三原 潔，橋本真梨，矢野育子，木村丈司，徳山尚吾，奥野 護，田中和宏，中尾修平，鎌尾まや，岩川精吾，上田昌宏，灘中里美，北川裕之	著書	できる薬剤師とよばれるために-上手に使いたい薬学ナレッジ101,じほう, 2021.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
PTP包装からの錠剤の押し出し力に及ぼすフィルムの素材及び膜厚の影響	2018年3月	日本薬学会第138年会, 金沢
NDBオープンデータを用いた乳幼児における抗ヒスタミン薬の処方実態調査	2018年3月	日本薬学会第138年会, 金沢
高湿度下における市販錠剤の重量と硬度に及ぼす包装素材の相違について	2019年3月	日本薬学会第139年会, 千葉
種々の恒温恒湿条件下でのPTP包装の防湿効果と錠剤の押し出し易さに及ぼすPTP素材の影響	2020年3月	日本薬学会第140年会, 京都
痙攣またはてんかんの既往歴のある患者に対する薬剤師の関わり	2020年10月	第30回日本医療薬学会年会, 名古屋
一包化錠剤仕分装置(TABSORT®)使用に伴うテルミサルタン錠の変色とその要因	2021年10月	第31回日本医療薬学会年会, 熊本
学会等および社会における主な活動		
2001年～現在	日本薬学会会員	
2003年～現在	日本病院薬剤師会会員	
2005年～現在	日本医療薬学会会員	

竹下

2007年～現在	日本リウマチ学会会員
2017年～現在	日本医薬品情報学会会員
2019年～現在	日本薬局学会会員
2008年～2013年	日本薬剤師研修センター認定薬剤師 第08-30718号
2008年～2013年	日本薬剤師研修センター認定 実務実習指導薬剤師 実習指導08102621号
2008年～2013年	日本病院薬剤師会 生涯研修履修認定 第6504号
2009年～現在	日本医療薬学会認定薬剤師 第09-0035号
2019年～現在	日本医療薬学会認定指導薬剤師 第19-0021号

専任教員の教育・研究業績

所属	エクステンションセンター	職名	講師	氏名	鎌尾 まや
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	1997.4～2017.3	「衛生薬学系実習」 書き込み式実験プロトコルを導入し受講前の事前学習を促進することにより、実習の教育効果を向上させた。			
	2017.4～現在に至る	「健康食品」 薬剤師向け健康食品講座の受講に加え、健康食品に関する情報検索の演習を実施し、科学的根拠に対する考え方の教育に努めた。2020年度以降は新型コロナウイルス感染症対応として、e-learning形式を導入し、WEBによるレポート提出により受講成果を評価した。			
	2017.4～現在に至る	「実践薬学」 薬剤師を対象としたグループディスカッション形式の研修への参加を必修化し、学生と薬剤師が共に学ぶ場を提供すると共に、生涯研修の意義の啓蒙に努めた。2020年度以降は新型コロナウイルス感染症対応として、e-learning形式を導入し、WEBによるレポート提出により受講成果を評価した。			
	2019.10～現在に至る	「総合薬学講座」 衛生薬学系分野のうち栄養と健康について、重要ポイントと国家試験の最近の傾向を中心に講義した。また、近年の関連する法・制度の変更点について重点的に解説した。			
	2020.4～現在に至る	「臨床栄養学」 新型コロナウイルス感染症対応として、e-learning形式の講義を実施した。受講期間中に自主課題を提示し、理解度の向上に努めた。			
	2020.4～現在に至る	「実務実習事前教育」 計数調剤、内用液剤の計量調剤、無菌調剤、チーム医療等の項目を担当した。調剤では学生一人一人の手技を観察し、レベルに合わせた指導を実施した。また、チーム医療では自身の臨床研修での経験や生涯研修支援事業の運営をする中で得た知識を活用し、学生のチーム医療への理解、将来的にチームの一員となり得る意識の醸成に努めた。			
	2 作成した教科書、教材、参考書	1997.4～2017.3	神戸薬科大学衛生薬学系実習書		
2007.4～2017.3		書き込み式実験プロトコル（プリント）			
2021.4～現在に至る		実務実習事前教育実習テキスト			

3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2018.3.28	神戸薬科大学薬剤師生涯研修支援事業であるシンポジウムにおける10年間の受講者調査（日本薬学会第138年会）
	2019.2.22	神戸薬科大学における生涯研修支援事業と健康食品領域研修認定薬剤師制度（生活習慣病予防のための機能性食品開発に関する研究会）
	2019.3.22	神戸薬科大学における「健康食品領域研修認定薬剤師制度」に基づく研修プログラム受講者の調査（日本薬学会第139年会）
	2019.8.24	神戸薬科大学における薬剤師を対象とした在宅医療研修プログラムの受講者調査及び学部学生を対象とした多職種連携1日見学実習の試み（第4回日本薬学教育学会大会）
	2019.8.25	薬剤師の生涯研修と神戸薬科大学における生涯研修支援事業（令和元年度 神戸薬科大学同窓会支部生涯研修企画委員夏季研修会）
	2019.10.17	薬学における健康食品分野への取り組み 神戸薬科大学における健康食品領域研修認定薬剤師制度について（レギュラトリーサイエンス財団 大阪事業所職員研修会）
	2020.3.28	神戸薬科大学における在宅医療に関する薬剤師生涯研修の有用性と問題点評価（日本薬学会第140年会）
	2020.9.12	神戸薬科大学における「健康食品領域研修認定薬剤師制度」に基づく研修プログラム受講者に対するアンケート調査 - 2018年度および2019年度の比較分析（第5回薬学教育学会大会 シンポジウム）
	2020.9.13	薬学教育への「栄養薬学」の導入とその課題：大学教員、生涯研修担当者の立場から より良い薬物治療と健康サポートに貢献するために（第5回薬学教育学会大会）
	2021.8.21	神戸薬科大学生涯研修におけるe-learning研修受講者に対するアンケート調査 対面研修との比較分析（第6回薬学教育学会大会）
	2021.10.31	「生涯研修認定制度」及び「健康食品領域研修認定薬剤師制度」による薬剤師生涯研修の推進（第24回近畿薬剤師学術大会）
4 その他教育活動上特記すべき事項	2017.4～現在に至る	健康食品領域研修事業委員会 委員
	2017.4～現在に至る	健康食品講座企画・運営委員会 委員
	2018.4～現在に至る	エクステンションセンター事業統括委員会 委員

	2018.4～現在に至る	生涯研修事業委員会 委員
	2018.4～現在に至る	生涯研修企画・運営委員会 委員
	2018.6	2018（平成30）年度 神戸薬科大学学長裁量経費教育改革プログラム採択 「生涯研修支援プログラムと連携した地域・在宅医療と多職種連携教育の推進」
	2019.4	2019年度 神戸薬科大学学長裁量経費教育改革プログラム採択 「生涯研修支援プログラムと連携した地域・在宅医療と多職種連携教育の推進」（継続）
	2020.4～現在に至る	実務実習事前教育委員会 委員
	2020.5～現在に至る	図書選定委員会 委員（生物・医療薬学系）
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Kamao M, Hirota Y, Suhara Y, Tsugawa N, Nakagawa K, Okano T, Hasegawa H	論文	Determination of Menadione by Liquid Chromatography-Tandem Mass Spectrometry Using Pseudo Multiple Reaction Monitoring. Anal. Sci., 33(7), 863-867, 2017 疑似的なmultiple reaction monitoring (MRM)を用いたLC-MS/MS法により、従来定量が困難であった側鎖を持たないビタミンKであるmenadione (MD)の定量法を確立した。本法によるMDおよび重水素化MDの検出限界は40 pgあるいは2 pgであり、日内変動、日差変動は5.4 - 8.2%と良好な値を示した。本法により尿中、血漿中、細胞あるいは培地抽出物中のMDの定量が可能であった。 本人担当部分：研究デザイン、測定およびデータ解析
Hirota Y, Nakagawa K, Isomoto K, Sakaki T, Kubodera N, Kamao M, Osakabe N, Suhara Y, Okano T.	論文	Eldecalcitol is more effective in promoting osteogenesis than alfacalcidol in Cyp27b1-knockout mice. PLoS One. 13, e0199856, 2018 ビタミンD誘導体のエルデカルシトールはアルファカルシドールよりも骨形成促進作用が強いことをビタミンD活性化酵素であるCYP27B1の遺伝子欠損マウスを用いて証明した。 本人担当部分：CYP27B1遺伝子欠損マウスの維持・管理、ビタミンD濃度測定

Tsugawa N, Nishino M, Kuwabara A, Ogasawara H, <u>Kamao M</u> , Kobayashi S, Yamamura J, Higurashi S.	論文	Comparison of vitamin D and 25-hydroxyvitamin D concentrations in human breast milk between 1989 and 2016–2017. <i>Nutrients</i> . 13, 573, 2021 1989年と2016年から2017年に収集された日本人の母乳中ビタミンD及び25-ヒドロキシビタミンD (25OHD) の濃度を比較し、これらの母乳中濃度が調査年に関係なく夏に高いことを明らかにした。また、2016～2017年の夏は1989年の夏と比較して有意に低いビタミンDおよび25OHD濃度が観察され、授乳中の母親のビタミンD栄養状態が関係していることが示唆された。 本人担当部分：母乳中ビタミンD及び25(OH)Dの測定法開発、分析
鎌尾まや	総説	学部教育及び卒業後教育への「栄養薬学」の導入 より良い薬物治療と健康サポートに貢献するために <i>薬学教育</i> , 5, doi: 10.24489/jjphe, 2021-010, 2021 健康サポート薬局制度の創設により薬学生、薬剤師に対する栄養や健康食品・サプリメントに関する教育の必要性が高まっている現状について概説すると共に、神戸薬科大学における「健康食品領域研修認定薬剤師制度」に基づく薬剤師研修について紹介し、臨床現場と大学が連携して「栄養薬学」領域の教育・研修を構築する必要性を示した。
鎌尾まや (北河修治編)	著書	できる薬剤師とよばれるために 株式会社じほう(北河修治編)2021年発行 本人執筆部分：栄養素が薬理作用をもち、薬の作用に影響を与えることはある? pp298-300 乳酸菌と抗菌薬は一緒に服用できる? pp308-310 ダイエット、ケトン体ダイエット、人口甘味料は薬効に影響する? pp311-313 AGEs、各種ビタミン、ポリフェノールの体内での化学反応とは? pp314-316
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
ビタミンD受容体およびビタミンD活性化酵素遺伝子欠損マウスの生殖機能低下に及ぼすカルシウム補充の影響	2017.3	日本薬学会第137回大会、仙台
若齢ラットの血中25-Hydroxyvitamin D3濃度に対するvitamin D3および25-hydroxyvitamin D3の補給効果ならびにカルシウム摂取量の影響	2018.6	日本ビタミン学会第70回大会、高槻

母乳中ビタミン Dおよび25-ヒドロキシビタミンD濃度の経年的比較ならびに地域・季節の影響	2019.1	第37回日本骨代謝学会学術集会、神戸
生体内ビタミンK変換の中間体MenadioneおよびMenadione抱合体の定量法の検討	2021.6	日本ビタミン学会第73回大会、東京（WEB）
高齢者における血中終末糖化産物（AGEs）濃度と健康関連指標との関連性	2021.3	日本薬学会第141回大会、広島（WEB）
3. その他		
演題名	発表年・月	学会名
いきいきと元気に暮らすための骨の健康のお話	2018.12	神戸薬科大学第15回健康サポートセミナー
健康食品って大丈夫？	2019.3	千代が丘つながりの場所～エナガの家～イベント 薬剤師に聞いてみよう！！
一緒に学ぼう！ 健康食品・サプリメントの正しい知識	2019.9	神戸薬科大学第20回健康サポートセミナー
免疫力に関わるビタミンの話	2021.5	がん哲学学校 in 神戸 第36回メディカル・カフェ
「生涯研修認定制度」及び「健康食品領域研修認定薬剤師制度」による薬剤師生涯研修の推進	2021.10	第24回近畿薬剤師学術大会
学会等および社会における主な活動		
1995.2～現在に至る	日本薬学会会員	
1996.2～現在に至る	日本ビタミン学会会員	
1997.6～2017.3	日本骨代謝学会会員	
1998.4～2017.3	日本栄養食糧学会会員	
2005.7～現在に至る	栄養情報担当者（NR）・サプリメントアドバイザー	
2006.11～現在に至る	認定薬剤師	
2010.4～2013.3	日本薬学会環境・衛生部会新人賞選考委員	
2017.3～現在に至る	日本薬剤師会、兵庫県薬剤師会会員	
2017.12～現在に至る	日本フードファクター学会会員	

2018.1～現在に至る	日本薬学教育学会会員
2019.6～現在に至る	消費者庁セカンドオピニオン事業 健康食品の表示・広告に関する科学的根拠の妥当性評価における論文レビュアー
2019.7～現在に至る	応急手当普及員（救急インストラクター）
2020.7～現在に至る	特定非営利活動法人エナガの会 理事
2020.7～現在に至る	I&H株式会社 倫理委員会委員
2021.1～現在に至る	認定薬剤師認証研修機関協議会 研修委員

専任教員の教育・研究業績

所属 薬理学研究室	職名 講師	氏名 泉 安彦
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
(1) 本学薬学部学生への教育(講義)	2017年～現在	薬理学 (2年次後期)
	2018年～現在	薬理学 (3年次前期)(分担4コマ)
	2018年～現在	医薬品毒性学(4年次前期)(分担4コマ)
	2017年～現在	総合薬学講座(6年次後期)
(2) 本学薬学部学生への教育(実習)	2017年～現在	薬理学実習(3年次後期)
	2017年～現在	卒業研究、(4年次、5年次)研究室に配属された学部学生に対して研究指導を実施。
(3) 本学薬学研究科大学院生への教育	2018,2020年	病態薬理生化学特論(後期)
(4) 他大学での講義	2017年11月2,9,30日,12月7日	京都大学薬学部にて薬理学 の講義を実施。
	2017年12月25日	京都大学薬学部にて薬理学 の講義を実施。
	2017年12月1日	京都大学大学院薬学研究科にて基礎医療薬科学特論IIの講義を実施。
2 作成した教科書、教材、参考書		該当なし
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		該当なし
4 その他教育活動上特記すべき事項		該当なし
研究活動		
1. 著書・論文等		

氏名	種別	内容
Masaki Y, Izumi Y, Matsumura A, Akaike A, Kume T.	論文	Protective effect of Nrf2-ARE activator isolated from green perilla leaves on dopaminergic neuronal loss in a Parkinson's disease model. Eur J Pharmacol. 798:26-34, 2017.
Izumi Y, Wakita S, Kanbara C, Nakai T, Akaike A, Kume T.	論文	Integrin $\alpha 5 \beta 1$ expression on dopaminergic neurons is involved in dopaminergic neurite outgrowth on striatal neurons. Sci Rep. 7:42111, 2017.
Izumi Y, Kataoka H, Inose Y, Akaike A, Koyama Y, Kume T.	論文	Neuroprotective effect of an Nrf2-ARE activator identified from a chemical library on dopaminergic neurons. Eur J Pharmacol. 818:470-479, 2018.
Yamamoto K, Izumi Y, Arifuku M, Kume T, Sawada H.	論文	α -Synuclein oligomers mediate the aberrant form of spike-induced calcium release from IP3 receptor. Sci Rep. 9:15977, 2019.
Inose Y, Izumi Y, Takada-Takatori Y, Akaike A, Koyama Y, Kaneko S, Kume T.	論文	Protective effects of Nrf2-ARE activator on dopaminergic neuronal loss in Parkinson disease model mice: Possible involvement of heme oxygenase-1. Neurosci Lett. 736:135268, 2020.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
ミクログリアにおけるNrf2-ARE経路活性化物質による炎症性サイトカインの抑制作用とその機序の解析	2019年8月	次世代を担う創薬・医療薬理シンポジウム2019
DAT 遺伝子へのインテグリン $\alpha 5 \beta 1$ 遺伝子ヘテロノックイン ES 細胞の作製と神経分化効率に関する検討	2019年8月	次世代を担う創薬・医療薬理シンポジウム2019
Nrf2活性化薬によるミクログリア活性化の抑制作用とその機序解析	2019年11月	第136回日本薬理学会近畿部会

神経炎症に対するNrf2活性化薬によるドパミン神経保護作用 ～人工知能による計数～	2020年10月	第70回日本薬学会関西支部大会
Nrf2活性化薬の抗炎症作用にNrf2遺伝子が関与しない可能性	2021年3月	第94回日本薬理学会年会
学会等および社会における主な活動		
2003年1月～現在	日本薬理学会	
2005年2月～現在	日本神経科学学会	
2008年4月～現在	日本薬学会	
2013年4月～現在	日本薬理学会 学術評議員	
2018年10月～2020年3月	日本薬理学会 代議員	

専任教員の教育・研究業績

所属 薬剤学研究室	職名 講師	氏名 細川 美香
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
薬学部学生への教育 実習	2009年～2014年	神戸薬科大学薬学部4年生に実務実習事前教育 前期(薬剤学関連実習)、実務実習事前教育 後期(処方せんと調剤・鑑査)の指導を行った。
薬学部学生への教育 実習	2009年～現在に至る	薬剤学研究室(卒業研究I,II)に配属された学生に(4,5,6年生)、研究の指導を行い、また研究したことをまとめ、発表できるように指導した。
薬学部学生への教育 実習	2014年～現在に至る	神戸薬科大学薬学部3年生に薬剤学実習の指導を行った。
薬学部学生への教育 薬学英語入門	2013年～2020年	神戸薬科大学薬学部3年生に薬学英語入門の指導を行った。
薬学部学生への教育 薬物動態学	2019年～2020年	神戸薬科大学薬学部3年生に薬物動態学 の指導を行った。
薬学部学生への教育 臨床薬剤学	2021年～現在に至る	神戸薬科大学薬学部6年生に臨床薬剤学 の指導を行った。
薬学部学生への教育 薬物動態学	2021年～現在に至る	神戸薬科大学薬学部3年生に薬物動態学 の指導を行った。
2 作成した教科書、教材、参考書		
特になし		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
学会発表	2017年9月	第2回日本薬学教育学会大会にて、以下の発表を行った。 演題名「神戸薬科大学の薬学英語入門での学力向上に導くジグソー法の検討 コーディングによる質的分析から学生の意識を可視化する」

学会発表	2018年9月	第3回日本薬学教育学会大会にて、以下の発表を行った。 演題名「薬学英语入門」におけるジグソー法を用いた協調学習の効果的な予習方法の検討 - ジグソー活動での深い学びを目指して - 」
4 その他教育活動上特記すべき事項		
神戸薬科大学学長裁量経費に基づく教育改革プログラム	2017年	神戸薬科大学学長裁量経費に基づく教育改革プログラムへ参画し、プログラム：ジグソー法を活用した「薬学英语入門Ⅰ、Ⅱ」の授業改善を代表者として実施した。
ベストティーチャー賞	2021年	3年後期：薬物動態学 の授業に対して、ベストティーチャー賞を受賞した。
研究活動		
1 . 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Hosokawa M, Tanaka S, Ueda K, Iwakawa S, Ogawara KI.	論文	Biochem. Biophys. Res. Commun. 509, 249-254 (2019). "Decitabine exerted synergistic effects with oxaliplatin in colorectal cancer cells intrinsic resistance to decitabine"
細川美香, 児玉典子, 田中将史, 竹内敦子, 小山淳子	論文	薬学雑誌, 140, 107-111 (2020). コーディングによる質的解析を用いた予習方法に関する研究 専門英語科目「薬学英语入門」における意識調査
Hosokawa M, Goto K, Tanaka S, Ueda K, Iwakawa S, Ogawara KI.	論文	Chem. Pharm. Bull. 68, 1-6 (2020). Optimization of analytical conditions for hydrophilic nucleic acids using mixed-mode and reversed-phase pentabromobenzyl columns.
Tanaka S, Hosokawa M, Miyamoto T, Nakagawa A, Haruna M, Ueda K, Iwakawa S, Ogawara KI.	論文	Biochem. Biophys. Rep. 26, 10096 (2021). miR-33a-5p in small extracellular vesicles as non-invasive biomarker for oxaliplatin sensitivity in human colorectal cancer cells.
Hosokawa M, Seiki R, Iwakawa S, Ogawara KI.	論文	Biochem. Biophys. Res. Commun. 578, 157-162 (2021). Combination of azacytidine and curcumin is a potential alternative in decitabine-resistant colorectal cancer cells with attenuated deoxycytidine kinase.
2 . 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名

Optimization of analytical conditions for hydrophilic compounds by reversed-phase HPLC	2019年7月	The 3rd Workshop for Korea-Japan Young Scientists on Pharmaceutics
デシタピンとオキサリプラチン併用効果の増強におけるDNA損傷応答経路の関与	2020年3月	日本薬学会 第140年会
逆相蒸発法により調製した水溶性物質内封リポソームの内封効率評価法の比較	2020年5月	日本薬剤学会 第35回年会
エピジェネティック修飾薬前処置による低酸素下がん細胞における抗がん剤効果の改善	2021年5月	日本薬剤学会 第36回年会
エピジェネティック修飾薬は低酸素下がん細胞における抗がん剤の効果を改善する	2021年10月	第71回 日本薬学会関西支部薬学会
学会等および社会における主な活動		
2004年～現在に至る	日本薬学会会員	
2005年～現在に至る	日本医療薬学会会員	
2007年～現在に至る	日本薬剤学会会員	
2008年～現在に至る	日本薬物動態学会会員	
2016年～2020年	日本薬学教育学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 微生物化学研究室	職名 講師	氏名 増田 有紀
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
微生物学実習	2010年10月～現在	学部2年次後期に、微生物実習を行っている。学生の理解度を向上させるため、少人数でのディスカッションを実施している。また、操作（特に無菌操作）の一つ一つの意味について理解を深めるために、実習開始時に説明に加えてデモンストレーションを行っている。
情報リテラシー	2014年4月～現在	学部1年次前期に、情報リテラシーの講義の一部として、パワーポイントを用いたプレゼンテーションの作成について指導している。
2 作成した教科書、教材、参考書		
なし		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
なし		
研究活動		
1 . 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Masuda Y, Nakayama Y, Tanaka A, Naito K, Konishi M.	論文	PLoS One., 2017, 12(3):e0173621. "Antitumor activity of orally administered maitake β -glucan by stimulating antitumor immune response in murine tumor."
Nakayama Y., Masuda Y., Ohta H, Tanaka T, Washida M, Nabeshima YI, Miyake A, Itoh N, Konishi M.	論文	Sci. Rep., 2017, 23:7(1):330. "Fgf21 regulates T-cell development in the neonatal and juvenile thymus."

Masuda Y, Nakayama Y, Mukae T, Tanaka A, Naito K, Konishi M.	論文	Int. Immunopharmacol., 2019, 67:408-416. "Maturation of Dendritic Cells by Maitake β -glucan Enhances Anti-Cancer Effect of Dendritic Cell Vaccination."
2 . 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
分泌因子neudesinのがん免疫抑制作用について	2021年3月	日本薬学会 第140年会
Fgf21の胸腺樹状細胞を介した免疫寛容維持機構	2020年10月	第70回 日本薬学会関西支部総会・大会
学会等および社会における主な活動		
2003年～現在に至る	日本薬学会会員	
2009年～現在に至る	日本免疫学会会員	
2010年～現在に至る	日本分子生物学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	医療薬学研究室	職名	講師	氏名	堀部 紗世
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日		概 要	
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
4年生に対する実務事前実習		2013年10月1日～		本学4次生を対象に、事前実務実習を指導している。疑義照会では、現場で働いている先生方とロールプレイおよびグループディスカッションを行い、実際に疑義照会する時の注意点や配慮および薬剤師としての倫理について指導している。	
卒業研究		2013年10月1日～		本学5年生および6年生を対象に、卒業研究を指導している。卒業研究を通して、問題を提議しその問題を自己解決する力を養いように指導している。	
2 作成した教科書、教材、参考書					
特になし					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
特になし					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
特になし					
研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別		内容	
Horibe S, Kawauchi S, Yasuie S, Mizuno S, Kato I, Rikitake Y.		論文		Journal of Biomedicine (2017), Vol. 2, p101-108 "Anti-inflammatory Effect of JBP485 on Dextran Sulfate Sodium-induced Colitis in Mice."	

Horibe S, Tanahashi T, Kawauchi S, Murakami Y, Rikitake Y.	論文	BMC Cancer (2018), 18, 47. "Mechanism of recipient cell-dependent differences in exosome uptake."
Horibe S, Kawauchi S, Tanahashi T, Sasaki N, Mizuno S, Rikitake Y.	論文	Biochemical and biophysical research communications. (2018) Vol. 507, p426-432 "CD44v-dependent upregulation of xCT is involved in the acquisition of cisplatin-resistance in human lung cancer A549 cells."
Sato J, Horibe S, Kawauchi S, Sasaki N, Hirata KI, Rikitake Y.	論文	Journal of neurochemistry (2018), 147, p495-513. "Involvement of aquaporin-4 in laminin-enhanced process formation of mouse astrocytes in 2D culture: Roles of dystroglycan and - syntrophin in aquaporin-4 expression."
Kawauchi S., Horibe S., Sasaki N., Hirata KI., Rikitake Y.	論文	Experimental Cell Research (2019), Vol. 374(2), p333-341. "A novel in vitro co-culture model to examine contact formation between astrocytic processes and cerebral vessels."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
シスプラチン耐性獲得機構におけるミトコンドリアDNA変異の役割	2019年12月	第42回日本分子生物学会年会
ミクログリアの活性化における脳血管内皮細胞老化の役割	2020年3月	日本薬学会第140年会
アルツハイマー病の病態形成における脳血管内皮細胞老化の役割	2020年3月	日本薬学会第140年会
Involvement of mtDNA Mutations in Acquired Resistance to Cisplatin in A549 Cell-Derived Cisplatin -Resistant Cells.	2020年10月	第79回日本癌学会学術総会
脳血管内皮細胞老化によるアルツハイマー病モデルマウスにおける認知機能低下の抑制	2021年12月	第44回日本分子生物学会年会
学会等および社会における主な活動		

堀部

2000年4月～現在に至る	日本薬学会会員
2001年1月～現在に至る	医療薬学会会員
2008年1月～現在に至る	癌学会会員

専任教員の教育・研究業績

所属	生命分析化学研究室	職名	講師	氏名	森田 いずみ
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	1995.4.1～現在に至る	『分析化学系実習』を担当している。全体講義で器具の扱い方を見せながら説明を行うことはもちろんのこと、特に注意すべき点に関しては班ごとの少人数にわけて、操作を実際に見せてから実施させるなどの工夫を心がけている。		
		2020.4.1～現在に至る	『卒業研究』を担当している。長い時間を費やす卒業研究において得られる様々な経験を通し、社会に出てからも自ら実践できるような学習の機会となるよう常に心がけている。		
2	作成した教科書、教材、参考書	2014	『免疫測定法』（講談社）の執筆を分担担当した。		
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等		特になし		
4	その他教育活動上特記すべき事項		特になし		
研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別		内容	
Oyama H., Morita I., Kiguchi Y., Miyake S., Moriuchi A., Akisada T., Niwa T., Kobayashi N.		論文		Anal. Chem. 2017, 89(1), 988-995. "One-Shot in Vitro Evolution Generated an Antibody Fragment for Testing Urinary Cotinine with More Than 40-Fold Enhanced Affinity"	

I. Morita, H. Oyama, M. Yasuo, K. Matsuda, K. Katagi, A. Ito, H. Tatsuda, H. Tanaka, S. Morimoto, N. Kobayashi	論文	Biol. Pharm. Bull. 2017, 40(2), 174-181. "Antibody Fragments for On-Site Testing of Cannabinoids Generated via in Vitro Affinity Maturation"
I. Morita, H. Oyama, Y. Kanda, M. Yasuo, A. Ito, M. Toyota, Y. Hayashi, T. Yokoyama, N. Kobayashi	論文	Biol. Pharm. Bull. 2018, 41(1), 123-131. " Enantioselective Monoclonal Antibodies for Detecting Ketamine to Crack Down on Illicit Use"
I. Morita, H. Oyama, Y. Kiguchi, A. Oguri, N. Fujimoto, A. Takeuchi, R. Tanaka, J. Ogata, R. Kikura-Hanajiri, N. Kobayashi	論文	J. Pharm. Biomed. Anal. 2020, 190, 113485. "Immunochemical monitoring of psilocybin and psilocin to identify hallucinogenic mushrooms"
I. Morita, Y. Kiguchi, H. Oyama, A. Takeuchi, C. Tode, R. Tanaka, J. Ogata, R. Kikura-Hanajiri and N. Kobayashi	論文	Anal. Methods, 2021, 13, 3954-3962. "Derivatization-assisted enzyme-linked immunosorbent assay for identifying hallucinogenic mushrooms with enhanced sensitivity"
2 . 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
In vitro affinity maturation of a single-chain Fv fragment for on-site testing of cannabinoids	2017.6	European Congress of Clinical Chemistry and Laboratory Medicine
メタンフェタミン第 相代謝物に対する特異モノクローナル抗体産生の試み	2019.3	日本薬学会第139年会
幻覚性キノコ成分のオンサイト分析を目的とするシロシンシリル化体に対する新規モノクローナル抗体の作製	2019.9	日本法中毒学会第37年会
Generation of monoclonal antibodies for on-site analysis of psilocin and psilocybin in hallucinogenic mushrooms	2019.5	European Congress of Clinical Chemistry and Laboratory Medicine
マジックマッシュルーム中シロシピン、シロシンのELISA	2020.1	第70回日本薬学会関西支部大会

森田

学会等および社会における主な活動	
1995年4月～現在	日本薬学会会員
2003年9月～現在	日本分析化学会会員
2013年4月～現在	生物化学測定研究会会員
2017年6月～現在	日本法中毒学会会員

専任教員の教育・研究業績

所属	総合教育研究センター	職名	講師	氏名	富田淑美
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
4,5年次「海外薬学研修」を分担		2020年4月～	海外渡航に制限がある状況においても、オンライン講義やビデオ講義により海外薬学関係者との交流の機会を設け、学生の英語学習の意欲および国際感覚を高めるべく努めた。		
4年次「実務実習事前教育」を分担		2020年4月～	実臨床と大学での学びを結び付けて考えられるよう薬局薬剤師としての実務経験を活かして、学生が必要な知識と技術を修得する一助となるべく努めた。		
4年次「地域医療・プライマリケア論」を分担		2021年4月～			
4年次「社会保障制度と薬剤経済」を分担		2021年4月～			
4年次「処方解析」を分担		2021年4月～			
6年次「がん薬物療法論」を分担		2021年4月～			
6年次「感染制御学」を分担		2021年4月～			
4年次「処方解析」を分担		2021年9月～			
6年次「総合薬学講座」を分担		2021年9月～			
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					

4 その他教育活動上特記すべき事項		
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
富田 淑美	論文	ファルマシア 2017, 53(4), 313-316.
富田 淑美	論文	ファルマシア 2018, 54(10), 976-977.
富田 淑美	コラム	兵庫県薬剤師会誌「兵薬界」2021, 791(12), 20-21. 「大学だより」
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
薬剤師が在宅療養支援に介入を続けることにより薬物治療が適正化された1症例	2017年・10月	第50回日本薬剤師会学術大会
A preliminary trial for developing the methodology intended to broaden pharmacy students' global horizons.	2021年・10月	第31回日本医療薬学会年会 (International Symposium)
3. その他		
演題名	発表年・月	学会名
化学的考察から患者のために薬剤師だからできること	2017年・9月	第6回日本くすりとう病学会学術集会
薬局での有機化学を活かした働き方	2018年・10月	臨床・基礎薬学連携シンポジウム
現場で生きる考える力	2018年・11月	第47回徳島大学薬学部卒後教育公開講座
調剤業務で見直す！化学の有用性	2021年・8月	2021年度名古屋市立大学東海薬剤師生涯学習センター講座（8月25日分）
学会等および社会における主な活動		
2013年9月～2020年3月	静岡県災害薬事コーディネーター	

富田

2004年～	日本薬学会
2012年～	日本薬剤師会
2016年4月～	日本病院薬剤師会
2014年4月～	日本医療薬学会
2011年10月～	国際薬剤師・薬学連合（FIP）

専任教員の教育・研究業績

所属	薬剤学研究室	職名	講師	氏名	河野 裕允
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
(1) 学部学生に対する教育		2021年～ 2021年～	基礎的な知識について説明した後、教科書の図を中心に臨床現場で実際に遭遇する可能性のある事例について解説を行っている。また、国家試験の過去問題を要所要所に取り入れることで、知識の定着と応用ができるように心がけている。 薬物動態学I（3年生前期） 総合薬学講座（6年生通年） 作業を伴う実験のみでなく、Excelを用いた解析、Wordを用いたレポート作成、Powerpointを用いた発表資料作成を行うことで、実習内容についての理解を深めるのみでなく、論理的思考力およびプレゼン能力の向上も図っている。		
		2021年～ 2021年～ 2021年～	薬剤学実習（3年生後期） アクティブラボ（1～3年生通年） 卒業研究（4～6年生通年）		
(2) 大学院生への教育		2021年～	薬剤学に関する最新の研究、特に異分野融合に関する事例を紹介し、医薬品開発において薬学研究者として貢献できることを考える機会を提供するようにしている。 臨床薬剤学特論（大学院博士課程）		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					

4 その他教育活動上特記すべき事項		
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Y Kono, T Nakai, H Taguchi, T Fujita.	論文	Drug Deliv. 24, 1740-1749 (2017). "Development of magnetic anionic liposome/atelocollagen complexes for efficient magnetic drug targeting."
Y Kono, S Gogatsubo, T Ohba, T Fujita.	論文	Drug Deliv. 26, 935-943 (2019). "Enhanced macrophage delivery to the colon using magnetic lipoplexes with a magnetic field."
Y Kono, A Miyamoto, S Hiraoka, R Negoro, T Fujita.	論文	Biol Pharm Bull. 43, 1785-1791 (2020). "Mesenchymal stem cells alter the inflammatory response of C2C12 mouse skeletal muscle cells."
Y Kono, J Takegaki, T Ohba, K Matsuda, R Negoro, S Fujita, T Fujita.	論文	Int J Pharm. 596, 120298 (2021). "Magnetization of mesenchymal stem cells using magnetic liposomes enhances their retention and immunomodulatory efficacy in mouse inflamed skeletal muscle."
Y Kono, I Kawahara, K Shinozaki, I Nomura, H Marutani, A Yamamoto, T Fujita.	論文	Pharmaceutics. 13, 388 (2021). "Characterization of P-glycoprotein inhibitors for evaluating the effect of P-glycoprotein on the intestinal absorption of drugs."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
An openable artificial intestinal tract system enables the evaluation of drug absorption in Caco-2 cells under conditions of the reduction of the unstirred water layer.	2019年11月	AAPS 2019 PharmSci 360
磁性リポソームを用いた間葉系幹細胞の磁性化とその骨格筋内保持効率の評価	2020年5月	日本薬剤学会 第35年会

組織滞留性の向上を目指した磁性化間葉系幹細胞の作製	2020年12月	第27回次世代医工学研究会
外部磁場存在下における磁性化間葉系幹細胞の骨格筋内滞留性および抗炎症効果の評価	2021年5月	日本薬剤学会 第36年会
磁性リポソームを利用した標的組織内滞留型磁性化間葉系幹細胞の作製 -骨格筋内滞留性および抗炎症効果の評価-	2021年10月	第71回日本薬学会関西支部大会
学会等および社会における主な活動		
2010年4月～現在	日本薬剤学会会員	
2010年4月～現在	日本DDS学会会員	
2012年4月～現在	日本薬学会会員	
2013年4月～現在	日本癌学会会員	
2019年7月～現在	次世代医工学研究会幹事	
2021年7月～現在	日本薬剤学会 DDS製剤臨床応用FG 執行部	

専任教員の教育・研究業績

所属	医薬細胞生物学研究室	職名	講師	氏名	山田泰之
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2017年9月1日～現在に至る	本学2年生を対象に「細胞生物学実習」にて、顕微鏡の使用方法や、動物・植物の組織の観察、マウスの解剖、重要生薬の観察や鑑定についての指導を行っている。		
		2018年4月1日～現在に至る	本学2～3年生を対象の選択科目「アクティブ・ラボ」にて、学生に持参してもらった植物を用いた組織培養実験や動物細胞の継代培養とルシフェラーゼによる発光検出実験などについて、指導を行っている。		
		2021年4月1日～現在に至る	本学6年生対象の「総合薬学講座」にて、国家試験対策の講義や問題演習を行っている。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別		内容	

Yasuyuki Yamada, Miya Urui, Hidehiro Oki, Kai Inoue, Haruyuki Matsui, Yoshito Ikeda, Akira Nakagawa, Fumihiko Sato, Hiromichi Minami, Nobukazu Shitan	論文	“Transport engineering for improving the production and secretion of valuable alkaloids in <i>Escherichia coli</i> ” Metabolic Engineering Communications, 13, e00184, DOI: 10.1016/j.mec.2021.e00184 (2021)
Yasuyuki Yamada, Shohei Nishida, Nobukazu Shitan, Fumihiko Sato	論文	“Genome-Wide Profiling of WRKY Genes Involved in Benzylisoquinoline Alkaloid Biosynthesis in California Poppy (<i>Eschscholzia californica</i>)” Frontiers in Plant Science, 12, 600326, DOI: 10.3389/fpls.2021.699326 (2021)
Yasuyuki Yamada, Hideki Hirakawa, Kentaro Hori, Yohei Minakuchi, Atsushi Toyoda, Nobukazu Shitan, Fumihiko Sato	論文	“Comparative analysis using the draft genome sequence of California poppy (<i>Eschscholzia californica</i>) for exploring the candidate genes involved in benzylisoquinoline alkaloid biosynthesis” Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry, 85, 851-859, DOI: 10.1093/bbb/zbaa091 (2021)
Yasuyuki Yamada, Shohei Nishida, Nobukazu Shitan, Fumihiko Sato	論文	“Genome-wide identification of AP2/ERF transcription factor-encoding genes in California poppy (<i>Eschscholzia californica</i>) and their expression profiles in response to methyl jasmonate” Scientific Reports, 10, 18066, DOI: 10.1038/s41598-020-75069-7 (2020)
Kentaro Hori, Yasuyuki Yamada, Ratmoyo Purwanto, Yohei Minakuchi, Atsushi Toyoda, Hideki Hirakawa, Fumihiko Sato	論文	“Mining of the Uncharacterized Cytochrome P450 Genes Involved in Alkaloid Biosynthesis in California Poppy Using a Draft Genome Sequence” Plant and Cell Physiology, 59, 222-233, DOI: 10.1093/pcp/pcx210 (2018)
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
エンゴサクにおけるアルカロイド生合成に関わるO-methyltransferaseの機能解析 corydaline生合成系の解明を目指して	2021年10月	第71回日本薬学会関西支部総会・大会
輸送工学による効率的なイソキノリンアルカロイド生産系の構築	2021年9月	第67回日本生薬学会年会 東京
輸送工学を利用した効率的なイソキノリンアルカロイド生産	2020年3月	日本農芸化学会2020年度大会 福岡

ケシ科ハナビシソウのイソキノリンアルカロイド生産に関わる遺伝子の探索と機能解析	2020年3月	第61回日本植物生理学会年会 大阪
ケシ科ハナビシソウのドラフトゲノムデータを利用したイソキノリンアルカロイド生合成関連遺伝子のマイニング -ドラフトゲノムデータを利用した生合成関連遺伝子の探索-	2019年10月	第69回日本薬学会関西支部総会・大会
3. その他		
招待講演・演題名	発表年・月	学会名
学会等および社会における主な活動		
2008年5月～現在に至る	日本植物バイオテクノロジー学会会員	
2008年11月～現在に至る	日本農芸化学会会員	
2010年1月～現在に至る	日本植物生理学会会員	
2019年2月～現在に至る	日本薬学会会員	
2020年3月～現在に至る	トランスポーター研究会幹事 (第15回トランスポーター研究会年会 実行委員)	

専任教員の教育・研究業績

所属	薬品物理化学研究室	職名	講師	氏名	山崎 俊栄
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2017年～現在	物理化学実習（2年次後期）（分担） 生体膜モデル粒子への薬物の分配係数の決定を担当		
2	作成した教科書、教材、参考書		該当なし		
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等		該当なし		
4	その他教育活動上特記すべき事項		該当なし		
研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別	内容		
Azuma R., Yamasaki T., Sano K., Munekane M., Matsuoka Y., Yamada K., Mukai T.		論文	<i>Free Radic. Biol. Med.</i> , 163: 297-305 (2021) A Radioiodinated Nitroxide Probe with Improved Stability against Bioreduction for In Vivo Detection of Lipid Radicals.		
Kannaka K., Sano K., Nakahara H., Munekane M., Hagimori M., Yamasaki T., Mukai T.		論文	<i>Langmuir</i> , 36: 10750-5 (2020) Radiation-induced redox alteration in the mouse brain.		
Yamasaki T., Azuma R., Sano K., Munekane M., Matsuoka Y., Yamada K., Mukai T.		論文	<i>ACS. Med. Chem. Lett.</i> , 11(1): 45-8 (2020) Radioiodinated Nitroxide Derivative for the Detection of Lipid Radicals.		

Kannaka K., Sano K., Hagimori M., Yamasaki T., Mune Kane M., Mukai T.	論文	<i>Bioorg. Med. Chem.</i> , 27(16): 3613-8 (2019) Synthesis of an amphiphilic tetrazine derivative and its application as a liposomal component to accelerate release of encapsulated drugs.
Yamasaki T., Buric D., Chacon C., Gérard A., Braguer D., Marque S. R. A., Carré M., Brémond P.	論文	<i>Bioorg. Med. Chem.</i> , 27(10): 1942-51 (2019) Chemical modifications of imidazole-containing alkoxyamines increase C–ON bond homolysis rate: effects on their cytotoxic properties in glioblastoma cells.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
生体内脂質ラジカルを追跡するための放射性プローブの開発および一過性脳虚血モデルを用いた評価	2021年11月	第64回日本脳循環代謝学会学術集会
位置換基にベンゼン環を含むTEMPO型ニトロキシドの還元反応性の評価	2020年3月	日本薬学会第141年会
アルコキシアミンの結合開裂反応におけるニトロキシド部分構造の置換基効果の検討	2020年3月	日本薬学会第141年会
脂質ラジカルの核医学イメージングを目的とした新規放射性プローブの開発	2020年11月	電子スピンサイエンス学会2020
生体内脂質ラジカルを非侵襲検出する放射性プローブの合成及び脂質過酸化誘発モデルマウスでの評価	2020年10月	第70回日本薬学会関西支部大会
学会等および社会における主な活動		
2006年 ~ 現在	日本薬学会会員	
2007年 ~ 現在	電子スピンサイエンス学会会員	
2014年 ~ 現在	International EPR Society会員	
2018年 ~ 現在	日本核医学会会員	
2019年 ~ 現在	日本癌学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 薬化学研究室	職名 講師	氏名 高木 晃
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2016年10月-現在に至る 2017年4月-現在に至る	薬化学研究室に配属された学生の卒業研究指導を行っている。実験で行うことを薬剤師国家試験と関連付けすることで実験にも興味を持てるように工夫している。 有機化学実習(学部2年生)を分担しており、実習講義の一部を担当している。実習時間の終わりにディスカッションを行い、実習の目的と実際に行った手順の理解を促進できるように努めている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
T. Ikawa, Y. Sumii, S. Masuda, D. Wang, Y. Emi, A. Takagi, S. Akai	論文	<i>Snlett</i> 2018 , <i>29</i> , 530-536. "Synthesis of Optically Active 2,3-Disubstituted Indoline Derivatives through Cycloaddition Reactions between Benzynes and , -Unsaturated - Aminobutyronitriles"
H. Tsujino, T. Uno, T. Yamashita, M. Katsuda, K. Takada, T. Saiki, S. Maeda, A. Takagi, S. Masuda, Y. Kawano, K. Meguro, S. Akai	論文	<i>Bioorg. Med. Chem. Lett.</i> 2019 , <i>29</i> , 126607. "Correlation of indoleamine-2,3-dioxygenase 1 inhibitory activity of 4,6-disubstituted indazole derivatives and their heme binding affinity"

T. Ikawa, J. Sun, A. Takagi, S. Akai	論文	<i>J. Org. Chem.</i> 2020 , <i>85</i> , 3383-3392. "One-Pot Generation of Functionalized Benzyne from Readily Available 2-Hydroxyphenylboronic Acids"
I. Takashima, Y. Inoue, N. Matsumoto, A. Takagi, K. Okuda	論文	<i>Chem. Commun.</i> 2020 , <i>56</i> , 13327-13330. "A fluorogenic probe using a catalytic reaction for the detection of trace intracellular zinc"
A. Takagi, K. Usuguchi, I. Takashima, K. Okuda	論文	<i>Org. Lett.</i> 2021 , <i>23</i> , 4083-4087. "Total Synthesis of Antiausterity Agent (±)-Uvaridacol L by Regioselective Axial Diacylation of a <i>myo</i> -Inositol Orthoester"
T. Ikawa, Y. Yamamoto, A. Heguri, Y. Fukumoto, T. Murakami, A. Takagi, Y. Masuda, K. Yahata, H. Aoyama, Y. Shigeta, H. Tokiwa, S. Akai	論文	<i>J. Am. Chem. Soc.</i> 2021 , <i>143</i> , 10853-10859. "Could London Dispersion Force Control Regioselective (2 + 2) Cyclodimerizations of Benzyne? YES: Application to the Synthesis of Helical Biphenylenes"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
栄養飢餓耐性解除に基づく抗腫瘍性天然物ならびに類縁体の合成研究	2020年3月	日本薬学会第140年会
(±)-Uvaridacol Lの合成研究	2020年10月	第70回日本薬学会関西支部総会・大会
位置選択的ジベンゾイル化による(±)-uvaridacol Lの効率的合成	2021年3月	日本薬学会第141年会
がんの栄養飢餓耐性解除に着目したグルコース誘導体の構造活性相関研究	2021年3月	日本薬学会第141年会
栄養飢餓耐性を解除する(±)-uvaridacol Lの全合成と合成類縁体の活性評価	2021年9月	第63回天然有機化合物討論会
3. その他		
演題名	発表年・月	学会名

高木

がん微小環境を標的とした生物活性化合物の創製研究	2020年10月	第6回関西薬学シンポジウム：化学系の若い力（招待講演）
学会等および社会における主な活動		
2009年～現在に至る	日本薬学会会員	
2009年～現在に至る	有機合成化学協会会員	
2017年～現在に至る	国際癌治療増感研究協会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	薬品化学研究室	職名	助教	氏名	安井基博
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2019年4月～現在	3年次の「医薬品化学実習」を担当している。医薬品合成を通して有機合成化学の魅力を伝えると共に、これまでの学習内容をより深く理解できるよう、学生との議論に重点を置いている。未知化合物の構造を定性試験から解明する「未知検体実験」では有機化学の体系的理解と思考力の向上が図れるよう意識している。		
		2019年4月～現在	薬品化学研究室に配属された学生の卒業研究指導を担当している。日々の実験の考察と議論において、薬剤師国家試験に必要な知識や論理的思考力の養成を図っている。また、希望者に独自の演習課題を課しており、意欲的な学生が更に深く学べるような指導を心がけている。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別		内容	
Yasui, M.; Inoue, M.; Nakao, K.; Takeda, N. Ueda, M.		論文		J. Org. Chem. 2021, 86, 15498-15508 (2021). "Sc(OTf) ₃ -Catalyzed Iodocyclization/Ritter-Type Amidation of <i>N</i> -Alkoxypropionamides: A Synthetic Strategy for Isoxazol-3(2 <i>H</i>)-ones"	

Konishi, K.; Yasui, M.; Okuhira, H.; Norihiko T.; Ueda, M.	論文	Org. Lett., 22, 6852-6857 (2020). "Copper-Catalyzed Sequential Cyclization/Migration of Alkynyl Hydrazides for Construction of Ring-Expanded N-N Fused Pyrazolones"
Yasui, M.; Yamada, A.; Tsukano, C.; Hamza, A.; Pápai, I.; Takemoto, Y.	論文	Angew. Chem. Int. Ed., 59, 13479-13483 (2020). "Enantio/Diastereoselective Synthesis of α -Alkoxybutenolide by Dynamic Kinetic Resolution Using Chiral Thiourea-Quaternary Ammonium Salt Catalyst and Its Application to the Stereoselective Synthesis of Strigolactones"
Yasui, M.; Ota, R.; Tsukano, C.; Takemoto, Y.	論文	Org. Lett., 20, 7656-7660 (2018) "Synthesis of cis/all-cis-substituted cyclopropanes through stereocontrolled metalation and Pd-catalyzed Negishi coupling"
Yasui, M.; Ota, R.; Tsukano, C.; Takemoto, Y	論文	Nat. Commun., 8, 674 (2017) "Total synthesis of avenaol"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
環状N-アルコキシプロピオール酸アミドの開環 - 官能基化によるイソオキサゾロン合成法の開発	2021年10月	第47回反応と合成の進歩シンポジウム
金触媒を用いたオキシアリアル化によるイソオキサゾロン合成法の開発	2021年8月	第41回有機合成若手セミナー
N-N結合とシクロプロパンの開裂を伴う[3, 3]-シグマトロピー転位を介した還元的インドール合成法	2021年3月	日本薬学会第141年会
ストリゴラクトンの立体選択的合成を志向したチオウレア - 第四級アンモニウム塩触媒を用いる不斉アセタール化反応	2020年9月	第62回天然有機化合物討論会
Total Synthesis of Avenaol, a Non-canonical Strigolactone	2020年8月	Reaxys PhD Prize Symposium 2020
3. その他		
演題名	発表年・月	学会名
Avenaolの全合成と不斉 α -アルコキシブテノリド合成法の開発	2019年10月	第69回日本薬学会関西支部総会・大会 (受賞講演)
学会等および社会における主な活動		
2014年～現在に至る	日本薬学会会員	

安井

2016年～現在に至る	有機合成化学協会会員
2021年～現在に至る	日本化学会会員

専任教員の教育・研究業績

所属	製剤学研究室	職名	助教	氏名	田中 晶子
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）				
	アクティブラボ	2018年4月～	3年次生を対象に薬物動態関連の研究を行い、研究の面白さと研究室の雰囲気を感じてもらうように工夫している。		
	創薬物理薬剤学	2021年4月～	教科書のポイントをまとめ、重要単語を記入できるように工夫したパワーポイントを用いて授業を行っている。		
	製剤学・薬剤学実習	2018年4月～	3年次生後期の薬剤学・製剤学実習において、製剤試験法についての指導を行っている。		
	卒業研究	2018年4月～	製剤学研究室に配属された4、5、6年次生に対し、卒業研究の指導を行っている。卒業研究を通して、問題解決能力・プレゼンテーション能力等を養うことができるように指導している。		
2	作成した教科書、教材、参考書 特になし				
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等 特になし				
4	その他教育活動上特記すべき事項 特になし				
研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別		内容	

Akiko Tanaka, Tomoyuki Furubayashi, Yuki Enomura, Tomoki Hori, Rina Shimomura, Chiaki Maeda, Shunsuke Kimura, Daisuke Inoue, Kosuke Kusamori, Hidemasa Katsumi, Toshiyasu Sakane, Akira Yamamoto	論文	Biol. Pharm. Bull., 2017, 40(2), 212-219. "Nasal Drug Absorption from Powder Formulations: Effect of Fluid Volume Changes on the Mucosal Surface."
Akiko Tanaka, Tomoyuki Furubayashi, Manami Tomisaki, Mayuko Kawakami, Shunsuke Kimura, Daisuke Inoue, Kosuke Kusamori, Hidemasa Katsumi, Toshiyasu Sakane, Akira Yamamoto	論文	Eur. J. Pharm. Sci., 2017, 96, 284-289. "Nasal drug absorption from powder formulations: The effect of three types of hydroxypropyl cellulose (HPC)"
Akiko Tanaka, Tomoyuki Furubayashi, Mari Arai, Daisuke Inoue, Shunsuke Kimura, Akiko Kiriya, Kosuke Kusamori, Hidemasa Katsumi, Reiko Yutani, Toshiyasu Sakane, Akira Yamamoto	論文	Mol. Pharm., 2018, 15, 1105-1111. "Delivery of Oxytocin to the Brain for the Treatment of Autism Spectrum Disorder by Nasal Application"
Tanaka A., Takayama K., Furubayashi T., Mori K., Takemura Y., Amano M., Maeda C., Inoue D., Kimura S., Kiriya A., Katsumi H., Miyazato M., Kangawa K., Sakane T., Hayashi Y., Yamamoto A.	論文	Mol. Pharm. 2020, 17, 32-39. "Transnasal Delivery of the Peptide Agonist Specific to Neuromedin-U Receptor 2 to the Brain for the Treatment of Obesity"
田中晶子、坂根稔康	著書	第3章 鼻腔内投与によるペプチド性医薬品の脳内送達「次世代中分子創薬におけるDDSの実用化と展望」月刊ファインケミカル, 50(6), 11-16(2021)シーエムシー出版.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
鼻腔内投与によるOxytocinの脳への移行と移行後の脳内動態	2021年3月	日本薬学会第141年会
鼻腔-脳間の直接的薬物移行経路を利用した薬物の脳内送達 - 薬物の物性と投与剤形との関係 -	2021年5月	日本薬剤学会第36年会
鼻腔-脳間の直接的な薬物移行機構の解析: 投与部位と脳内濃度との関係	2021年5月	日本薬剤学会第36年会
中分子ペプチドを利用した新規肥満治療法の開発(2): 鼻腔内投与後の脳移行性に対する脂肪酸化学修飾の影響	2021年6月	第37回日本DDS学会学術集会
中分子ペプチドを利用した新規肥満治療法の開発(1): 鼻腔内投与後の脳移行性に対するペプチドの安定性の影響	2021年6月	第37回日本DDS学会学術集会

田中 晶子

学会等および社会における主な活動	
2010年10月～現在に至る	日本薬学会会員
2011年3月～現在に至る	日本薬剤学会会員
2015年3月～現在に至る	日本DDS学会会員
2019年4月～現在に至る	日本医療薬学会会員

専任教員の教育・研究業績

所属 衛生化学研究室	職名 助教	氏名 中山 啓
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） 衛生薬学実習 衛生薬学III	2021年4月～ 2021年4月～	実習に関しては、各実習項目ごとに教員と学生でディスカッションを行い、思考力の向上につながるように努めている。また、身近なものを例に挙げ学生自身が深く考えるきっかけを与えるように工夫を凝らしている。講義課目に関しては、要点をまとめた独自プリントを作成することにより学ぶべきポイントをとらえやすくできるように工夫した。また演習問題を作成することで講義の理解度をはかることができるようにし、効率的な復習に結びつくようにした。
2 作成した教科書、教材、参考書 授業用プリント	2021年4月～	衛生薬学IIIと環境衛生学で用いる授業プリントを作成した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Imajo M, Kondoh K, Yamamoto T, Nakayama K, Nakajima-Koyama M, Nishida E.	論文	Mol. Cell. Biol. 37: e00012-17, 2017. "Antagonistic interactions between ERK MAP kinase and retinoic acid receptor signaling in colorectal cancer cells."
Nakayama K, Ohashi R, Shinoda Y, Yamazaki M, Abe M, Fujikawa A, Shigenobu S, Futatsugi A, Noda M, Mikoshiba K, Furuichi T, Sakimura K, Shiina N.	論文	eLife. 6: e29677, 2017. "RNG105/caprin1, an RNA granule protein for dendritic mRNA localization, is essential for long-term memory formation."

Nakayama T, Okimura K, Shen J, Guh YJ, Tamai TK, Shimada A, Minou S, Okushi Y, Shimmura T, Furukawa Y, Kadofusa N, Sato A, Nishimura T, Tanaka M, Nakayama K, Shiina N, Yamamoto N, Loudon AS, Nishiwaki-Ohkawa T, Shinomiya A, Nabeshima T, Nakane Y, Yoshimura T.	論文	PNAS. 117: 9594-9603, 2020."Seasonal changes in NRF2 antioxidant pathway regulates winter depression-like behavior."
Hasegawa H, Kondo M, Hohjoh H, Nakayama K, Segi-Nishida E	論文	BPB Reports 3: 208-215, 2020 "C-C Chemokine Receptor 5 (CCR5) Expression in the Infarct Brain of the Photothrombosis Mouse Model"
2 . 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
RNA顆粒構成因子RNG105は、シナプス後部形態の可塑的变化を制御し、記憶形成に必要である	2017年12月	2017年度生命科学系学会合同年次大会
RNG105, an RNA granule-associated RNA-binding protein, regulates the structural plasticity of spine and is required for memory formation	2018年7月	第41回 日本神経科学大会
RNG105/caprin1, an RNA granule protein, regulates structural spine plasticity and is required for long-term memory formation	2018年11月	The 48th Annual Meeting of the Society for Neuroscience
飢餓ストレス下での脾臓退縮におけるマクロファージの役割	2021年9月	フォーラム2021 衛生薬学・環境トキシコロジー
学会等および社会における主な活動		
2005年～	日本分子生物学会会員	
2015年～	日本神経科学学会会員	
2018年～	北米神経科学学会会員	
2021年～	日本薬学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 機能性分子化学研究室	職名 助教	氏名 寶田 徹
教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Toru Takarada, Mawaddah Ar Rochmah, Nur Imma Fatimah Harahap Masakazu Shinohara, Toshio Saito, Kayoko Saito, Poh San Lai, Yoshihiro Bouike, Yasuhiro Takeshima, Hiroyuki Awano, Ichiro Morioka, Kazumoto Iijima, Hisahide Nishio*, Atsuko Takeuchi	論文	SMA mutations in SMN Tudor and C-terminal domains destabilize the protein <i>Brain and Development</i> , 39: 606–612. (2017)
Shogo Takeda, Hiroshi Shimoda, Toru Takarada, Genji Imokawa*	論文	Strawberry seed extract and its major component, tiliroside, promote ceramide synthesis in the stratum corneum of human epidermal equivalents <i>PLoS ONE</i> , 13: e0205061. (2018)

Kenji Sugawara, Kazuhiro Nomura, Yuko Okada, Aki Sugano, Masaaki Matsumoto, Toru Takarada, Atsuko Takeuchi, Hiroyuki Awano, Yushi Hirota, Hisahide Nishio, Yutaka Takaoka, Wataru Ogawa*	論文	In silico and in vitro analyses of the pathological relevance of the R258H mutation of hepatocyte nuclear factor 4 identified in maturity-onset diabetes of the young type 1 <i>Journal of Diabetes Investigation</i> , 10: 680-684. (2019)
Hiroshi Shimoda*, Shogo Takeda, Toru Takarada, Yurina Kato, Norihito Shimizu, Kazuya Toda, Masafumi Nakamura, Hiroshi Hanada, Seikou Nakamura, Hisashi Matsuda	論文	Hydroxypterocarpan with estrogenic activity in Aguaje, the fruit of <i>Mauritia flexuosa</i> (Peruvian moriche palm) <i>Bioactive Compounds in Health and Disease</i> , 2: 64-77. (2019)
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
The Application of Rice Oil-derived Phytochemicals - Potential Effect of Rice-derived Compounds on Skin and Muscle for Functional Foods and Cosmetics-	2018年5月	The 5th International Conference On Rice Bran Oil, Hanoi, VIETNAM
時計遺伝子を制御するパッションフラワーエキスの自発運動およびヒトの健康関連 QOL に及ぼす作用	2018年9月	第23回日本フードファクター学会合同学術集会（京都）
ペルー産オオミテングヤシ果実に含まれるエストロゲン活性成分に関する研究	2019年3月	日本薬学会第139年会（千葉）
胃癌に対する増殖型レトロウイルスベクターを用いた細胞死誘導型ウイルス療法	2021年12月	第44回日本分子生物学会年会（横浜）
学会等および社会における主な活動		
2013年5月～	日本薬学会 正会員	
2018年11月～	日本質量分析学会 正会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	生命有機化学研究室	職名	助教	氏名	平田 翼
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日		概要	
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別		内容	
Yasuhiro Yamashita, Hirotsugu Suzuki, Io Sato, Tsubasa Hirata, Sh Kobayashi		論文		Catalytic Direct-Type Addition Reactions of Alkylarenes with Imines and Alkenes Angew. Chem. Int. Ed. 2018, 57, 6896–6900.	

Tsubasa Hirata, Io Sato, Yasuhiro Yamashita, Sh Kobayashi	論文	Asymmetric C(sp ³)-H Functionalization of Unactivated Alkylarenes such as Toluene Enabled by Chiral Brønsted Base Catalysts Commun. Chem. 2021, 4,36.
Tsubasa Hirata, Yoshihiro Ogasawara, Yasuhiro Yamashita, Sh Kobayashi	論文	-Alkylation of Ketones with Alkenes Enabled by Photoinduced Activation of Silyl Enol Ethers in the Presence of a Small Amount of Water Org. Lett. 2021, 23, 5693-5697.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Catalytic Addition Reactions of Alkylarenes with Imines and Alkenes	2018年9月	The 9th International Forum on Chemistry of Funcional Organic Chemistry (IFOC-9)
強塩基触媒によるアルキルアレーンのイミンに対する高立体選択的付加反応の開発	2019年10月	第116回有機合成シンポジウム
エノールシリルエーテルを活用するアルケンによるケトン位のアルキル化反応の開発	2021年3月	日本化学会第101回春季年会
Development of C-C Bond Forming Reactions via Catalytic Activation of Less Reactive Pronucleophiles	2021年10月	第12回大津会議
Development of Addition Reactions of Ketones with Alkenes through Photo-Induced Activation of Their Enolates	2022年3月	日本化学会第102回春季年会
学会等および社会における主な活動		
2018年4月～現在に至る	日本化学会会員	
2019年6月～現在に至る	有機合成化学協会会員	
2021年10月～現在に至る	日本薬学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	生命分析化学研究室	職名	特任助教	氏名	木口 裕貴
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
分析化学系実習		2019.4.1～現在に至る	分析化学系実習では実験室を巡回し、実技指導や全体説明の補足を個別に行うことで、学生全員が実験の原理・原則を理解できるように努めている。		
アクティブ・ラボ		2019.4.1～現在に至る	アクティブ・ラボでは研究室配属前の低学年（2-3年生）の学生に対し、実際に研究室で行う実験の実技指導や原理の説明を国家試験と関連付けて行うことで、実験の楽しさや重要さを体感してもらえるように努めている。		
2 作成した教科書、教材、参考書			該当無し		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			該当なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項			該当なし		
研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別		内容	
Oyama H., Morita I., Kiguchi Y., Morishita T., Fukushima S., Nishimori Y., Niwa T., Kobayashi N.		論文		Biol. Pharm. Bull. 2017, 40(12), 2191-2198. "A single-step "breeding" generated a diagnostic anti-cortisol antibody fragment with over 30-fold enhanced affinity"	

Kiguchi Y., Oyama H., Morita I., Katayama E., Fujita M., Narasaki M., Yokoyama A., Kobayashi N.	論文	Biol. Pharm. Bull. 2018, 41(7), 1062-1070. "Antibodies and engineered antibody fragments against M13 filamentous phage to facilitate phage-display-based molecular breeding"
Oyama H., Kiguchi Y., Morita I., Yamamoto C., Higashi Y., Taguchi M., Tagawa T., Enami Y., Takamine Y., Hasegawa H., Takeuchi A. Kobayashi N.	論文	Sci. Rep. 2020, 10, 4807. "Seeking high-priority mutations enabling successful antibody-breeding: systematic analysis of a mutant that gained over 100-fold enhanced affinity"
Kiguchi Y., Oyama H., Morita I., Morikawa M., Nakano A., Fujihara W., Inoue Y., Sasaki M., Saijo Y., Kanemoto Y., Murayama K., Baba Y., Takeuchi A., Kobayashi N.	論文	Sci. Rep. 2020, 10, 14103. "Clonal array profiling of scFv-displaying phages for high-throughput discovery of affinity-matured antibody mutants"
Kiguchi Y., Oyama H., Morita I., Nagata Y., Umezawa N., Kobayashi N.	論文	Sci. Rep. 2021, 11, 8201. "The V _H framework region 1 as a target of efficient mutagenesis for generating a variety of affinity-matured scFv mutants"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
ナンセンス変異を持つscFv遺伝子産物の構造及び機能解析	2019年9月	日本分析化学会第68年会
免疫測定法の高感度化を目指す高親和力抗コルチゾール変異抗体の効率的創製	2019年10月	第69回 日本薬学会関西支部総会・大会
V _L 49番システインの置換による抗コルチゾールscFvの抗原結合能の変化	2020年3月	日本薬学会第140年会
V _H -FR1へのアミノ酸挿入による抗コルチゾールscFvの試験管内親和性成熟	2020年10月	第70回 日本薬学会関西支部総会・大会
免疫測定法の高感度化に資する高親和力変異抗体探索システム Clonal Array Profiling (CAP) 法の構築と応用	2021年10月	第71回 日本薬学会関西支部総会・大会
学会等および社会における主な活動		
2015年4月～現在	日本薬学会会員	
2019年1月～現在	日本分析化学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	医療薬学研究室	職名	特任助教	氏名	田中 亨
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） 卒業研究	2020年4月～	医療薬学研究室に配属された4,5,6年生を対象に卒業研究の指導を行なった。研究の背景や研究方針などを丁寧に説明し、理解を促すとともに自ら考えて研究を進められるように工夫した。		
	実務実習事前実習	2020年4月～	実務実習に向けて、疑義照会の流れや薬剤師としての対応をグループディスカッションやロールプレイを通して学んでもらうように指導した。		
2	作成した教科書、教材、参考書		該当なし		
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等		該当なし		
4	その他教育活動上特記すべき事項		該当なし		
研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別		内容	
Araki M, Hisamitsu T, Kinugasa-Katayama Y, Tanaka T, Harada Y, Nakao S, Hanada S, Ishii S, Fujita M, Kawamura T, Saito Y, Nishiyama K, Watanabe Y, Nakagawa O.		論文		Serum/glucocorticoid-regulated kinase 1 as a novel transcriptional target of bone morphogenetic protein-ALK1 receptor signaling in vascular endothelial cells. Angiogenesis. (2):415-423 (2018)	
Tanaka T, Izawa K, Maniwa Y, Okamura M, Okada A, Yamaguchi T, Shirakura K, Maekawa N, Matsui H, Ishimoto K, Hino N, Nakagawa O, Aird WC, Mizuguchi H, Kawabata K, Doi T, Okada Y.		論文		ETV2-TET1/TET2 Complexes Induce Endothelial Cell-Specific Robo4 Expression via Promoter Demethylation. Sci Rep. 8(1):5653 (2018)	

Izawa K, Shirakura K, Kakiuchi K, Funahashi N, Maekawa N, Hino N, Tanaka T, Doi T, Okada Y.	論文	PRC2 Components Maintain DNA Hypermethylation of the Upstream Promoter and Regulate Robo4 Expression in Endothelial Cells. Biol Pharm Bull .43(4):742-746 (2020)
Harada Y, Tanaka T, Arai Y, Isomoto Y, Nakano A, Nakao S, Urasaki A, Watanabe Y, Kawamura T, Nakagawa O.	論文	ETS-dependent enhancers for endothelial-specific expression of serum/glucocorticoid-regulated kinase 1 during mouse embryo development. Genes Cells (2021)
Tanaka T, Sasaki N, Rikitake Y	論文	Recent Advances on the Role and Therapeutic Potential of Regulatory T Cells in Atherosclerosis, J Clin Med (2021)
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
特定波長の紫外線B波による動脈硬化抑制効果とその機序の解明	2021年3月	日本薬学会第141年会
Identification of specific wavelengths of ultraviolet B for preventing atherosclerosis and their mechanisms of action	2021年9月	第5回日本循環器学会基礎研究フォーラム
動脈硬化抑制に有効な紫外線B波の波長の特定とその機序の解明	2021年10月	第53回日本動脈硬化学会
Development of a novel anti-inflammatory phototherapy against atherosclerosis	2021年10月	第19回国際動脈硬化学会
学会等および社会における主な活動		
2012年6月～現在に至る	日本薬学会会員	
2015年3月～現在に至る	エピジェネティクス研究会会員	
2021年3月～現在に至る	日本動脈硬化学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	病態生化学研究室	職名	特任助教	氏名	安宅 弘司
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		なし		
2	作成した教科書、教材、参考書		なし		
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等		なし		
4	その他教育活動上特記すべき事項		なし		
研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別		内容	
Iwai H, <u>Ataka K</u> , Suzuki H, Dhar A, Kuramoto E, Yamanaka A, Goto T.		原著		Tissue-resident M2 macrophages directly contact primary sensory neurons in the sensory ganglia after nerve injury. J Neuroinflammation. 18(1):227. 2021 三叉神経結紮モデルマウスにおいてM2マクロファージは神経節に直接コンタクトし感覚神経障害を修復する。	
Rokot NT, <u>Ataka K</u> , Iwai H, Suzuki H, Tachibe H, Kairupan TS, Cheng CK, Amitani H, Inui A, Asakawa A.		原著		Antagonism for NPY signaling reverses cognitive behavior defects induced by activity-based anorexia in mice. Psychoneuroendocrinology. 126, 105133. 2021 神経性食欲不振症（拒食症）モデルマウスにおいて神経ペプチドY（NPY）情報伝達を抑制することで認知認識機能の低下を改善する。	

Yagi T, <u>Ataka K</u> , Cheng KC, Suzuki H, Ogata K, Yoshizaki Y, Takamine K, Kato I, Miyawaki S, Inui A, Asakawa A.	原著	Red rice koji extract alleviates hyperglycemia by increasing glucose uptake and glucose transporter type 4 levels in skeletal muscle in two diabetic mouse models. Food Nutr Res. 64. 2020 インスリン依存性(1型)、インスリン抵抗性(2型)糖尿病の2つのモデルマウスにおいて、紅米麹エキスは骨格筋のグルコーストランスポーター4 (GLUT4)を増加させ糖取り込みを促進することで高血糖を改善する。
Ogata K, <u>Ataka K</u> , Suzuki H, Yagi T, Okawa A, Fukumoto T, Zhang B, Nakata M, Yada T, Asakawa A.	原著	Lavender Oil Reduces Depressive Mood in Healthy Individuals and Enhances the Activity of Single Oxytocin Neurons of the Hypothalamus Isolated from Mice: A Preliminary Study. Evid Based Complement Alternat Med. 2020, 5418586. 2020 ラベンダーオイルはヒトでのうつ様気分を改善し、マウス視床下部より単離したシングル神経細胞解析においてオキシトシン神経活動を活性化する。
Suzuki H, <u>Ataka K</u> , Asakawa A, Cheng KC, Ushikai M, Iwai H, Yagi T, Arai T, Yahiro K, Yamamoto K, Yokoyama Y, Kojima M, Yada T, Hirayama T, Nakamura N, Inui A.	原著	Helicobacter pylori Vacuolating Cytotoxin A Causes Anorexia and Anxiety via Hypothalamic Urocortin 1 in Mice. Sci Rep. 9, 6011. 2019 マウスにおいてピロリ菌産生毒素VacAは視床下部のウロコルチン1 (Ucn1)を介して摂食抑制と不安様行動を惹起する。
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
なし		
学会等および社会における主な活動		
なし		

専任教員の教育・研究業績

所属	微生物化学研究室	職名	特任助教	氏名	清水涼平
教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
アクティブラボ		2021年4月～	1～3年次生を対象に主に生化学的な研究方法について指導を行い、研究の面白さを感じてもらえるように工夫している。		
卒業研究		2021年4月～	微生物化学研究室に配属された学生に対し卒業研究の指導を行なっている。学生たちの論理的な思考力の向上に勤めている。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別		内容	
Keiichi Ishihara, Eri Kawashita, Ryohei Shimizu, Kazuki Nagasaawa, Hiroyuki Yasui, Haruhiko Sago, Kazuhiro Yamakawa, Satoshi Akiba		論文		"Copper Accumulation in the brain causes the elevation of oxidative stress and less anxious behavior in Ts1Cje mice, a model of Down syndrome." Free Radic. Biol. Med., 134, 248-259. (2019)	

Keiichi Ishihara, Ryohei Shimizu, Kazuyuki Takata, Eri Kawashita, Kenji Amano, Atsushi Shimohata, Donovan Low Takeshi Nabe, Haruhiko Sago, Warren S. Alexander, Florent Ginhoux, Kazuhiro Yamakawa, Satoshi Akiba	論文	"Perturbation of the immune cells and prenatal neurogenesis by the triplication of the Erg gene in model of Down syndrome." Brain Pathology, 30, 75-91. (2020)
Ryohei Shimizu, Keiichi Ishihara, Eri Kawashita, Haruhiko Sago, Kazuhiro Yamakawa, Ken-ichi Mizutani, Satoshi Akiba	論文	"Decrease in the T-box1 gene expression in embryonic brain and adult hippocampus of Down syndrome mouse models." Biochem. Biophys. Res. Commun., 535, 87-92. (2021)
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
DNAマイクロアレイ解析を用いたダウン症モデルマウスにおける脳発達遅滞の関連遺伝子の探索	2018年3月	日本薬学会第138年会
ダウン症モデルマウスにおける転写調節因子T-box1減少の病態意義に関する研究	2018年11月	第8回4大学連携フォーラム
ダウン症モデルマウス成体期表現型に転写因子 Ets-related gene の3コピー化が及ぼす影響	2019年3月	日本薬学会第139年会
Disturbed expression of inflammation-related genes caused by a triplication of Erg gene in the prenatal developing brain with Down syndrome.	2019年6月	The 3rd International Conference of the Trisomy 21 Research Society
分泌因子neudesinの脳梗塞における生理的役割の検討	2022年3月	日本薬学会第142年会
学会等および社会における主な活動		
2015年～2021年	Trisomy 21 Research Society会員	
2018年～現在に至る	日本薬学会会員	